THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿四年　第十一號

第二百四十八號



クラブ洗粉は皮膚の滋養品なり

醫師に問へ

斯の如きクラブの原料は皮膚に如何なる効果あるか諸士の信頼せる醫師に問へ

クラブ洗粉
最近の主要
原料

一、ミルク、フレーク（米國製）
一、クリモラ（米國製）
一、マスク（佛國製）
一、ボルネオール（獨乙國製）
一、ボリシツク、エシツド（日本藥局方）
一、精製せるソープパウダー（英國製）
一、藥用ソープ、パウダー（日本藥局方）
一、精製スターチ（米國製）
一、特製のスターチ（日本特産品）
一、ボラツクス（日本藥局方）

此の外に猶

特種の香料と美身的藥劑を配合し常に製品の改善に熱中しつゝあり

樺山伯爵題辭
長谷場衆議院議長題辭及び跋文
板垣伯監督の下に光永星伯の筆に成り一は宮內省に献納され一は
西鄕家の什寶たる南洲翁肖像及び筆蹟挿入

田中鐵軒編著

絶島の南洲

定價金五拾錢　郵稅六錢

本書は薩人にして新聞記者たること十餘年、記者社會に健筆を以て知らるゝ田中鐵軒氏が、蓋世の英傑西鄕南洲の謫居五ヶ年間の事蹟を、特殊の材料に據つて記述した珍書である。南洲は曾て自ら大島三右衞門と稱した、それは最初に大島の本島に流され、二度目に其の屬島たる德ノ島に流され、三度目に又他の屬島たる沖ノ永良部島に流されたからである。而して此の前後五ヶ年間の事蹟は頗る多端であつて南洲傳を讀む者に別段なる興味を供する筈である。けれども從來世に現はれた書籍には、一として十分に之を記述したものが無い。本書は此の點に於て獨擅的價値を示して居る。何となれば本書は沖ノ永良部島其他に殘つて在つた多くの特殊材料を自由に扱つて、最正確に、細大漏さず且つ極めて趣味豐富に記述した書てあるからてある。薩州出身の大官某氏は曾て言つた、南洲の眞面目は却て謫居中の彼に於て見るべしと。此の說の當否は別として、兎に角謫居五ヶ年間の南洲を描いて詳密正確斯の如き書は斷じて他に無い。英雄の傳記を讀むことを好む者は、必ずや此の書を愛讀書の一となすに至るであらうと信ずる。



大評判のいたづら小僧これの妹のおてんばと兩人のいたづら日記大評判

佐々木邦譯

第二十版 いたづら小僧日記　定價四十錢　郵稅四錢

新刊 續いたづら小僧日記　定價三十錢　郵稅四錢

第十版 おてんば娘日記　定價三十錢　郵稅四錢

高評嘖々

世界三聖傳

再版出來

大屋德城編著

釋迦

價壹圓貳拾錢　郵稅拾貳錢

『時事新報』評言一斑

曰く快利にして趣味ある筆、曰く評論頗る犀利、曰く殊に文學上の價値多し、曰く著者は學問の造詣深く東西各種の佛典に通じ居れるが如し、曰く最も信賴すべき書籍の一なり。

西脇玉峰編著

孔子

定價金壹圓　郵稅拾貳錢

『東亞之光』評言一斑

曰く積年の研鑽を披瀝す、曰く引證該博用意周到、曰く著者の新說多し、曰く著者の造詣を知る、曰く孔子を研究せんと欲せば先づ本書より入るを要す。

松本赳編著

基督

價壹圓貳拾錢　郵稅拾貳錢

『護教』評言一斑

曰く著者の如きは洵に基督を傳するに適せり、曰く簡潔なる筆、趣味深き記述、曰く基督教文學の爲めに本書の出版を慶賀す、曰く吾人は斯の眞書を世に推薦するに躊躇せざるなり。

版元　東京巣鴨郵便區染井傳中山縣邸內　振替貯金口座東京第三百五十五番　內外出版協會

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

英國男爵ヱヴベリ卿ジョンラボック博士著
正木照藏先生譯述

人生の妙味

大版上製金文字入
洋装頗美本
正價八拾錢（郵税八錢）

人生の行路を照す新光明精神界廓清の新福音書出づ

本書はジョン、ラボック博士の名著を譯述せるもの。博士識高く兼て人生の機微に通じ、品性最も高潔也。本書は先生の大著を譯述したるもの也。全篇廿章悉く實際的の名説卓論にして幽遠の旨を通俗の文に寓し、艱深の義を淺易の辭に托す、洵に是れ名教に資すべき近來の快著、譯文華麗穩雅也。

人の一生は如何なるものか如何にして世を渡るべきか人生の幸福は如何にして得べきか、是れ本書の詳細説述する所也。

最新發行　青年必讀

東京京橋區南紺屋町（電話新八七四）
實業之日本社
（振替口座參貳六番）

此廣告によりお申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

田山花袋

新作

田舎教師

岡田三郎助畫

齋藤松洲裝畫

菊判紙數五百四十頁

定價壹圓六十錢

送費金八錢

東京神田富山町

佐久良書房發行

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

志賀重昂君著

是れ日露大戰役の發端より終局（韓國に於ける日本人の扶植及配布）に至るまでの事實上の日記なり

大役小志

或は劍花彈雨、或は絕海の無人島或は闇黑樺太の蹈査、或は韓八道の騎馬旅行或は兩國陛下の謁見、政治、外交、軍事、經濟、藝文寫し出して字々生動し爽氣人に迫り來る。人物、地區、光線、色彩、背景に最も意を用ひたり。史家、兵家、教育家、畫人、詩人等の好參考書たり。

全一册大判上製
函入莊重堅實
千三百八十四頁
挿畫、寫眞版
石版畫、地圖等
三百二十四箇

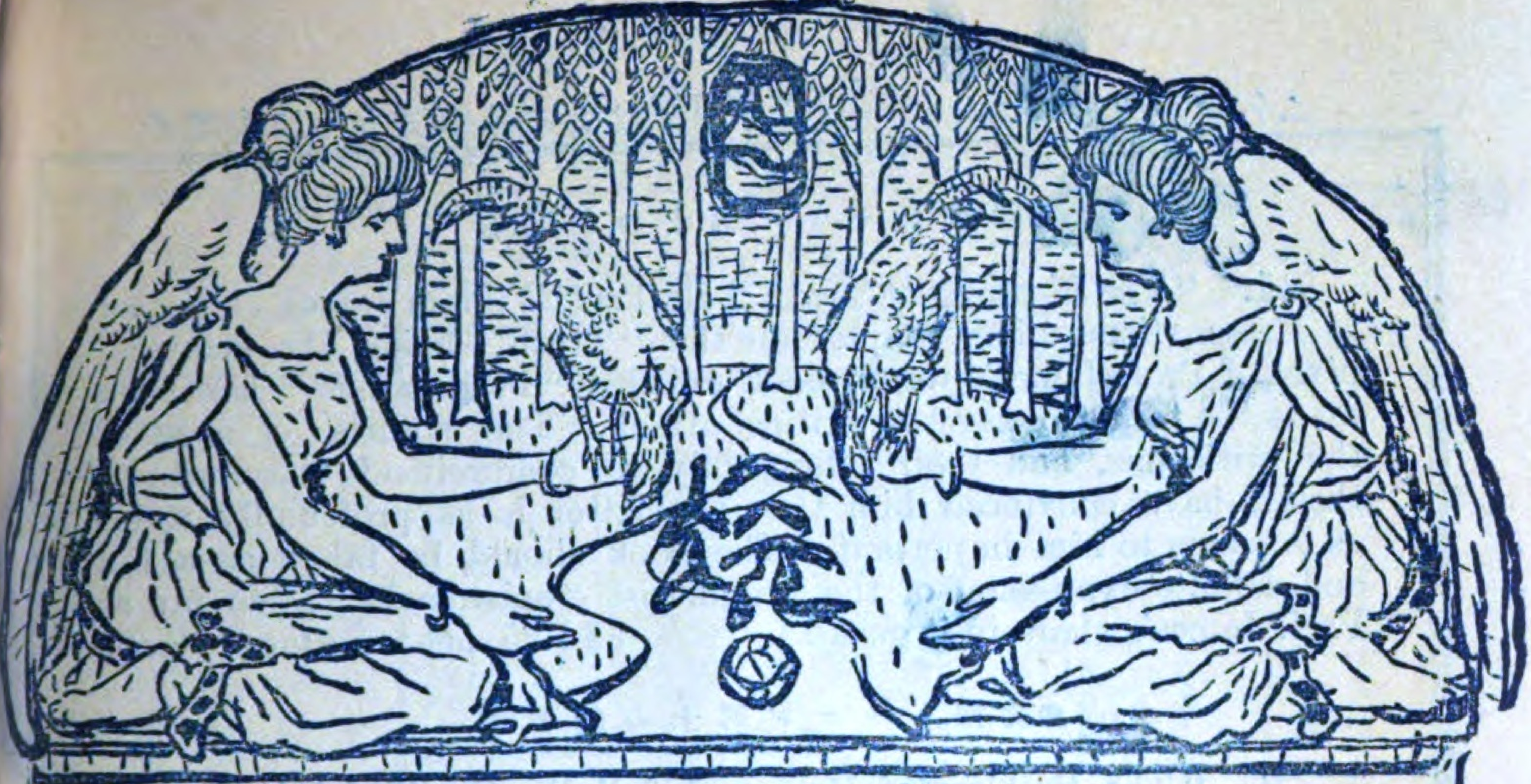
特價發賣
正價金五圓◎特價金四圓 限期十一月卅日（製本出來）
期限後は正價に復す 本月上旬より順時發送
送料東京市內四錢市外各地廿錢臺灣樺太淸國韓國各五十錢

野戰郵便監査 樋畑雪湖畫伯畫
陸軍恤兵部員 石原白道畫伯畫
大本營海軍部囑托 光村利藻君撮影
日露樺太境界劃定委員等撮影
露國將校撮影 韓國寫眞班撮影

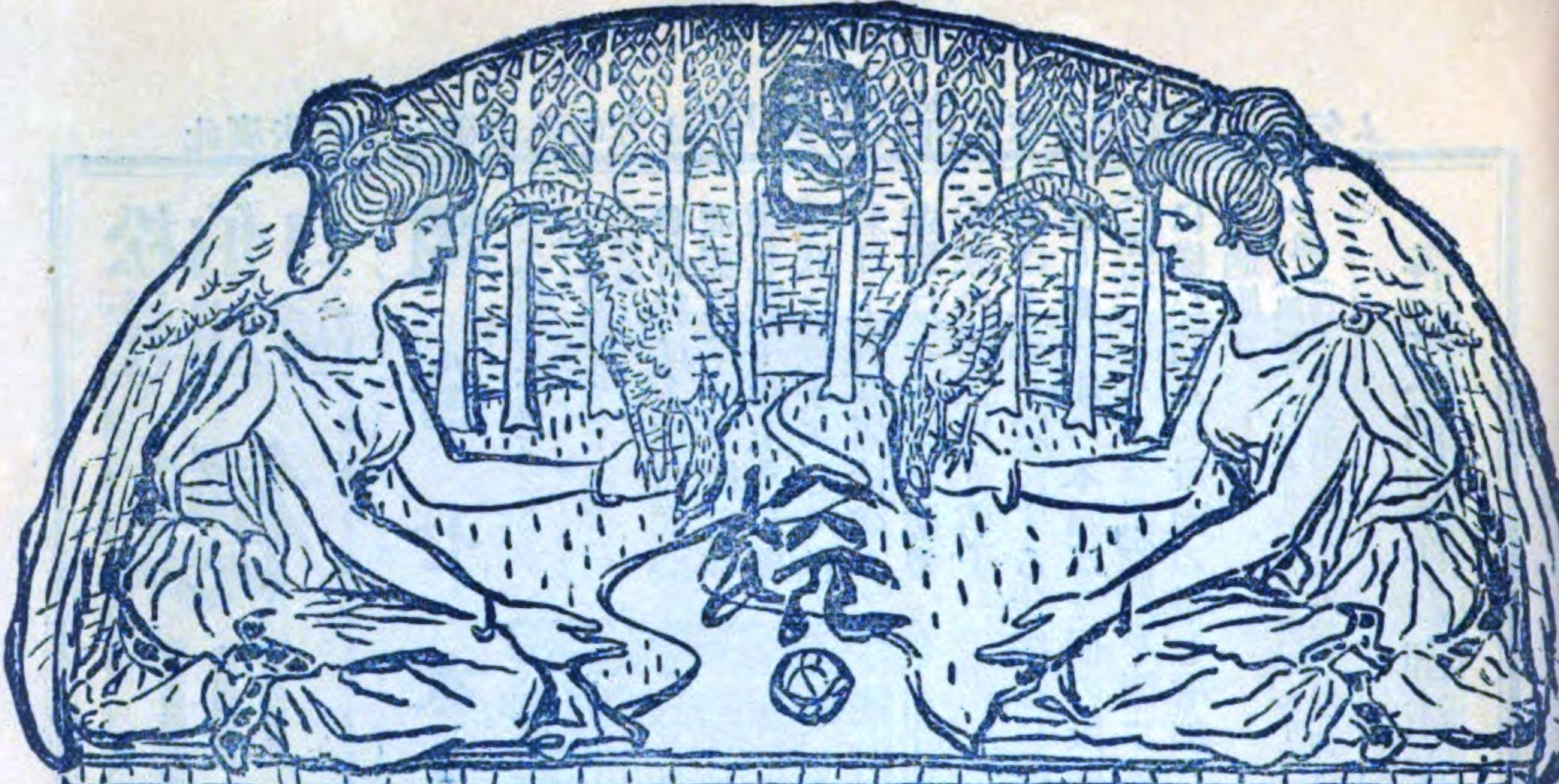
滿洲丸海軍根據地＝旅順口攻圍軍＝戰時の日本各府縣巡遊＝樺太上陸軍＝沿海洲上陸軍＝鹵獲軍艦松江大東島巡航＝日露樺太境界劃定＝戰後の韓國韓國巡遊＝現在の韓國日本人配布等

發兌 東京本町 博文館　東京神田 東京堂

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す



中央公論第二十四年第拾一號目次



永井荷風論

松林伯知口演

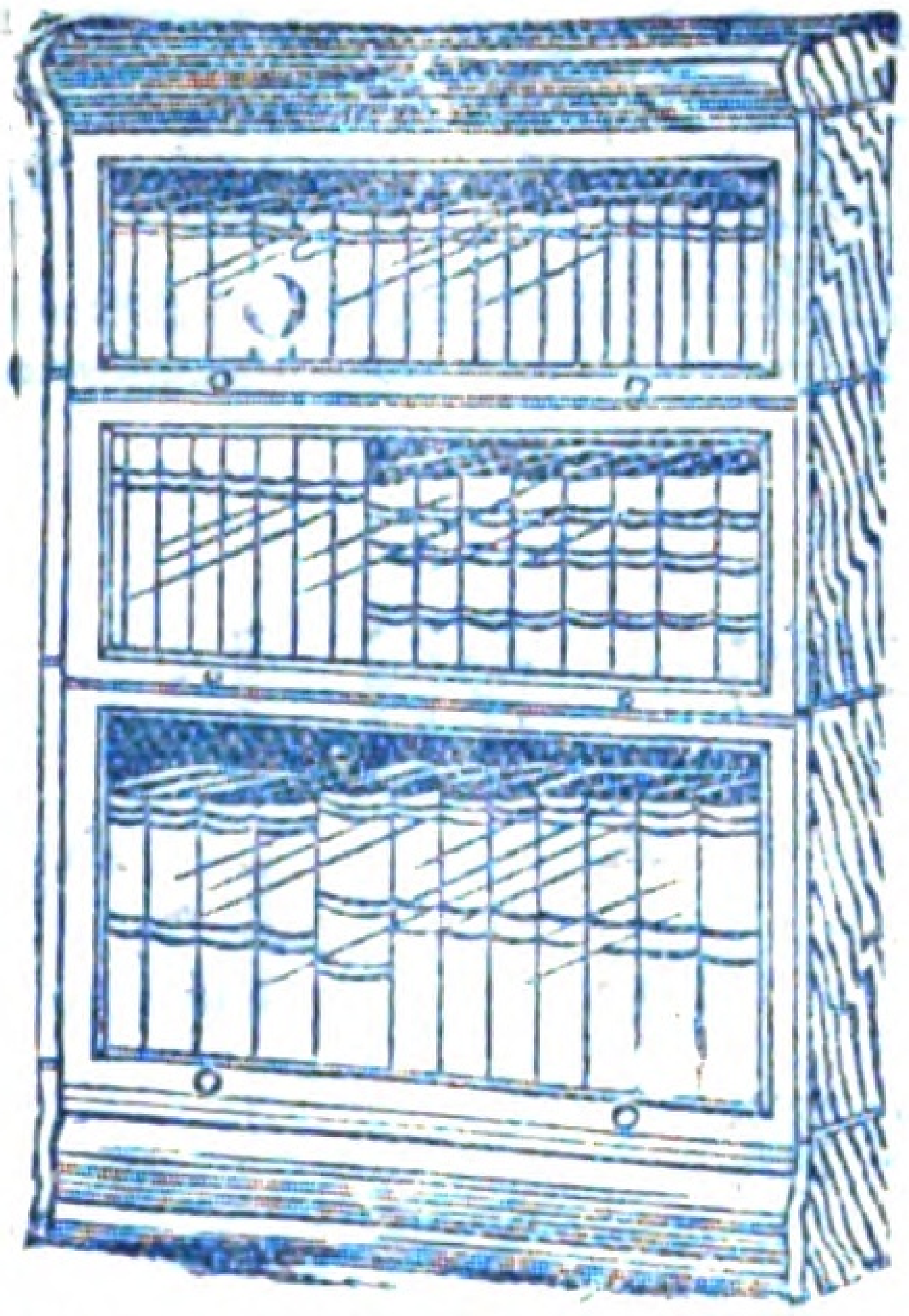
徳川榮華物語

前篇 松の巻 竹の巻 梅の巻
後篇 松の巻 竹の巻 梅の巻
續編 椿の巻

定價各冊金五拾錢〇郵税各冊六錢

組合セ本箱（最新式特製）

歐米諸國に大流行のセクショナル、ブック、ケースよりも數等進歩したる者にして特徴は●材料は上製には櫻並製にはナラ樫を精選し堅牢此上なし●形狀は優美にして色彩は上製は紫檀塗り並製はハイカラ塗●在來の函と異り硝子戸は上部へ隱沒する仕掛なれば書冊及帳簿の出入に便なり●一組の本箱は三個の段函を重ね之に別にトップ（屋根）とベース（脚底）を附するものなれば藏書の増加に從ひ随意に段函の數を増加し得べく、如何なる室にも適應すべし

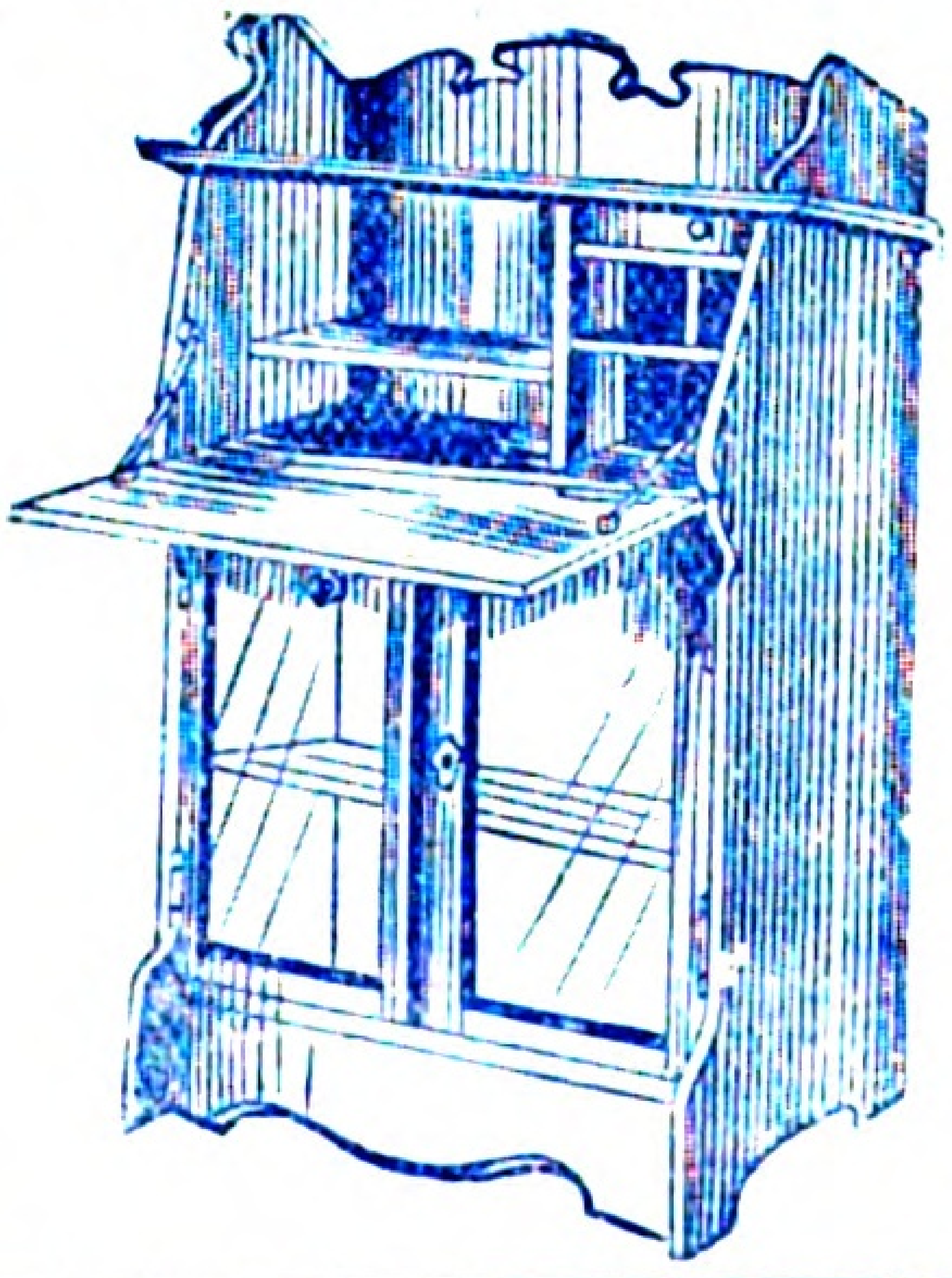


一組（總高サ三尺九寸五分、奥行九寸四分、間口三尺上製金參拾圓（荷造費金壹圓）並製金貳拾七圓（荷造費不要）地方運賃御自辨

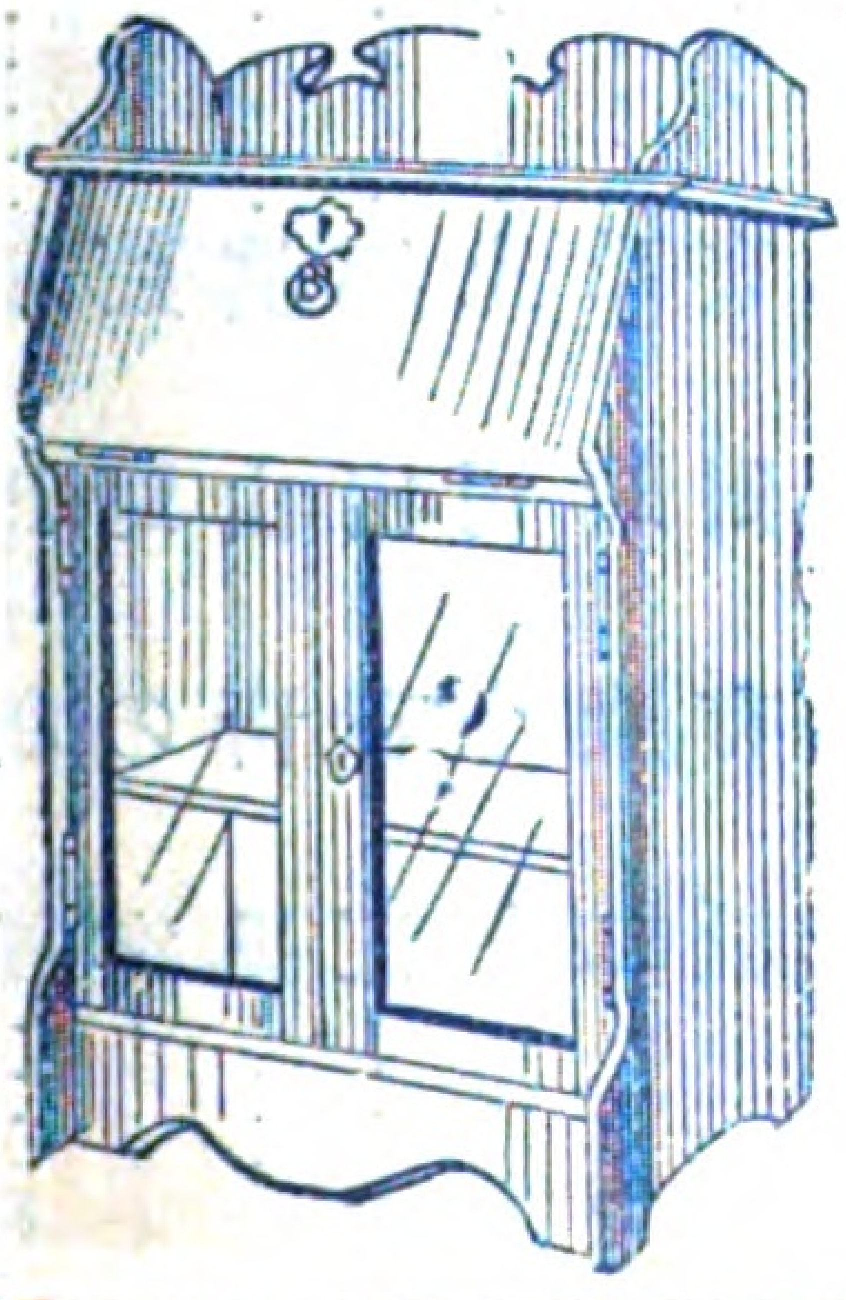
理想のデスク（本箱と机の兼用）

●本箱一個の價を以て机をも併せ得らるゝ者なれば最も經濟的也●上部本棚の戸は開閉自由にして開けば机板なり、用終りて閉づれば元の戸となる故、如何なる狭小の場所にも用ひられ室内面積上の經濟最も大なり●本箱に藏するものは机上に備ふると同じき故、日常必要の書冊帳簿書信材料其他一切の物を最も手近に排置し得て之を他より持來る勞と時を節する事著し●實用的なると同時に色彩形狀頗る美麗にして優に室内装飾たるに足る●一個高サ四尺四寸、間口二尺二寸、奥行一尺●上製（櫻製紫檀塗）金貳拾圓並製（ショーヂ製ハイカラ塗）金拾七圓荷造費壹圓參拾錢地方運賃自辨

（本箱と机に兼用の圖）



（本箱に專用の圖）

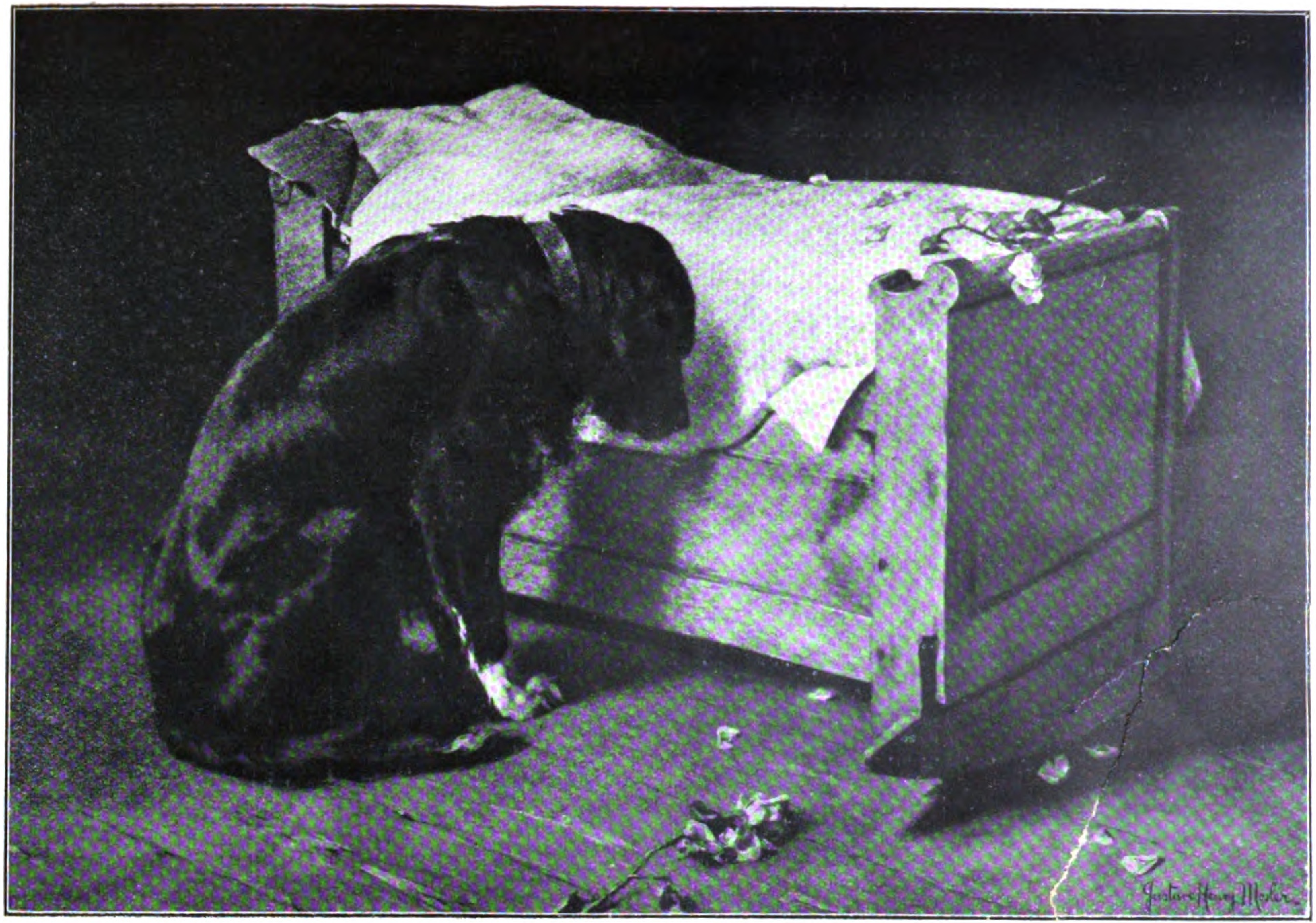


各種本箱製作の御注文に應ず

東京銀座大通新橋際（電話新橋三六七七 振替貯金口座二百番）

新橋堂書店 發賣

The Lost Playmate



JUSTAVE HENRY MOSLER

伊藤公の凶死を吊す

十月十四日大磯の邸を發して滿洲に渡航せる伊藤公は、大連、旅順、奉天に、到る處平和の宣傳に努めしが、廿六日朝哈爾賓停車場に於て、韓國兇徒のため狙撃せられて、即時薨去したり。

此の悼むべき兇報に對しては、世界を擧げて哀傷せざるは莫かるべし、我が　皇上は國家の柱石を喪ひたりとして殊に袞龍の御袖を沾ふさせ玉へるなるべし、我が國民は慘たり、悄たり、殆んど言ふ所を知らざるが如し、公が中興の皇謨を翼賛し、日本をして竟に今日に至らしめたる偉勳鴻績は、千秋に光輝を垂る、殊に其の末路の悲慘なるに於て、國民の同情限りなくして、聲名益々不窮なるべし、菅原道眞が寃死に由て千歲に祀らるゝを看よ、北白川宮殿下が臺南に戰死し玉ひて、英魂永く臺灣神社と崇められ玉ふを思へ、公死すと雖も、公の勳業は不朽也、世界に傳へて無窮也。

公の死は其の影響小ならず、我が政治上に於て最も然り、公の偉人たる、茲に於てか亦十二分に看取せらる。

公の滿洲行に由て中外に期待せられし處は、竟に如何の結果を示すや、全く示すに至らずして已むや、公國事に鞅掌する五十年、忠誠曾て渝らず、眞に人臣の範たり、今にして俄かに之を喪ふ、最も惜むべし、乃ち涕涙を墨として茲に聊か吊意を表す。



第二十四年
第拾壹號
第二百四十八號

桂侯は經世家乎政略家乎

（一）

最良の政治は、國家の正義を維持して國民を最善最正の方向に指導するに在り。故に最善なる政治家は經綸の大策を懷き、自から衆愚に殉ぜずして其の先頭に立ち、常に國民を指導す、其の元首專制政體たると、代議政體たるとは素より問ふ所にあらざる也。

經世の大綸を抱持して常に國民を指導するもの之を經世家（ステーツマン）といふ、彼の衆愚に殉じ、人氣に投じて自ら時の宜しきに從ひ、權略を以て一時の形勢を制するが如きは、畢竟政略家（ポリチシアン）のみ、經世家は以て尊重すべきも、政略家は然かするに足らず。

今の世果して政略家ある乎、曰く大に有り、政黨政治家の如きは多くは是れ也、然らば則ち經世家ある乎、曰く或は之あらん、但し吾人の寡聞にして而して淺見なる、未だ多く之を知らざるを遺憾とするのみ。

更らに最も露骨に問はん、今の內閣には經世家ありや、少くも首相桂侯は以て經世家たるに足るや、曰く、此の答に代はるに下の辨說を以てせしめよ、吾人は是れ以上未だ的確に斷言するを得ざる也。

（二）

今の群政治家中に在て、總理大臣たるに足るものは第一に桂、西園寺の二侯を推さゞるを得ざるべし、西園寺侯は其の門葉の高くして而して至尊の御信任を亨くるの渥さ、且つ人物の高邁にして器度の俗流に超絕せる、野獸に近き黨人を統御するの特能ある、實に一個天成の總理大臣たり、然り、多くの彫琢を要せずして、裕に總理大臣たる風度あり、政治家としては聊か執着力に乏しく、反撥性を缺如すと雖も、當世得易からざる總理大臣たり、桂侯は其の初めて總理大臣の印綬を佩ぶるや、世を擧げて第二流以下の內閣と侮蔑したりしに似ず、內は閣僚の一致を保つの鞏固にして、外は元老を待ち政黨を繰つるに卷舒其の妙を極め、且つ英國と同盟し、露國と戰ふて軍略財政兩つながら其の宜しきを失はざりしが如き、非凡の技倆と甘味ある遣口とは、一世をして殆んど我を忘れて贊嘆せしめ、同時に第一流の大政治家たる榮譽の冠冕は、其の頭上より搖かざるに至れり。

今にして此の二侯を軒輊する聊か早計に失すと雖も、西園寺侯は風格を以て優り、桂侯は技倆を以て

勝さり、共に現時最良の總理大臣として、恰かも鷄群の鶴たり鷹たると何人も之を否定し得べからず。

吾人は西園寺侯が其の財政計畫に於て困屯し、一面には無策を暴露すると共に、一面には又無識を表明したりしを恨事とす、所謂無識とは、阪谷、山縣の兩氏の辭職したる時に方つて、斷乎として其の進退の大節を彰はさず、强ひて一時を糊塗して以て總選擧期に至れるをいふ、自個の內閣の下に總選擧を行ふがため、國務大臣の大節をすら犧牲にしたりしは、平生執着の薄きに似ずと雖も、然かも何の目的に由て然りし乎、公平なる理想的總選擧を行ふて範を後に垂るゝがため乎、抑もまた自黨の多數を得るがため乎。前者ならば公なれども、後者ならば私也、吾人は未だ西園寺侯當時の心事を解剖して謬らざるの說を得るに至らずと雖も、世俗の多數は以て後者とし、此がため大臣の大節を犧牲にして而して財政の塩梅依然として不良なりと做し、益々其の望みを絕ちたりしが如し、侯にして尙ほ執着せは、少くも今一ヶ年間政權を支持し得たらんと雖も、飄忽骸骨を乞ひ去れるは、勢ひの未だ窮せざるに方つて早く困屯を脫せしもの、始めて風格の凡ならざるを示しき。

之に代れる桂侯は、果して無策にはあらざりき、正さしく確然たる政綱を懷持したりき、西園寺內閣の困屯したりし財政に對して、所謂大斧鉞を下して繰延を敢てし、以て前途の難境を拓くと共に、財政上の大困厄が巨額なる國債にあるを知り、鋭意して其整理に力を致し、一面には償還の基礎を堅くすると共に、其の年限を速め、且つ成し得べくんば低利に借換ゆるの便宜を得んがために、公債價格を昂上せしむると、我が財政の信用を恢復するとに鋭意したりき、幸ひにして其の効果の的確なりしことは、現に世人の

目撃する所とす。

之を以て之を揣るに、政治家として桂侯が西園寺侯を拔く數等なることは、今や何人も之を否認し得ざるべし、但だ知らず、桂侯は果して經世家と稱するに足る乎。

（三）

明治四十三年度の財政計畫に於て、桂侯は尙ほ公債整理の方針を繼續して益々其の償還額を增加すると共に、一面に二千萬圓の剩餘を生じ、一面に行政整理を斷行して之より得べき約五百萬圓を合算し、之を以て租稅の輕減と官吏の增俸とを實行せんと期するもの丶如し、所謂租稅の輕減は、所得稅の低減と市内通行稅の廢止とを主とし、一般の租稅に涉りて改正を加ふるに在り、官吏增俸は通じて約三割を增加するに在りといふ。

戰時稅は政府既に多少の無理あらんも、戰時の急に應ずるがため一時已むことを得ずして賦課するのみ、平和克復を待て之を撤去すべしと聲言し、國民また此の意を諒として枉げて應じたるもの、其の性質に於ても、政治上の德義としても、之を改廢する素より當然のみ、但だ戰後の經營事大にして、容易に國庫の收入を減ずるを許さゞるがために、悉く之を改廢するを得ず、最も不公平且つ苛繁なるものを廢改して、他は適度に之を存續すること必らずしも拒む可らず、即ち戰時稅を擧げて一切之を撤廢するを要せずと雖も、其の繁なるを改め、重きを減ずるの作用は當然之を行はざる可らず、此の時に方つて選擧區民の多數者たる農民に媚ぶるがため、地租輕減論を提唱し來れる黨人あり、國家の公に應ずるよりも、

寧ろ自黨の私に殉ぜんとするもの、恐らくば之を以て最も人氣を博すべき名案と做すなるべし。而して桂侯が之に處する如何は、最も興味ある觀物也、侯も亦人氣を博するに力むること、殆んど黨人に讓らざるものあれば也。

世多くは桂侯を如才なしといふ、或は曰く、彼の公債整理は商工業家の希望也、官吏增俸は謂ふまでもなく官人の跂望する所也、而して租税輕減は一般國民の歡迎する所、桂侯は斯くして八方美人主義を振廻せり、地租輕減に由て多數農民の歡心を收むるに足らば、侯豈之を敢てせざらんやと。

茲に於てか吾人は轉じて桂侯に質問を提起せざる可らず、總ての階級の希望に應ずると素より政治の一要訣たるに相違なし、然れども其の全部にはあらざる也、且つ其の希望なるものが多くは私に殉ずるものたるに於て、國家は其の大體の利害より打算して應ずべきものは素より應ずべきも、然らざるものは斷乎として之を拒斥せざる可らず、一方に與ふるが故に一方にも與へざる可らずと做し、有らゆる階級の歡を買はんと欲せば、國家は却つて獨り其の弊を受けざるを得ざれば也。

英國の現內閣は、勞働者救濟のため、多くの養老金其の他を要するより、財政上の一難境に逢着すると共に、唯り其の勞働階級のためのみにするは、寧ろ社會主義を横溢せしむる所以なりとして、今や資本家及び貴族階級の非難を受けつゝあり、英國中流の意向若し一變せば、內閣の基礎また動搖せざるを得ざらんとす、凡そ國民を指導して經世の大綸を行はんとするもの此の邊に對して深く思はざる可らず、徒らに人氣を博するを智なりとするものは、竟に自から其の智に過たれたるを得ざるべき也。

（四）

物價騰貴に由て官吏が其の生活に窮せるは事實也、然れども官吏の生活を安易にする、單に增俸の外に策なしとする乎。

物價騰貴のために生活に苦むもの單に官吏のみに限らざる也、官吏は平生其の薄俸に苦むも、尙ほ位階勳等の名譽を附隨するものあるのみならず、其の勤續年限の永きに從つて恩給法あり、遺族扶助法あり、是れ皆民間者の有する能はざる特典なり、此の特典ある以上、官吏たるもの平生の薄俸に忍耐する所無かる可らざるや勿論也。

且つ事實に徵するに、今は文字を解して而して職を得ざるもの甚だ多し、東京市長尾崎氏の語る所によれば、同市役所に於て數十人の寫字生を募集したりし時、二千餘人の應募者ありき、其の履歷書を視るに實に堂々たる學校出身者多し、日當五六十錢の寫字生を募りてすら斯く多數の應募者あり、官吏の如きは假令增俸せざるも斷じて志望者なきを憂へずといへり、吾人は悉く之を首肯するものに非ずと雖も、また今日財政上の最大急務を以て官吏の增俸にありとも信ずる能はず。

歐洲の例に倣ふて官吏の所得税を免除するも可なり、最も可なるは通貨を收縮し、物價を低落せしむるに在り、斯くすれば生活の安易に由て其の德澤に潤ふもの單に官吏のみに止まらず、國民總て然る也、否、物價低落すれば輸出貿易增加す、輸出貿易の增加するは商工繁榮の明證也、桂侯は努めて政府の事業を節し、以て通貨を收縮し、以て物價を低落せしむべき根本政策を執るの考慮なき乎、吾人は先づ第

一に之を問はんと欲す。

（五）

吾人は鐵道國有の理に於て至當なるを承認せざる能はず、然れども國有後の鐵道經營に就て多くの疑問を存す、甚だしきは桂侯の内閣は眞正に產業發達の慮思を持して、其の正道を進みつゝあるや否やをすら疑はざるを得ざるものあり。

鐵道運賃を定むるには、列國共に愼重なる手續を重ぬるを例とす、或は議會の協贊を經ざる可らざるものあり、或は特設機關の諮詢に於て異議なきを確かめたる後、遞信大臣の認可を得ざる可らざるものあり、或は閣議の決定を經ざる可らざるものあり、而して大抵の國皆老熟なる實業家を會員として、鐵道運賃を議定せしむべき特設機關を有せざる莫し、然るに我が日本のみは、一の實業家の希望をすら聽取せず、單に鐵道建築に關する技術家の多數より成れる一鐵道院に於て、勝手に之を取極めて勝手に之を施行す、其の間時期に於ても手續に於ても、何等の制限あること莫し、何ぞ其れ無造作なるや、政府は鐵道運賃の產業の盛衰に何等影響する所なしとする乎、抑も又斯くして產業の發達を尊重する誠意ありとする乎。

國有鐵道の當局者は揚々乎として曰く、我等の時代に至てより遠距離運賃を著しく低減したり、是れ私有時代に見る能はざりし所ならずやと、然れども九州の貨物にして東京に至るもの幾許ぞや、青森の貨物にして馬關に至るもの幾許ぞや、門司、神戶（大阪）、東京（横濱）を中心として集散する貨物にして

何ぞ多く遠距離運賃の特典を享受し得んや、遠距離運賃の低減は全く有名無實のもの也、之を以て當局者の愚を廣告する可也、誇るに至ては其の愚や幾んど及ぶ可らざる也。

且つ運賃の不平均なるも亦た甚だし、即ち貸切扱運賃に於いて、舊日鐵、北越、北海道等の東北線は二錢三厘にして最も高く、之に亞ぐは東海道線の二錢、山陽線の一錢四厘にして、最も安きは九州線の九厘なりとす、更に石炭のみの運賃を視るも、常盤線は二錢五厘、九州線は一錢七厘四毛とす、是れ恐らくば私設時代の踏襲なるべし、然れども最も開けたる九州の運賃甚だ安くして、最も開けざる東北地方が其の二倍半以上の運賃を要するは顚倒の極ならずや。常盤線の石炭運賃高きがため、磐城炭を用ゆる諸工業會社は一時工事を減少若くば休止したるとありき、夫れ東北は高き運賃に苦められて十分に發達せざるものなりとも言はゞ言ひ得べし、政府にして眞に經綸の志あり、東北地方を開發せんと欲せば、少くも其の鐵道運賃に於て中國九州と同率ならしめざる可らず、鐵道は素より慈善事業にあらずと雖も、巳に國有として國家自から之を經營する以上、純然たる營利の域を脫し、地方開發の目的を以て、假令多少自から損失すとも、力めて運賃を引下げて以て產業の發達に資せざる可らず、桂侯は果して東北地方のため運賃を低落する心なき乎、生繭生糸の輸送のため、短距離に於ても特別の運賃を設けて以て其の發達を助くる心なき乎、山間の木材を搬出し、又は多くの輸出品を奬勵するがため、特別に運賃を設定する心なき乎。

米國政府は鐵道運賃の最低額を制限し、之を越ゆるものを嚴罰す、然る所以は他なし、大工業者大資

本家が、鐵道と特約して運賃に多くの割引を爲さしむる時は、小資本家小工業者を壓倒して竟に至らざるなきを恐れて也、然るに我が鐵道院は大なる荷主と秘密契約を結び、幾んど無制限の割引を行ふと聞く、是れ米國すら敢てせざる所を行ふ也、桂侯は產業の保護上果して之を弊なしとする乎。

桂侯は曾て商工業者と會合し、經濟改良を議する時、運輸交通上の利便を協議すると再三に及びたりき、然れども眞に運輸交通上の利便を開かんとすれば、必らずしも商工業者に諮るの要なし、直ちに遞信大臣、鐵道院總裁と議定して、即時之を斷行せば足る、記せよ、遞信大臣は侯の閣僚にして、而して鐵道院總裁は、總理大臣の管下にあるとを。

事茲に出でずして、再三商工業者の意向を問ふ、寧ろ徒らに商工業者の希望を容るゝと稱して、以て其の人氣を釣らんとする政略(ポリシー)にはあらざるなき乎、果して然らば吾人は敢て侯の今少しく眞面目(シリアス)なるとを望まざる能はざる也。

（六）

商人利を重んじて義を重んぜず、利の爲めには幾んど爲さゞる所莫からんとす、古より士農工商といひ、殊に商を最下位に措くは、必らずしも無意義に商を輕んずるに非ず、彼等利を重んじて爲さゞる莫く、其の人格最も低卑なるが故ならざらんや。

〜英國の商人は義と禮とを重んず、是れ世界の一異彩也。英國を除けば、孰れの國と雖も人格の最も低卑なるを商人とす、米國政治の調子の賤しきは商人の勢ひ殊に盛んなるが故のみ。

若し我が國の政權をして商人に歸せしめよ、我が政治界の腐敗墮落は其の極に達して、或は國礎を危くすることなきを保せず、是れ吾人の常に寒心する所とす。

農家減じて兵漸く弱きは史の證する所にして、商の兵となるや、怜悧なるも薄弱也、農兵の如き剛健質實の風あらず。富國望むべしと雖も、農兵減じて弱國となるは最も憂へざる可らず、況んや權勢總て商人に傾きて、政權竟に商人に歸するに至るをや、亡國の兆として深く警めざる可らざる也。

桂侯近時頻りに商工業者に親み、商人をして漸く得意を催ふさしめんとす、商業の盛大を致すと素より當今の急務なりと雖も、經世家は時に商人をして警め憚かる所を知らしむる見識なかる可らず、嚴に國家の正義を支持して苟くも許さゞるの器度なかる可らず、商業發達のためには、有らゆる便路を開かざる可らずと雖も、利を主とする商人をして、其の德性未だ完備せざるに早く名譽と權勢とを得せしむるが如きとは、經世上深く戒むる所なかる可らず。吾人は此の理由に基きて、桂侯が動もすれば商人の意を迎ふるが如き形迹あるを嘆惜す、動もすれば商人をして勢位を得せしめ、黄金萬能の風氣を煽するが如き傾向あるを痛嘆す、嗚呼是れ果して經世家の心を用ふべき點ならざる乎。

北條泰時嘗て武田信光と海野幸氏との境界爭ひを裁斷し、幸氏を直とす、武田は豪族にして勢ひ遙かに海野の上にあり、人或は武田の怨望を告ぐ、泰時曰く、人の怨みを恐れて曲直を分たずんば、何ぞ政治を爲す可けんやと、毫も顧慮する所なかりき、北條氏が身僅かに五位の宰臣を以てして、七世天下の權を握りて、然かも日本民政の模範と稱せらるゝ、豈此の正義支持の眞骨頭ありしが故ならずや、卓々

たる大臣大將にして、誰か其の心を乘ると一の泰時に及ばずと做す者ぞ。

人氣を取るにも素より程度あり、苟くも立憲政體として、多數を主とする以上、人氣を度外に措く可らざるや論なし、然れども人氣のために國家の正義を犧牲とす可らず、寧ろ正義を支持して一世の人氣を此の方向に指導すべし、是れ經世家當然の分也、唯だ人氣を取るを主とせば、勢力に媚び多數を迎へて竟に其の制する所と爲る、豪族を憚かりて其の曲も强ひて直と爲すに至る莫きを保せず、事苟くも茲に至らば政治の大本は全く敗る、經世家の尙ぶべくして而して政略家の卑むべき所以は茲に在り。

一種の恐米病

米國の富は、歐亞列國の驚魂駭魄する所にして、多くは其の大なるに眩ぜざるもの莫し、曰く米國の軍備恐るゝに足らず、然れども其の富を以て來り加へば最も怖るべし、其の富を以てすれば如何なる軍備も立ろに辨ず可ければなりと。

然れども少しく冷靜に考一考せよ、米國の富は然かく大なる乎、否、其の富は然かく恐るべき乎。

吾人をして聊かも遠慮する所なく語らしめよ、我が富豪の隨一なる三井家は、三井合名會社なるものを組織して、其の資本を五千萬圓としたり、而して此の三井合名會社なるものは、更らに株式會社なる三井物產（資本金二千萬圓）と三井銀行（資本金二千萬圓）とをホルドし、倘依倉庫、製紙其の他多數の株

式をホルドせり、三井の資本額が單に五千萬圓に止まらざることは何人も之を信ずと雖も、然かも其のホルドする所の株式資本をも加算するの其の實重複なることは、何人も之を否認せざるべし、換言すれば、三井合名會社の資本と物產と銀行及び其の他の株式とを加算するの重複なることは、多說せずして明白なるべし、然れども米國に在ては、此のホルドする所のものをも二重三重乃至其れ以上に加算するを例とす、例せば、一の富豪が一千萬弗を出資して一の株式會社甲をホルドすとするに、其の株式を利用して別に又一千萬弗以内の會社乙を組織し、其の乙會社の株式を利用して別に又丙會社を組織し、丙より丁戊に及び、少くも三四多きは十數、數十の會社を組織す、モルガン然り、ロックフェラー然り、ヒル然り、故に米國の會社資本なるものは少くも五六倍に算せらる、即ち其の實額は稱呼額の五六分の一と視るを至當とする也、一片の統計に於て米國の資本額が世界第一なりと稱する、寧ろ誇張のみ。

米國の保護稅は實に極度に達せり、此がため殆んど一切の輸入を杜絕して外國品を入れず、故に內に在てトラストなるもの勃興して勝手に其の價を高くす、故に米國人は價安き外國品を購ふを得ず、トラストのために餘儀なく高價を支拂はざるを得ずして、竟にトラストをして暴利を壟斷せしむ、故にトラストは陰かに大金を散じて政治家議員を買收し、法外なる保護稅を外國品に課して、到底米國に入ること能はざらしむ。

米國の工業なるものは、斯くして國內に多くの利を占むると雖も、一步國外に出てゝ外國品と競爭する力なし、偶々競爭するものあるも、米國內よりは遙かに安價を以て、他國と競爭せざるを得ざるが故

に、其の勢い微々として振はず、故に米國より輸出する原料品即ち農産物は少からずと雖も、加工品は幾んど見るに足るものなし、看よ、米國の加工品にして、何物が能く英佛獨の加工品と堂々世界に追逐し得るものぞ。

米國の産する原料品多しと雖も、其の地積に限りあるが如く、其の産出にも亦程度あり、唯だ加工品に至ては、貿易上最も恐るべきものなるも、米國には幾んど然るものあるとなし、貿易上より視て米國の富力を怖るべしとするものは、其の農産物と製作品とすら區別し得ざる眩迷者流のみ、貿易上に於て米國は寧ろ一種の弱者のみ。

米國の工業家は、外に縮みて單に内に延るのみ、俗語を以て評すれば、外凹みの内威張りのみ、比類稀なる高率の關税に隠れて、獨り自から得意とする者のみ、檻中の虎のみ、檻外に在る小兒も尚ほ笑つて手を拍たざるなし。

米人の長所、米國の强點を擧ぐれば、素より一にして足らざるや明けし、然れども其の弱點を指摘すればまた斯の如きあり、勿論之を輕侮す可らずと雖も、また戰々兢々として畏怖する謂れはあらず、淸國人の如く世界の情僞に通ぜず、單に國大なるもの富みて而して强しと做すが如き皮想者流に在ては、米國實に怖るべしと强も、苟くも眞相を看破するの明あるもの、何ぞ斯の如くす可んや、看よ、彼れは比律賓の如き豊饒なる土地を領有しながら、未だ我が臺灣の十分一の政績だも擧げ得ざるにあらずや、彼れには素よりワシントンの如く、リンコーンの如き尊重すべき大傑人ありき、然れどもデモクラット

もレパブリカンも、トラストの納金によりて其の黨勢を維持する今日に在ては、僅かに一匹夫のハーストさへ時に大統領の候補を爭はんとする程の今日にては、其の實價略々類推すべきにあらずや。吾人は曾て黃禍說の愚なるを嗤ふ、然れども恐米病の愚なるは、正さに其れ以上ならざるや。

吾人を以て徒らに奇矯の語を弄する者と爲す勿れ、恐米病の漸く膏盲に入らんとするを憂ふるが爲めに、乃ち此の直言を敢てするのみ。



南方亞細亞の明日

竹越與三郎

余が今回南方亞細亞地方海陸一萬三千里を旅行したる中に就て、最も余の注意を惹起したるものは、印度支那地方に於ける鐵道の發達であつた。即ち佛領印度の中にあつても柴棍、安南、東京等に鐵道のあることは豫て承知して居つた所ではあるが、今回親しく實地に就て目擊して一驚を喫したるは、東京(トンキン)を横斷したる鐵道が支那の雲南省まで敷設せられて、來年の五月となれば吾々は鐵道によりて海防(ハイホン)より一直線に、古の滇と號せられたる雲南に入る、而も雲南の府城に達することが出來るのである。此鐵道たるや凡そ天下の鐵道中最も偉觀を極めたものであつて、海防より雲南省まで凡そ四百餘哩であるが、其中三百二十哩以上は既に敷設せられ、老檛(ラロカイ)より以北雲南府城まで九十哩ほど餘すのみである。此間長さ一百六十呎の橋が三つ未だ敷設せられずして殘つて居ると云ふ外、此九十哩の未設線路たるや敷設は容易なものである。而して海防より佛領印度と雲南の國境なる老檛に至る間は、二百四十哩ほどであつて、老檛より雲南省に至る間は百八十哩ほどである。此百八十哩の間には隧道の數が百四十七であり、海防より老檛に至る二百四十哩の中には六百のカーブがある。此間は極めて平坦で僅に海拔三百尺位に過ぎぬものが、一旦雲南省附近に至れば海拔六千六百尺と云ふ高さに達するのである。故に其工事の危險にして且つ費用の多き、而して出來上つたる鐵道の天下の奇觀を極めたること、殆ど目擊者にあらずんば之を想像する能はざる程である。一言にして言へば殆ど古の蜀の棧道の如きもので、唯蜀の棧道は之を木にて作り、佛領印度の鐵道は之を鐵にて作ると云ふの相違があるに過ぎぬ。而して其費用は佛領印度の境、老

疆より雲南府城まで一百八十哩の間を敷設するだけで六千萬圓を要して居る。余は此鐵道を見て如何に佛蘭西人が英吉利に先つて雲南に入り、雲南より四川に達せんとするに急てあるかと云ふことを想見して、其氣魄の大なる、其勇氣の盛んなる、而して其工事上の天才の高さに一驚を喫したのてある。

此鐵道たるや現今經濟上の價値は甚だ多しと言ふことが出來ぬ。何となれば雲南は支那十八省中最も貧しきものゝ一つであつて、其天産を開發せられざる以上は、未だ此鐵道を潤すに足るだけの輸出物は出ないのてある。而して人口極めて少きが爲に、又佛領の平地より物品を購買するだけの力も極めて少い。從つて、此鐵道は東北の方四川省まて達するにあらずんば、其經濟上の價値は極めて低し。故に佛蘭西政府は極力此鐵道の運賃を高くして、僅に其歳計の不足を補はんとする方策を執つて居る。例へば日本より雲南府城に物を送らんとすれば、此物品が佛領印度に於て消費せられざるに拘らず、佛蘭西は此鐵道を通過する日本品に對して、佛領印度に入る物品の輸入税の五分の一を、通過税と號して徴發して居るのてある。凡そ自國を通過する物品に對して通過税をかけると云ふものは、支那の厘金税などの外、余の見聞せざる所てある、佛蘭西政府、豈此徴税法の不法にして、且つ經濟的に自殺の策てあると云ふことを知らぬものならんや。知つて而して尚ほ斯の如き收税法を爲しつゝあるは、要するに鐵道經濟、目前の急に制せられて已むを得ぬからてあらうと思ふ。

更に飜つて英吉利が如何に雲南鐵道に急てあるかと云ふことは、一度緬甸、蘭貢の雲南鐵道工事を見る者の直ちに知らざらんと欲するも能はざる所てあらうと思ふ。今や蘭貢に於けるイラワデ河の支流に於ける海陸聯絡の設備は非常に雄大なる規模を以て經營せられ、殆ど區々たる緬甸内地の商業に十倍以上の規模を以て經營せられて居る。蘭貢の河口は尚ほ柴棍の河口にあるが如く、河に面したる都てある。然るに柴棍は其附近の物貨を吸收するだけの經營に止まるが、蘭貢

に於ては一旦英吉利の鐵道が緬甸を越えて、更に四川に達した時のことを想像したる規模を以て經營せられて居る。今日に於ては雲南府城に先づ達したるものは即ち佛蘭西である。併ながら一旦雲南府城に達したる後の競爭は、恐らくは英吉利の蘭貢、四川鐵道が先を制するのではあるまいかと思ふ。兎に角斯の如くして英國は佛蘭西と相並んで、先づ關中に入る者は王たりと云ふが如き筆法を以て、極力雲南に達することを急いて居る。恐らくは十年の後、又二十年の後、吾々の最も注目すべき外交經濟上の大事實は、此鐵道の爲に雲南附近に於て現れるのではあるまいかと思ふ。

斯の如くして英國は緬甸四川鐵道を急いで居る、佛蘭西は滇越鐵道を急いで居る。而して斯の如く鐵道に依て包まれたる印度支那は、今後如何に變化すべきかと云ふことは一大問題である。雲南なるものは古來我が國人の多くの者に依て解釋せられて居らぬが、地理上最も必要なる土地であつて、支那の本國と佛領印度及印度地方との陸上交通の關門は此所にあるのである。即ち諸葛孔明が孟獲を七度捕へて七度放つたと云ふ南蠻の地は、即ち今日の雲南より老撾附近の土地である。今日尙ほ雲南地方に於て土中より青銅の陣太鼓を堀出すことが往々にしてある。而して支那の博識家の間に於ては、之を以て孔明が孟獲征伐に用ゐたる陣太鼓であると鑑定して、識者の間には異論のないことである。又文選を見れば司馬相如が蜀の父老を難ずと云ふ文章がある。是は漢の武帝の時に司馬相如等の議に依て、四川の兵を發して此雲南地方を平げて仕舞ふと云ふ策を立てた時に、四川即ち蜀の父老共が其征伐を難しとして拒んだ。之を非難した文章が即ち蜀の父老を難ずるの文章であるが、後世の人司馬相如を以て眉目清秀、唯文君と手鍋を提げた好男子に過ぎぬと思うて居るが、豈計らんや此遊冶郎及能文家は支那の歷史に於て最も卓越したる國權擴張家の一人であつて、漢が一度此雲南を平げれば東西兩世界の關門茲に開かれて、支那の西方幾千萬里に在る大小無數の國をして梯山航海、支那に朝貢せしむることが出來るであらうと

云ふ想像から割出された大政策てあつたのてある。即ち當時に於て此雲南が東西の關門たりしが如く、今日に於ても尙ほ關門てある。然るに英佛相競うて此關門に入らんとするのてある。恐らくは今後二十年の後には、至大なる變化を此地方に生ずるのてあらうと思ふ。

斯の如くして英佛兩國の鐵道に依て雲南の關門を破られ、而して此鐵道は緬甸、暹羅、印度、支那を包含することゝなるのてあるが、其支那に及ぼす影響は、第二として、此鐵道に依て包まれたる地方に及ぼす影響如何と問へば、第一に來るものは恐くは暹羅の滅亡てあらうと思ふ。更に一轉して馬來半島を見れば、新嘉坡より皐南に至る道は深林巨澤、容易に越ゆる能はずと云ふ有樣てあつたが、今年の五月新嘉坡、皐南の間は既に鐵道を以て通ぜられ、吾々が歐洲に旅行するに當つて新嘉坡より皐南に至るのには船に依て一日の行程を費さなければならぬのてあつたが、今日は先づ鐵道に依て先着し、半日此所に休んて船の來るを待つことが出來ると云ふ有樣てある。此鐵道は從來更に馬來半島を縱斷して、而して緬甸の蘭貢より、雲南鐵道に至るものに接近する時があらうと思ふ。而して馬來半島に於ける英人は、汲々として暹羅との境界を進めることを怠らず。今年の七月既に又暹羅の一部分を浸食したる英吉利、暹羅條約の發布となつた。斯の如く英吉利は北方より鐵道を以て印度支那を圍まんとし、南方よりは馬來半島の境界を突出せしめて暹羅を浸食しつゝある。而して佛蘭西は又東の方より暹羅の地圖を染め變へることを怠らぬ。故に暹羅の分割せられざるや唯時日の問題てある。恐くは二三十年の後には到底自から立つ能はざるものとなるのてあらう。實に憐むべき形勢てはあるが、大勢又如何ともする能はざる事てある。

茲に最も趣味ある問題は暹羅、佛領印度、雲南、緬甸の間にシャンと云ふ一の國がある。是は何れの國に屬するか分らぬ。唯シャンの國と稱せらるゝのみてある。此シャンは極めて趣味ある國て、恐くは今日の緬甸、暹羅、佛領印度及雲南の大部分は、曾てシャンの領分

てあつた時代があらうと云ふ說がある。而して其人種極めて質朴にして、緬甸、佛領印度などに於ける人種と殆ど面目を異にして居る。一方には尙ほ奴隷賣買の遺風があるかと思へば、一方には尙ほ堯舜時代の質朴なる遺風を持つて居る。學者は其シャンの何物たるを研究せんとして今日に於て未だ的確なる解釋を得ないが、佛蘭西のラクーペリーの如きは之を以て支那の三代時代に於ける商の遺民であると號して居る。支那の三代の夏、商、周と云ふあの商である。即ち殷の紂王の子孫である。周の文王武王は西の方の戎であつて、此中央を滅ぼしたものであるが、三代時代に於ける支那も尙ほ其政治的範圍に於ては、殆ど今日の支那の如く、南方の極端まで領分を有したものであつて、例へば舜は蒼梧の野に死すと云ふ傳說がある。蒼梧の野と云へば則ち今日の廣西省である。縱し是が一の傳說に過ぎずとするも、此傳說の因て來る所を言へば、堯舜時代に於ける帝王遠征の跡を想像することが出來るのである。又揚子江の南方に禹王廟がある。即ち禹は此地方までも征伐したものであると云ふことが想像が付く。世間禹を以て僅に水を治めた者とするけれども、豈たゞ水のみならんや、即ち東戰西伐、寧日なかりし即ち遠征軍を率ゐた人と想像せられるのである。然らば其政治的範圍は當時既に南方まで及んだものと云ふことが想像せられる。而して周が商を攻めて着々と之を南方へ〳〵と壓迫した結果、商人はとう〳〵揚子江で堪らず、湖南湖北を越えて、四川に逃込み、從來の敗殘者が總て逃隱れる所の雲南へ逃げて、而して此所に其尻を落着けて、是より印度地方へと段々下つたものが即ち今日のシャン、彼の商であらうと云ふ說であるが、是等のシャンであるか將た商であるかは別問題として、確に堯舜時代の遺風を有して居る人民には相違ないが、是等の人民が佛領となるか英領となるか、兎に角鐵道の競爭に依て二三十年の後には歷史上の最も古き遺物たる人民が、最も新しき政治を行ふ國の影響を蒙るに至つては古今の奇觀であつて、殆ど小說家の腦中より出でたる奇想と名くべきものである。

余は更に廣東に至つて廣東より漢口に至る鐵道を見た。此鐵道は遲々として進まぬが、恐くは此十年の中には漢口と廣東、即ち更に一轉して香港と相聯絡する鐵道が出來るのであらうと思ふ。然らば支那の多くの識者が考へるが如く、漢口は揚子江に依て東西を貫かれ、鐵道に依て朝鮮、滿洲及北京、南は廣東と聯絡する中心が即ち漢口であるから、漢口は今後二十年には今日の二十倍、若くは三十倍の發達を爲すであらうと思はれる、廣東とは即ち古の越の都であつて、廣東の五層樓に登れば、所謂南越王の古蹟は眼下に見るべき譯であるが、此南越王の古蹟が鐵道に依て貫かれるに至つては、是亦古今の感に堪へぬ次第である。余は我國人が海の彼方には斯の如き大事實の現れんとすることを考へ、而して漢口の繁盛は、殆ど想像の出來ぬまでに達せんとすることを考へ、區々たる內國に於ける小事業、小競爭に齷齪とせずして、海の彼方に於ける大事實に着目して活動せんことを望むものである。

現代の青年

田中穂積

世に今日の青年は墮落せりとの非難あれど、今日の青年が果して爾く墮落せりとは信ずる能はず、何れの國何れの時と雖も酒色に溺れ遊蕩に流るゝもの無きにあらず、而して今日の青年に於ても亦此種の墮落漢無きにはあらず、左れど特に今日の青年に於てのみそれを聞くこと甚しきは、往時とは變りて世に新聞紙なるものあり、此新聞紙が勉めて人の隱微を發き讀者の歡心を得るを謀るが故に、些末の事實も忽ち掲載せられて世に喧傳せらるゝと、又他には、其實墮落生の數之を比率にすれば頗る減少し居るにも拘らず、學生の數今は昔に比して甚だ多きを致せる結果として、墮落生の數も亦勢ひ增加せるによるものなり、別に今日の青年が墮落の傾向に向ひつゝありとは信ずる能はず、否却つて之れを昔時の書生に比すれば頗る改善せられたるを覺ゆ、二三十年前の書生は、月々父兄より支給を

受くる學資丈にては不足を感じ相率ゐて質屋に趣き一時の融通を爲すこと一種の俗をなし、書生にして質屋の門を潜らざるもの殆んど無きの觀を呈しぬ、而かもその費途はと顧れば、單に牛飲馬食位に止まるならばまたしもあれ、花街柳巷に流連する所謂惡所通ひをなすもの甚だ多かりき、元より當時は正に社會の過渡期にして自ら大功は細瑾を顧みずとの思想行はれて然りしものありとすれば、又強ちに咎むべきにあらざれど、之を今日の青年に比すれば慥に放縦自恣なりしなり、今日の青年には既に斯ゝる態なし、然るに敢て稱して今日の青年は墮落せしといふ事甚しき寃罪なりと信ず、

とはいへ、予は之を以て直に現代の青年に謳歌するを得ず、予の見る所によれば今の學生は次第に晩熟になりぬ、常識の發達遲くなりぬ、何は扨て措き第一に意思の力薄弱となりぬ、此事は實に爭ふべからざる事實なりと信ず、晩熟といふも若しその晩熟にして所謂大器晩成、晩年に至りて大器を成就するものならば甚だ可なるも、如何せん今日の青年は意思の力甚だ弱きが爲に十分に成熟することなくして已むの憂あり、

試に維新前の青年と今日の青年とを比較し見よ、伊藤、山縣、井上、松方、扨ては大隈等の諸公の如き、皆二十歳の時代に於て一身天下の事に與り、東西に奔走したるもの、更に况んや吉田松陰の如き、高杉晉作の如き、その盛名嘖々として今日に迄喧稱せらるゝに拘らず、而かも皆二十前にして沒したるにあらずや、彼等は孰れも二十歳前後よりして國事に盡悴し、二十四五歳を以て既に聲譽を天下に馳せたるもののみ、勿論彼等は人傑なり、人傑を以て一般凡衆を律する事は難しと雖も、概觀するに猶ほ維新前の人は二十歳を以て十分成人の域に入るものと信じ、我も許せば人も亦許したるの一事は明けし。單に維新前とのみ言はず、明治となりても猶ほその初年に於て海外に留學せるもの多くは十五六歳より二十前の間に在り、二十四五歳には既に洋行歸りの新智識として自ら國家の棟梁の才を以て任じたるものなり。然るに今日の中學生は如何、

十五六歲は人も小供と思へば自ら小供心地して意に介せざるの觀あり、二十にして中學を卒業するに及びても、小供氣は猶ほ失せず、天下、國家、社會に一念の及ぶものは夢にも想ひ浮かばれず、否な斯ゝる思想は好しや中學を卒り更に專門の學科を修めていざや社會に出でんとするに及びても、猶ほ容易に彼等の腦裡に宿ることとなし、何等かの位置を得て衣食の資の安固を謀らんとするもの位が上等の部類のみ。

維新前後の青年と今日の青年とには常識の發達に遲速の差ある此の如し、然るに他方より見れば、生存競爭は月を追ひ日を追ひて激甚を加ふるに非ずや、從つて又寸時も早く青年の大成を期するに非ずや、現時に於ては高等教育を受くるもの其數何萬を以て註すべきも、如何せんその才の成熟は甚だ遲緩になりぬ、一人前の丈夫兒となるに甚だ時間を要するに至りぬ、○時間を要するは猶ほ可なり、更に未熟の儘に終るの疑あるに至つては之を何とか言はんや、何が故に之を疑ふ、曰く今日の青年はおしなべて神經過敏となり、意思の力甚だ薄弱となりたればなり、人間の發展し、向上するには必ず意思の力を要すべきに、此力にして薄弱とならんか、その成熟困難となるは已み難きの事のみ。

現代の學生間には能く失戀若くは煩悶の語を聞く、彼等の間には煩悶は必ず一度青年の通過すべき關門にして、極めて賦性の魯鈍ならざる限りは必ず此煩悶あるべきものとす、故に煩悶を語りて憚らず、否寧ろ功名顏さへするなり、從つて煩悶の爲に敢て華嚴の瀑頭に投じ、敢て淺間の坑口に投ずるものに逢へば寧ろ之に同情するの傾あり、藤村操の如き每々學生の脣頭より脣頭に傳へらるるもの、之れを非難嘲笑するものも絕無とはせざれど、而かもその語るもの多くは同情の語氣を有するが如く、煩悶が一種の功名視せらるゝ傾向あるは、以て痛く今日の青年が神經過敏に陷りつゝあるの一證とすべし。

勿論煩悶にも種々あり、その中に高尙なりとせらるゝものは重に人生に關するものの如し、されど能く思へ、元來人生などいふ大問題に至りては、古今三千年

間、幾多の大哲人の現はれて千思萬考猶ほ考へ盡せぬ大問題のみ、然るに未熟の一青年が敢て此大問題に指を染むることとその解決の得難きは、初より瞭知せらるゝところならずや、更に又思へ、人間が人生を解釋すといふも、その人生は自ら一大宇宙に繫るに非ずや、然らば此小なる粟粒大の人間にして如何にしてか廣大無邊にして且つ悠遠無究なる宇宙の眞相を測るを得んや、予を以て見れば、恰も複雜極まる人間社會の眞相は、到底小なる蚤若くは蚊の頭にて考へ定めらるゝものにあらざると同じく、我等は又到底宇宙の眞相を究め盡す能はず、然るに之が不可解なりとて敢て華瀑の巖頭に投ずるとも何の甲斐かある、渺たる滄海の一粟は之が爲めに減ずべきも而かも人生の不可解は悠久なり父兄より送り來る月々の學資を以て鋭意邁進修養の爲めに全力を傾注す可き青年が斯ゝる要なき煩悶に心身を苦め、或は失戀に胸を焦して遂には有らぬ事態をも生ずる、是れ皆神經過敏の禍する所のみ、意思薄弱の招く所のみ、

維新前後の人とて其胸中に分け入らば、豈に多少の煩悶なからんや、生活の煩悶もあるべし、家庭の煩悶もあるべし、義理人情の煩悶もあるべし、亦失戀の煩悶とても元より有りしなるべし、されど彼等は只之を公言するを恥ぢぬ、之を公言するを以て薄志弱行の甚しきものとし、自らも忌めば人も亦齒ひするを厭ひぬ、況んや之が爲に敢て有望なる自己の前途を抹殺し終るが如きことあるべきぞ、一度は如何に苦惱に腸九回するの想あらんとも、自ら斷じ自ら處して敢て人に示さず、扨ては暴風一過の後更に清新の天地に入るの思をなし、一層の勇氣を鼓して猛進するを常とせしなり。

維新前後の青年と今日の青年とに何が故に此の如きの差を生じたるかといふに、そは維新前には大に品性の淘冶、人格の修養に力を用ひたるに、今日は單に智識の修得にのみ重きを置くが爲なるべし、單に智識に就いてのみいはんか、今日の昔日に倍蓰するは言ふを用ひず、中學生にして既に英語をも知れば理化學に

も適じ、萬國地理をも學べば高等幾何をも解す、之を維新前に於てせんか、斯程の智識なるものは廣く國中に求むるも到底なかるべき者のみ、昔時の學問は只漢學のみ、之とて普く諸子百家の書を渉獵せんとならば二三十年の長年月を費すも猶ほ其難きを覺ゆべきも、通例學才あるものは四五歳よりして學に從ひ、二十歳頃にも至らんか、優に一家をなし門弟を集めて自らその師となるを得たり、吉田松蔭の松下村塾に於けるその類のみ。學問の深淺、その今日と比して大差あるは此の如し、されど翻て人物として見れば昔時は今に優り、早熟にして世に立ち立派に活動したるなり、即ち昔しの青年は學問淺きに拘はらず人物は早熟にして而かも有爲なりしは抑も何によるか之れ即ち、維新前は殆んど社會の全力を盡して一意人格の修養に勉めたるの結果なりと信ず、家庭も、社會も、學校も皆一致して然りしなり、即ち「武士道の手前」「武士の面目」の此一語が如何ばかり當時の社會に强大の勢力を有せしか、彼等は武士の面目といへば實に死を以て爭ひたるもの、そは之を當時の詩歌の上にも徴するを得べく、一度その面目を損することあらんか、家庭も社會も之を容れず、一身の小なる猶ほ之を三千世界置くに所なき有樣となる、制裁力の大此の如し、此制裁力の下に蘊釀されて自ら勇猛果敢清廉潔白、義勇奉公等の美德は武士道の精華となつて現はれたり又漢學は學問としては甚だ幼稚なれど、其目的は修身齊家治國平天下に存して其他に存せず、故に漢學を修めて其結果假に今日の所謂科學的智識を得ることあらんも、そは只豫想外の副産物たるに過ぎざるのみ、事實は實に人格の修養にありたり、即ち維新前の青年は既に武士道と稱する一種のアトモスフエアの中に生れ、少しく年齒を長ずれば又右の如き學問によつて一向ら品性の陶冶人格の修養に勉めしを以て、人物は早く完成せられ、早く有用の材となりぬ、斯くて其の力によつてこそ王政維新の大業も成就せられしなれ。

今日の青年は只智識を貴ぶ、智識元より貴ぶべし、智識人格の一部なるが故に、その人格の修養に學問上

の智識の要せらるゝ事は當然なりと雖も、單に學問の智識のみにて人格は完成し得らるゝものに非ず、それのみの人格にては不具の人格なり、由來人格とは何ぞや、予の考ふる所によれば、偉大なる人格は智情意の圓滿なる發達に外ならず、されば學問上の智識は如何ばかり發達すとも、それ以外の要素にして發達することなからんか、猶ほ不具の人格たるを免れざるなり、圓滿なる人格といへば是非とも智識と共に其他の二要素、即ち情、意も並びて發達せざるべからず、之にして缺けんか、其人格は到底不調和の人格なり、不具なる人格なり、之をフイジカルに就いて言はんか最も曉り易かるべし。五體共に圓滿に發達して偉大なる觀を有せんか、起つて天下の横綱となるべし、又好しや爾く偉大ならずとも單に五體の調和にさへ缺くるなくんば慥に輜重輸卒となつて國民の義務を果すを得、彼の世界に有名なるシーザーは如何、ナポレオンは如何、彼等の如き英傑にして而かも五尺の短軀なりしといへば少くも其調和だに缺くる所なくんば以て有爲の人物たるを得べし然るに手足のみ過度の發達を爲せる奇形兒は物の用には立たざるが如く智識のみ發達せるものは人格上の奇形兒たるを免れず而して此點こそ維新前後の青年と今日の青年との優劣分らるゝ唯一の樞軸たり。故に今日の青年を救はんには必ず先づ此品性の陶冶、人格の修養を講ぜざるべからず。

然らば青年の品性を陶冶して人格の發展を計るには如何にすべきか此點に於て現代の青年は誠に不幸なる境遇にありと云はざるを得ず何となれば凡そ品性の陶冶人格の發展を計るに當りては學校よりも他の機關の力に依頼すべきものにして最も大切なるは第一家庭第二社會第三敎會若くは寺院第四に始めて學校の順序なりとす即ち家庭の品性の陶冶人格の修養に必要なるは「氏より育ち」の一語實に之を盡す、昔より偉人の傳記を見るに、その嚴肅なる家庭、賢明なる母の手しほによるもの多きに徵し人格は先づ其家庭によりて基礎を据へらるゝものと云ふべく漸く長じて稍事理を解するに至れば次て社會が品性の陶冶に大なる勢力を及ぼす

ものにして我邦に於ける武士の體面西洋に於ける「ジエントルマンライキ」なる此一語が社會的に大なる制裁力を有し苟くも之に悖らんか社會は斷じて許容せざりしなり、此の如くにして社會的に人格の修養、品性の陶冶は完成せらる、而して教會の同じく之れが爲めに必要なるは、明々白々なるところ今更ら聲辯を要せざるべく、學校は此等三機關の不備の點を僅に補足するに過ぎざるが故に、人格の修養品性の陶冶に於て其功最後に居らざるべからず、元來學校の主とする所は專ら智育若くは體育の方面にありて人格の方面には力を注ぐことと左迄に大なる能はず、又事實學校なるものは左る事の完成せらるべき場所にはあらざるなり。何となれば元と學校なる機關は甚だ單純なるものにして、天性の如何に從つて各自に適應せる教育を施すを爲さず、賢愚强弱を一室に集めて、盡く同一模型に入れ同一類型となして打出す所のもの、以て智識體力を略ぼ一定の點に進むることは得べきも斯の如くにして能く人格の完成を謀らんことは難し、故に此點に於ては遙に家庭と社會とを重しとするなり、家庭ならば各自の賦性に應じて個々の注意を拂ひ、之れを教養するを得べく社會も亦頗る複雜なる機關なるが故に品性の陶冶の機會從て多かるべきも學校は此點に於て其の効力甚だ微弱にして、一日は二十四時間中生徒の學校に居るべき時間は僅々四五時間とすれば假りに學校が如何に品性の陶冶人格の修養に力を注げばとて、殘り約二十時間は家庭と社會とに放置せらるもの、その二つにして不良ならんか、折角の努力も實は沙上の樓閣のみ、

さらば今日の家庭は如何、人格の修養品性の陶冶に力あるべきかを顧るに、實は現在は猶ほ過渡期に屬し、左る機能は甚だ微弱なるのみならず動ゝすればその機能は絶無なるの觀あり、子弟は昔時の教育を受けたる父兄に對し天保老人の呼稱を以てすれば、父兄も亦新しき學問を修めつゝある子弟を以て自己よりも偉なりとなし、何事も釋迦に説法、訓戒の要なしと信じ、子弟をして我儘を通さしむるを敢てす、斯かる家庭に何

の有益なる感化かあらん、然らば社會は如何といふに、是れ亦過渡時代の餘弊を受けてか、立派なる位置を占め居るものにて、其趣味、學問、品性の上に甚だ感服し難く、以て青年の模範とするに足らざるもの多し、見よその位置よりすれば如何にも萬人の瞻望を集むべきものにして而かも素行の上に甚だ嚬蹙すべきものの多きを、實業界には銀行會社の重役たる位置を利用して不正の利を謀るものあり、在朝の官人にして動もすれば奸商と結托して敢て一己の私を營むものあり、國民の選良たるべき代議士にして又我慾に驅られて縲紲の辱を受くる日糖事件の如きあり、而かも新聞は傳へて敢て「細鱗を獲て呑舟の魚を逸す」の語を爲さしむるが如き、此の如き亂暴狼籍にして混濁せる社會が現代の青年に如何なる感化を與ふべきか、その品性を惡化じその人格を下劣ならしむるの外何等の効果あるべからず、然らば更に敎會は如何、これ將た顧みるに敢て全部とはいはざれ日本の宗敎界の大部分は腐敗し居るなり、人は日本人を無宗敎なりと評するも、宗敎界の現狀にして實に今日の如くんば、予は寧ろその宗敎心の薄きを以て勿怪の倖とし喜ぶもののみ、それ然り、今日の三大機關は既に此の如く無効なるなり、只その四大機關中最も力薄かるべき學校が僅かに眞摯なるのみ。玆に於てか學問の修養智識の發達のみは驚くべきものあれ而かも學才餘りあつて腕足らず、現代の青年を目して役に立たずとは世間の常に稱する所、而して之を以て動もすれば學問の罪に歸し、青年も亦自己の學問優に先輩を淩ぐものあるに拘らず、自己の位置の發展せざるを思ふて煩悶す、此の如くして今は學問、社會を禍するかの如き觀あり。

されど予の考は甚しく之と異なれり、畢竟青年の今日の如きを致せるもの決して學問の罪にはあらず、學問のみ進みて他の人格の要素が發達せざるによるのみ、若し學問の方面と同じく他の方面、即ち感情意思の發達亦之と並ぶべくんは、現代の青年は維新當時の青年よりも必ず有爲なるべし、然るに悲哉此人格修養に大切なる家庭も社會も敎會も紊亂して無効力なる旣

に述べたるが如く之れが改善は到底一朝一夕の間に遂ぐらるべきにあらず即ち余が今日の青年を不幸なりと稱するは實に此處に存す。

之を譬ふるに今日の青年は、宛も泥田の中に抛げ込まれて而かも其身の純潔を保てと命ぜらるゝが如し、此苦境にありて如何にしてか彼等は其身の純潔を保つべきか之れ頗る難問題なり、名案は所詮あるべからず、餘すところは只青年の自覺に待つの外なし、而して此自覺は強ち不可能の事にはあらず、自ら顧みて、今日の青年の缺點は明かに此點にありとし之あるが爲に社會有用の材なるを得ざるものと深くも猛省する所あり、斯くて一向ら自己の力を品性の陶冶人格の修養に用ひん事元より可能の事に屬す。之を他人の力、即ちパッシブに待ちては効なし、飽く迄も自己の一大發心に基かずんば不可なり、若し此一大發心にして油然として現代青年の胸臆に起らんか、家庭、社會、教育の腐敗又何かあらんそれ等の諸機關は既に無効力なり、青年の取るべき今日の急務は只自ら猛省自奮するにあり他よりは感化せらるべからず。敢て之を以て諸君に望む（筆記校閲濟）

日本と歐米との財政方針の比較

松山忠次郎

我國は日露戰爭中に二度までも増税をしたが戰後に至ても矢張り歳入の不足を告げ明治四十一年度から又一度増税をした。それは西園寺内閣の時であつたが、若し當時の西園寺内閣の計畫の通りの事を遣らうとすればそれでもまだ不足であつて更らに戰後第二の増税をしなくては豫定通りの仕事は出來なかつたのである。然し第一回の増税でも大分苦情があつたから戰後第二回の増税を行ふといふことは天下の反對した所であつて到底出來る譯のものでなかつた。されぱとて西園寺内閣は自己の計畫を引きもせず又二回の増税は六

つかしいので到頭倒れて了つた。次いで桂内閣が出來て西園寺内閣の計畫の方を毀した。大き過ぎるのを小さくしたのでなく一時のを繰り延べて年限を永くした。それで第二回の増税は不必要になつた、のみならず却て歳入は今までので餘る事になり、更らに來年度からは幾分か減税するといふ事になつて居る。名は租税整理であるが、實は減税の意味の整理である。國民の方からいへば至極有難い事で、無論慶すべき事であるが、更らに世界の大勢から見ると一層慶すべき理由が明白である。日本では日露戰爭の如き大戰爭をしたから戰後も増税の必要があつた。無論それは西園寺内閣の計畫の惡かつたにもよるが増税の口實はあつたのである。處が世界各國では何等の口實がないに拘らず到る處増税〳〵と言つて増税計畫の眞最中である。獨逸では數年前に一度増税したに拘らず更らに昨年から増税計畫を立て〻それが爲めに宰相が辭職するといふ大騷ぎをやつた。英國でも歳入を増加するにあらざれば財政が立行かぬといふので増税は今議會の問題となつて居る。佛國も同様、所得税初めいろ〳〵の増税案について政府と議會と相爭つて居る。米國は三四年前まで餘程財政の裕かな國で毎年歳入の過剰に困んで居つたに拘らず近來は頻りにいろ〳〵の事業を企て歳出が膨脹して矢張り増税の必要に迫られて居る。現に所得税案が將さに極らんとして居る。斯くの如く歐米各國で何等の理由もなく何等の口實もなきに拘らず歳入の不足に困つて續々増税の計畫をなして居る。然るに我國では戰爭があつたに拘らず財政の整理が出來て了つて却て歳入が過剰して減税の意味を有する税法整理をなさんとして居る。此點から見れば一層慶すべき譯である。

然しながら財政の遣り方を見れば歐米諸國と日本とは大變に其方針が違ふ。歐米諸國が戰爭なかりしに拘らず財政の困難を來したる第一の原因は軍艦製造の競爭である。即ち近頃流行のドレッドノート型軍艦製造の競爭である。第二の原因は社會主義である。そして社會主義によつて困難となれる財政を整理する方法も

矢張り社會主義である。歐米諸國は飽くまでも貧民に味方する方針で財政を整理して居る。處が我國では少し趣が違ふ。近頃の日本の財政方針は全く之と正反對で稍々富豪政治に傾いて居る。所謂プルートクラシーに傾いて居る。歐米の例をいへば、佛蘭西、獨逸の如き社會主義の盛んな所は勿論、英國の如きも漸次社會主義的方針を採るやうになつて來た。現に昨年は養老金法を出して六十五歲以上の職業の無い男子にはいくらか金を遣ることに極め、夫れが爲めに何千萬圓かの歲出の膨脹を來し、そして財政の困難を來して居る。然るに其財政困難を救ふに亦社會主義を以てせんとする。大藏大臣ロイド、ジョーヂが議會に出した案を見れば、地租及び所得稅を增すといふやうな事で英國では之を富豪征伐と唱へて居る。詰り富豪から金を取つて貧民に與ふる、社會主義の最も著しく且つ最も露骨なものである。米國でも其通りである。今の大統領のタフトは米國の關稅が高過るといふ意見で關稅を安くせんと企てた。目的は達せなかつたが企は左樣であつた。關稅を安くすれば國內の物價が下落して貧民が利益する。然らば米國では歲入が餘るかといへば、決して然らずして却て不足を告げて居る。殊に一昨年の恐慌以來消費稅の收入著しく減じて財政は困難になつて居る。然るにも拘らず關稅を安くせんとしたのである。さうしてタフトは歲入不足を補ふが爲めに所得稅—實は會社の所得に對する會社所得稅—を主張した。詰り富豪から稅を取つて貧民の生活費を助くる事となる。殊に米國では關稅を高くするといふ方が氣受がよく、所得稅を高くするには憲法を改正しなくてはならぬのである。米國の憲法では中央政府が所得稅を課することが出來ぬとなつて居る。然るに憲法を改正してまで此六つかしい所得稅を新設し、そして議會で最も氣受けの惡い關稅引下げを主張したのである。タフトが如何に社會主義に熱心なるか以て知るべしてある。

斯の如く歐米諸國では其財政方針悉く社會主義を以てするに拘らず我國では大變な相違である。我國の非常特別稅は元來戰後一年の間に罷めるといふことであ

りたがそれを永久税とした。永久税とするには税法を改正するといふ條件で議會は承諾したのである。税法改正は當時では實は三税廢止の希望であつた。明かにさういふ事が文書の上に記された譯ではないが、天下の輿論は税法整理即ち三税廢止を意味した。換言すれば三税廢止を條件として非常特別税を永久税にしても差支ないと承諾したのである。而して其三税は主として貧民の負擔に歸するものである。然るに政府は此約束を履行しない、單に履行せざるのみならず四十一年度は更に增税をなした。而して其增税も亦貧民の負擔を更に增加すべき性質のものである。即ち酒、煙草、砂糖、石油の税を上げたのである。そして來年度から租税を整理して多少減税が出來るといふが、其減税せらるべきものは世人の豫期する所の三税廢止にはあらずして所得税營業税を減ぜんとするのである。詰り貧民の負擔を減ずるよりは比較的富豪の負擔を減ずる結果となるのである。それのみならず政府は租税整理を今日まで捨て置きしに拘らず、公債整理は戰後直ちに手を着けた。抑々戰爭の費用は歸する所公債と租税にて支辨せらるゝものであるが、其租税の方は今日までは等閑に附し、公債の方は三十九年戰後第一の議會で整理の端緒を開き、公債整理基金を設けた。それから四十一年度には一方で增税をして貧民の負擔を重からしめながら、其金で以て四十二年度に於ては桂內閣は公債整理の金を增額した。詰り貧民から税を取つて富者の便利を圖つたといふ結果になつた。而して四十三年度には更らに公債償還額を增加し、税法整理に於ては貧民の負擔を減ずるよりも寧ろ富者の負擔を減ずるものを減税せんとして居る。一言にしていへば近來の日本の財政方針は兎角貧者に不利益にして富者に利益ある結果となる。當局者の目的は或はさういふのでないかも知れぬが、結果からいへばさういはなくてはならぬ。此點からいへば日本の財政方針は世界の財政方針の大勢と全く正反對のものであるといはなくてはならぬ。(完)



歐遊雜記

伯爵　柳澤保惠

現在に於ける海外一切の狀勢殊に我國と緊密の關係ある歐米諸事の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

一、夏期演藝場

海外には近來一ヶ年置きに公務を帶びて行つて居りますが、一ヶ年位時日がたつたからとて其間ソンナに變る者てないから格別新しい事を御話する程の材料も有りません、演藝の方てすか、それは敦賀へ着く匆々四五人の新聞記者に包圍されて一通りは話しましたが、大分誤解も加はつて世上に公にされて仕舞つて居る、それに私は平素劇場にも關係を持つて居るから其方の注意も自然にするのてあるが、此度行つたのは萬國統計會議の出席が目的てあるので、又演藝視察は一昨年一通りしましたから勢ひ今度は劇の方は十分に觀察が及ばなかつた、が一つ私が見て、日本にも應用して見たいと常に考へて居ることは巴里に於ける夏季向き演藝場の設備てある、シャンゼリゼーの並樹道、翠綠滴るばかりの彼の有名な大通路の兩側に此演藝場の設備が四ヶ所もある、其造りは多少の違ひもあるが大體は上部にのみ屋根を有し、四方は全然開放されて居る處に舞臺や觀覽席が設けられて居り周圍には木立が又一面にそれを掩ふて居る、勿論平土間のみならず單純な棧敷のしつらひも有るにはあるが、天井がズッと高いから、東西南北四方の風を快受するに毫も障りはないといふ構造てある。此處て夏に限り音樂もやれば舞踏もあり又諸藝人が出て芝居がゝつた事もする其周圍には柵があるから往來から無暗に圍ひの中には入り得ぬが、遠くからも音樂や獨唱など位は聽き取れるといふ次第、隨分立止つて耳を澄まして居るものもある、金

を燥かす三伏の暑熱にも、此處にのみは全く夏を忘れ盡して人々心行くばかりに享樂することが出來るのである、私も有樂座に關係があるので、常に思ふが、何分彼の構造で四邊を全く立て籠めては迚も中夏の候の歡樂の場には適せぬ、又殘らず開放しても夏季は隨分暑い何んとか一つ工夫して彼の長を取り我の短を補つて立派に夏季に適する者を來年は現はして見たいと思ひ特に巴里のに注意を拂つて來た。然し全く彼國の樣には出來得まいと思ふ、一體が歐洲は大體夏は日本に比して涼しい上に、更に夜になつても虫類が居らぬ、蚊も居らねば蟒蟲も居らぬ、夕方の彼地は實に快心の所である、日本では氣候風土の異なるものがあり特に夏は蟲類が出るので到底その樣な快心の境は東京や大阪などで得られぬでもあろうが、切めては風通しだけでもよくして衛生の理想にも叶はしめ、且室内、室外共に演藝を見る樣にして、類例なき夏場所として十分の享樂をも得しめたいものと思ふ、巴里の夏季演藝場は常設であつて一時的設備ではない、然し冬季には又別の土地に同系統の演藝場が出來て居るから、此方は全然休場して仕舞ふ、斯かる行屆いた設備はまだ他國には多く見られぬ、米國などでは市俄古若くは紐育といふ如き大都府に行くと、大抵ホテルの屋上などに庭園式の設備が出來て居る、其邊では夏季の暑さは仲々堪へられない歐大陸と比較したら非常なものだから、夏季は皆納涼の爲に此ルーフ、ガーデンに集る、其處で又音樂を催せば舞踏もやる、劇も開く、即ちルーフガーデン、セアターなるものが有るので、大勢相集つて歡樂を共にすることが出來る、而かも此處に集るものは單に宿泊人とかいふ限られたものでは無く、廣く公衆の出入をも許してあるのだ、が佛國の如きものはない、佛國では又米國とは違ひ氣候が餘り暑くないから斯かるルーフ、ガーデン、セアターの如きものの必要はない、其他獨逸へ行かうが、墺太利へ行かうが英吉利へ行かうがまだ巴里ほどの設備はない、僅に伯林に於ては一夏季演藝場とも見る可き者はクロールの庭園位なものである。

元來巴里は世界の遊園である、巴里の土地のものは仲々儉約だから餘計な散財はせぬが、何しろ全世界の人間が金を持て年中此公共の一大遊園へと遊びに來るので、彼等は之を迎ふるに甚だ經營を盡して居るのだ劇場などといつてもシーズンになれば其觀客の三分の二は是れ英米獨露の者で占めるといふ有樣で、土着の巴里ッ子は甚だ少い。然し休日には多少土着の人も能く見掛ける英國では休日には何人も規則正しく休む、料理屋の如きものも午後の三時から六時迄は全く營業を停止するといふ有樣、見世物、芝居の如きは絶對に休む、つまり、休日は人が安靜に安息するのである此點は英國の甚だ他國と違つて表面は生假面な所である、大陸とは丸で違う、それ故英國人は日曜などには先づ寺に行くか、又金のある者は田舍や郊外へ出る習慣になつて居る、が大陸であると休日には中以下の人は擧つて市街に集つて歡樂に飽かうとする、從つて娯樂的設備も許されてある。とはいへ、英國人といつても禮儀正しく見せるのは只國内丈の事で一歩國境外へ踏み出せば所謂旅の恥は掻き棄てとの量見も幾分か交る樣だ、随分放縦なる遊びもする米人などは特に其氣味だそれ故日曜などで英京で面白可笑しく遊べぬ爲に不便を感ずるものは、直に帶一筋の海を渡つて一寸巴里に行く、倫敦から巴里といへば海を隔て國を異にして居るから實際を知らぬものには餘程の距離のある樣に思ふが、其實水路陸路を引つ括めての時間僅かに急行七八時間にして達することが出來るのだから、東京から名古屋へ急行で行くも同然だ、で随分一晩泊りの豪遊を試みて戻るといふものもある、兎に角巴里の地たる旣に此の如き所であるから、獨り劇場又は演藝場とのみ言はず凡て外客を迎ふる設備に於て、最も進歩したものを用ゆる。ホテルの如きも左樣である、是れは特に巴里に限られた譯ではなく大都會に段々見へる現象であるが、一等ホテルの體裁は近來大に米國式を用ひて多く各室に便所と湯殿とを附屬せしめ且つ流水裝置を取つて居る、歐大陸では一等ホテルに多く此裝置を付け出したは近來の事で、以前は其設備が甚く有ると

いふ事はなく、大抵一階に幾ヶ所二階に幾ヶ所三階に幾ヶ所といふ樣に、共有的になつて居るを常とする、又手洗用の水も汲み貯へられてあるのだが、之が米國のホテルには餘程前から進んで居て各室分有の上に洗面用に流水を使ふといふ事になつて居る、ロンドン伯林巴里の如き萬國的大都會には近時追々之を採用して居る、歐洲人と言つても自分等の習慣とは違うが、此米國式は成る程便利は便利であるから自然に之を喜ぶ、從つて其ホテルは歡迎されるといふ傾になつて居る。此はつまり米國人の歐洲に多く來る證據である。

二、彼地の生活

日本の生活程度は段々に高まる、物價は段々高くなりつゝあるので、今では歐洲諸國と格別の大差はなくなろうとして居る、否、物によつては却つて彼地の方が品がよくて安いといふ次第、先づ食物からいへば、私などは食道樂で隨分諸國で種々な料理屋で色々なものを食べ試みたが、巴里では此方の金に換算して四五十錢位の處で一寸した料理が食べられる、西洋料理だから無論西洋が本場である、價に比して調理もよければ原料も宜しい、又七八十錢も出せば、麥酒の二杯や葡萄酒の半本までも飲んで一寸した輕い肴も食へるといふ譯て、同じ日本の同値の西洋料理とは比較にもならぬ、又上等のになれば其價に限りがない位てある、烟草の如きも此方て一寸奢るものは舶來品を唇にするが、之も歐洲ては先づ安い方て佛國の如きてさへ日本のより安い、更に衣服といつても一揃て二十圓位から着るに堪へるものがある、左樣な次第だから、今日となつて中以上の人達が一日十圓位の格て夏季に內地旅行として散財するなれば、それ丈の錢を以て隨分、海外の天地に呼吸し、海外の涼氣に避暑することも出來る、ヲマケに西比利亞線て行けば一ヶ月て往復が出來るから、中以上の人は夏季休暇に一寸出掛るがよい、室代としても甚だ安いのがある一ヶ月十五圓か二十圓位の處て相當な室が借りられる、又家賃としても比較的廉いのが澤山ある正金銀行の倫敦支店長の社宅の如き、三階建の大きい家て僅かに一ヶ年百磅、換算すれ

ば千圓だから一ヶ月約八十圓位のもの、之が東京であつたら迚も其値て借りられはせぬ。それは高いものを望めば上に上がある、限りもなく有る事亦日本の比てはないが、尋常の生活をする氣て行くなら何も大した散財の必要はない、靴下、シャツの如き細かなものても無論彼地の方が安い。すれば殘る問題は旅費の點だが、之とても今日に在つては左程てもない、旅行日數は非常に短縮されて居るので、東京から出立して伯林迄が十三日、巴里迄が十四日、倫敦迄が十五日てある、て勿論一二等の急行列車て行けば約二百五十圓位から五六百圓位はかゝる、又旅行の模樣に由つては八百圓も掛ろふが、無暗に急ぐ旅てなく贅澤をしやうといふてもなくば、シベリア線も普通の列車に乘つて行く事が出來る、又三等て行く事とすれば是なら百五十圓位ても濟む、又其位入らぬ事もある萬事節儉を旨とし食物も自分て隨意に求めて隨意に食ふといふ樣な事にすれば安直に上る大きい停車場ては汽車の窓から顔さへ出せば賣物は幾らも來て居るから不自由なく買へる中以下の歐洲人などは皆之をやつて居る、各大驛には料理屋も揃つて居れば賣りにも來る、彼等はそれ等を一々買ひ調へて、携帶し居る石油ランプや、アルコールランプまでも持出して點火しては燒くものは燒き、沸かすものは沸かして飮食して居るが、此は先づ露國風だがそれに倣へば餘程經費は省ける、併し普通列車てあると諸所て休むから十八九日の日數は浦鹽から歐洲の要所までに要するのである、更に安直を求めれば露西亞獨逸などには四等車といふものさへある、但し之のみて通しては遠方へ行き惡い、此四等車の有る處は露西亞と獨逸だけて其他の國にはない、それ故巴里行などいふものもなければ、伯林行といふものも遠距離の方にはない、且つ車室内は四周にベンチがあつて眞中は立つ事になつて居るのもあるから、何かに不便てはあるが、それを忍んて次ぎ次ぎに進んて行けるならば百圓ても旅行が出來る。但し露西亞内地だけは非常に長時間を要するものてある、それても三等車は寢臺付きの設備になつて居る。

が只困るのは三等四等に乘るとなると少なくとも通過地の國語は少しでも知つて居らぬといけぬ、非常の不便がある、一二等ならば客種が雜つて居るから大抵英語とか佛語とか、自國以外の國語でも一つ二つは知つて居る者が多くあるが、下等客となるとそれが無い皆自國語のみを話すものばかりである。又驛員及び稅關吏等の取扱方も甚だお粗末のもの、例せば同じ荷物でも一等客なら稅關吏の檢閱を受くるに臥ながら指圖して濟ますものもあるが、下等客であると荷物は稅關吏の來る每に車室外に抛り出される、處によつては隨分隔つた場所まで自分で荷物を持ち運んで漸く檢閱を濟まして又車室內へ持戾るといふ樣な面倒をする。若し癇癖でもあつて無暗にそれを起す樣なら迚も乘り了せる事は出來ぬ。それに又車室が穢い、西洋人は中以下のものとなると丸で湯を使はぬ身廻りも不潔極りない、惡臭はする南京蟲は居る、兎もすると二等車にまで此南京蟲の居る事がある、然しコウ云ふのを辛棒すれば安價で旅行が出來、又彼地に着けば前御話した如く安く生活する事が出來る。

三、書生生活

書生生活などとなつたら彼地では簡易に行く、大體は前に御話した樣な萬事安上りで諸事をやつて行く然し是には彼地の土着の書生のやり方で、先づ月に三四十圓で濟まされる、彼地の書生などいふものは極めて質素な生活をして居るもので、六、八疊位の一室の中に便器も洗面器もベッドもあるといふ處に生活して居る、その間代は大抵七八圓位から十圓位の處、書物は圖書館へ行つて讀めば十分に用を充たし得るから買ふ必要はない、食物も自分で作る、朝は麵麭と珈琲位で濟まし、その珈琲も自分で石油ランプで調理すれば五六錢で足りる、晝と晩とにはソップや肉位を喫べる、それにも學生には特別に安く賄ふところがあり、晩と晝との二食だけで月八九圓位で食はす所が大學町にあるそれでも各々二品位はある、晝は大抵溫いもの夜は冷肉、即はちハムなどの類を喰べさせるが、之でも土着の者は我慢の出來ぬ事は無い、それ故隨分苦學する

積りて行くなら、彼方へ行つても大した金を遣はずに修行もして來られるのだ、けれども大抵の苦學的日本人はその辛抱が出來ず、最初はやつて見ても一月二月と經る儘に次第に經費を增大する、彼地の書生は仲々儉約なもので、地方から來て居るものは着物の洗濯などにも商賣人にやらさず小包料の安いのを利用して皆郷里へ送つてやつて貰ふ、洗濯料は大分高い、でも儉約すれば月一二圓で濟ます事も出來る。

私は此度は六月八日に發足して彼地に赴き巴里に一番長く、二月も居り、倫敦には十日、伯林には三週間程、往復共全體で四ケ月といふ短い旅行をして來たのです、尤も今では前にもお話しした通り、片道廿五日往復三十日で宜いのだから、正味三ケ月は彼地に居つた譯である、然しナンダか半年以上も居た心持がした是は旅行が短縮したからだ、實は公用は一週間ですましたから、すぐ歸れば七月には歸れたのですが今年の東京の夏は非常に暑いと聞ましたから、少し凉しくなる迄と思つて十月に歸つて來たのです。(談話筆記校閲濟)

海外消息

九月二十八日巴里より

無念庵

佛國陸軍の無規律……英獨戰爭論……露國海軍根據地の移動……英國豫算案……

●●謹啓　歐米詩人の所謂「收穫（みのり）の秋」に入りて、列國は野外演習に忙はしく相成候も、今年は左したる六かしき議論も起らぬやうに候。

▲隱れたる外交家として有名なる墺國の某伯、昨夜其孫女を携へて巴理に來着せられ、盛にマコンに於ける佛國陸軍演習の成功を賞揚し、昨年に比して長足の進歩をなせりと吹聽致し居り候、しかし伊國の陸軍は依然として佛國の陸軍に候ものか、マコンの演習に參加せる某軍は其演習を終りし當夜何者にか聯隊旗を盜み出され、露隊の中に投棄せられたる由。

▲陸軍側の辨明には兵營内に無政府黨員の忍び込み居たる故なりとあれど、此の報を得たる巴理の市民は今更の如く其無規律に呆れたるものの如く、益々佛國陸軍の前途を悲觀する新聞紙も有之候。

▲獨り政府、陸軍及び其他總てに反對なる例のヘルヴ氏のみは雀躍して軍旗を投棄せる行動を賞讚し愛國心てふ極めて最劣なる僞善も斯の如く侮辱せらるゝを可とすと述べ居り候。

▲然し列國の政界は之より益々活氣を呈するに至るべく、シーズンに近

づきて、外交は愈々興味あるものと相成るべく候。獨國の某伯は又謂て曰く、必竟外交は道樂なり眞面目なる職業にあらずと、時々又海山千年の古狸たるを失はずと申す者も有之候。

●英獨戰爭論　最近の紐育通信に、目下米國漫遊中の英國海軍大將ベレスフォード卿は、紐育市の或る取引所員に招待せられ席上、最も巧みに英獨戰爭論を述べたり、ベ卿は先づ世界の平和は海軍力に據ると雖も、其海岸及び殖民地防禦に必要なる限度以上に之を擴張する事は自然隣國の惡感情を引き起すものと見做すを當然とすと述べ、一轉して獨逸が近來しきりに海軍擴張に熱狂し居る事を述べ、終に臨て、予は列國の近き將來を樂觀する能はず、予は他の英國人と共に異樣の怪兆を天の一方に見たり、但し予の地位及び現下の形勢は予をして之を明に言ふを憚らしめたりと論じて、暗に近き將來の大戰は獨逸なる事を聽衆に意識せしめたりと有之候が、倫敦メール社長ノースクリッフ卿及びタイムス編輯長ベル氏は去月二十一日桑港に至り堂々たる一個の新聞記者の言としては少しく不謹愼の嫌あるまでに、獨逸の現狀に冷罵を加へ、英獨兩國は同一目的を遂せんが爲め同樣に海軍力の養成に競走しつゝあり、此結果は必ず英獨戰爭となつて現はるべしと明言したり、ノースクリッフ卿は曰く、「今や英獨戰爭は日露戰爭若しくは普佛戰爭の避くべからざりしが如く迫れり、兩國の關係は恰も二個の列車が單線鐵道を疾走するが如きものなれば、早晩衝突の來るべき事は今更論ずるを須へず、獨逸人口の增加は急切に新殖民地を要し、工業の發達は新市場を發見するにあらざれば、反て危難を獨逸に與ふる事となるを以て、獨逸の政治家は其パン、ジャーマン主義の大野心以外又別に新天地を歐洲以外に求むる事を夢みつゝある勢の然らしむる處ならん、然るに彼等が垂涎措く能はざる處は既に英國の國旗飜へり居るを如何にせん、英獨戰爭は一千九百十二年獨逸が現在海軍の完成せる後にあるべし云々」と。之れ數日前巴里の某紙に達したる桑港電報なるを以て、吾人は容易に其事實を信ずる事を得ざるも、兎に角英獨人心の隔離は思ふに事實なるべしとの事に候。

●露國海軍根據地の移動　露國は昨年英露佛三國同盟の締結せられし際、英露兩帝の會見地となりたりしレヴアルを以て帝國第一の軍港となすに決したる由、「ル、タン」露都通信に見えたるが、其理由としては現在の軍港たるクロンスタットは芬蘭灣の奧にあり、且つ露都に近きを以て一朝事あるの際には不便多かるべしと云ふにあり、之れ又一說として聞く價値ありと存じ候。レヴアルは其位置形勢共に露帝國內隨一の要港なり、若し之を露國海軍の根據地となすときは、三國同盟は之に依りて新なる光彩を放つべし云ふ。

●英國豫算案、地主と政府との大衝突　英國は過度の海軍擴張の爲め豫算に大膨脹を來たし、政府が如何にして其大穴を埋めんかとは中外の等しく注目する處なりしが、藏相ロイドジョージ氏は遂に土地所有者に重税を課する事に决し、案を具して之を上院に提出したり、

由來英國は地主の樂園とも稱せらるゝ處之に據りて各種の事業を營む者も多く、地主の讓を奪ふはそれと同時に是等の生業者に大打擊を加ふる事となるを以て、反對は地主よりも寧ろ此方面より激烈に起りたり。

▲而して政府案に贊成する者は下院を中心とする自由黨(其一部は反對)及び社會主義者等にして藏相ロイド、ジヨーヂ氏之が總指揮官たり、殊に首相アスキス對ローズベリー卿の論戰は愈々双方感情の隔離を來し、所詮下院を解散する外他に手段なきに至りたり。倫敦の諸新聞は早くも總選擧期を豫想して本年十一月とするもの、來年一月とするものとの兩說に分れ、議論紛々たる有樣に候が、諸黨も又それ〴〵既に選擧準備に着手し、現政府の運命を此一擧に決さんと焦心しつゝありといふ。

▲倫敦タイムスは之に關して論じて曰く、若し上院にして社會主義を含蓄する豫算案を可決する事とならば、之れ上院は下院と合して國民を無視し次いで國民の將來を決定せんとするものなるを以て、其實は重大となるべし、上院も下院も自ら斯の如き重大なる問題を決定するの權利なし」と。タイムスの此の嚴肅なる論調は等しく敵味方の心膽に徹したり。

▲因に云ふ全英國の領土は其大半は二千有餘人の大地主に依りて所有せられ、其大地主中の最も大なる者はサウザーランド公の百三十五萬八千六百エーカルにして、デボンシエア公の十八萬六千エークル之に次ぐ、而して是等の大地主が陰に陽に英國の產業工業等に貢する事は極めて大なるものありて、コブデン、ブライト以來農地主は實に英國の花と云はれたるものに候。

●英國自由黨の分裂か　アスキス內閣の地租案は獨り上院の反對のみにあらず、殆ど各方面の感情を害し。タイムス、スペクテーター等を始めとし、幾多の有力なる新聞雜誌より重圍攻擊の姿となり、現に前に述べたるが如く、自由黨領袖の一人たるローズベリー卿の如きは動もすれば、黨內の不平分子を提げて脫黨せん態度を取り居り、殊に彼等の激烈なる反對の聲は一般選擧人の上に少なからざる影響を及ぼし來り、此儘にて押し進まば自由黨は或は其一部の解崩を見るやも知れずとスペクテーターは申し居り候。

▲ローズベリー卿の言論に關しては、タイムス、メール、テレグラフ、スペクテーター等論評區々にして、中には卿は既に保守黨に合したりと迄へ云ふ者あり、卿は之を以て、自由同盟會理事會の席上、會長を辭任する旨を宣べ、會員は之を容れ、且つ卿の功勞を長く記錄に止め置くべしと決議したり、卿は早晚公然自由黨を脫すべしとの噂とり〴〵に傳へられ候。

●米國ハドソン河の三百年祭　今年はハドソン河發見後三百年に相當し、且彼のフルトン氏が渡航を成功せしめたる百年祭にも相當するを以て紐育にては双方を兼れたる大祝祭を擧行し、二週日の間頗る大なる規模の餘興あり列國軍艦はハドソン河口に集りて、それ〴〵本國政府の祝意を表したる由。

●コンゴー自由國開發の新曙光　白耳義太子アルベルト親王

は本年四月中マルフヱイー大佐及びモール大佐を隨行せしめ、南阿に向て出發したりしが、去月十六日愈々コンゴー自由國巡視を終りて歸朝せられたり、親王は初めケープタウンに上陸し、親しく山野を跋渉すること八十餘日、歸國に際しブラッセル市に於てコンゴー自由國の最も有望なる白耳義殖民地たるべきを宣言せられたり、而して隨行の兩大佐は未だ新殖民地巡廻中なりとのことなれば、白耳義政府はコンゴー自由國合併後愈々之を開發せん意氣込なる事明瞭となり候。コンゴー自由國の合併問題は久しく白耳義國民を腦ましたる難物たりしを以て、白耳義は是非とも之を極めて有利に開發せざるべからず、アルベルト親王今回の巡視は誠に時を得たるものと云ふべく候。

●東洋語研究法案の內容　曩に獨逸の陸軍大學に於て日本語の一科其教科目中に加へられてより、所々の大學に於て日本語支那語の研究の必要を認むるに至りしが、英國大藏省にては、東洋語研究法調査委員會を組織し、此程來調査せしめ居たりし處、其結果は愈々委員會の報告となりて發表せられ候。次に該報告の要を摘記すれば。倫敦セネート大學の監督の下に東洋語學校を設立し、皇帝親任の委員二名をして其事務を取らしめ、政府は年々千七百二十五磅を支出する事等にして、大藏省の主たる目的は之に依りて通商上の利益に便せんが爲めなりといふ。

●南米諸國の覺醒、大戰爭近けり矣　南米諸邦の覺醒は最も注目すべき近來の一大現象なり、吾人は米國が是等に對して冷然たるを見て其先見の明なきを戀しむ者なり、とは獨紙「ツイタン」の道破する處、同紙は更に之を布演して。南米の二强國は實に久しく世界外交上の侮辱を忍び居たり、されど之れ彼等が聽て其武器の精銳と軍備の充實せらるゝを俟ちて、大に爲すあらんとするが爲に忍びたるのみ、而して今や太平洋問題は起れり、アルゼンタイン共和國は全然度外視せられて、太平洋問題を口にする事を得ざらしめられたるも、ヘークの有名なる一外交家は太平洋の前途を瞭視して、本問題は將來南米問題をも包括するに至るべき事を明言したりと論じたり。

▲更に巴理「フィガロ」も又南米諸邦の將來恐るべきを述べたり、即ち、「南米諸邦が戰艦購入の資力を有するや否やを口にする列强の海軍大臣等には、未だ是等の諸共和國が大艦隊の遊弋を希望する事切實なる事實に思ひ到らざるべし。彼等はアルゼンタイン共和國が軍艦を賣却せんとするを見て之れ彼等の財政が窮乏し居る結果なりと思はば誤れり、事實上彼等は最も富裕なる財源を有す、ブラジルも又然り、而して智利に於ける輿論は常にアルゼンタイン共和國の人心を動搖せしむ、彼等が常に彼等の軍備を得んとし努めつゝある事は敢て南米通を俟て始て知るべき事にあらず、今やボルビヤの如きも獨逸の士官を聘して其軍隊を訓練しつゝあり」と論じて南米諸邦は長く平和の地たるを得ざるべしと豫言したり。

▲其他伯林「ポスト」、「トリビユナ」等同じく鋒を揃へて南米諸邦の覺醒を說き獨り米國のみならず歐洲列强も又之れ等閑視せざるに至るべき事

を主張致し候。

●露帝の訪獨伊說とダーダネルス海峽　本月二十一日のタイムス露都電報に曰く「露國皇帝は獨逸及び伊太利を訪問せん御豫定なりしが、皇后病氣の故を以て一旦之を中止しクリミヤに向へたるも、更に獨伊訪問に決して羅馬に向ふべき摸樣なり」と、之れ最も注目すべき報知にして、早くも之れ或はダーダネルス海峽問題を意味するにあらずやと云ふ者あり。

▲露國はクリミヤ戰爭後土耳古との平和を確保せんが爲め、黑海に露國艦隊を遊弋する事を禁ぜられたり、其後一千八百七十一年の倫敦會議に於て漸く其權利を回復する事を得たりしも、土耳古は昔より外國軍艦をしてダーダネルス海峽を通過せしめざる締約を列國との間に成し居るを以て、露國は假令黑海に露艦を置くとも之を以て地中海に出づる事を得ず、之露國が如何にもして此締約を脫せんと努めつゝある所因なるが、昨年夏即ちバルカン半島の風雲愈々急ならんとせし際、露國が該問題を土耳古に提供せん意志ありとの報露都通信員に依つて傳へられたる事あり、其後墺太利國の二州合併の際にも、該海峽通過問題は露國外相イズオルスキー氏と墺のエーレンタル男との話頭に上りたる由、之れ露帝の獨伊訪問と聞いて直にダーダネルス海峽問題を想起する所因に候。

▲其果して然るや否やは未だ遽に明言する事を得ざるべきも、二州合併及び其他の諸問題に對して露國の豫想外に穩和なる態度に出でたりし一事は、エーレンタル男との間に何等かの默約なくては叶ふまじと想像するも無理ならぬ處に候。

本誌來年の正月號は
創刊二十五年
第二百五十號　**紀念號**
に當るを以て今より材料の
蒐集に努めつゝあり



趣味の滿韓

柯生

（一）

○愛親覺羅氏の祖先は源義經なり、其淸字を採りて國號を爲したりしは淸和源氏の淸字に取りたりとの伊勢貞丈の說、滿洲なる地名は義經が其祖滿仲朝臣の名に因みて命名したりとの伴信友の說、共に史家の唾棄する所にして而して僕甚だ其所說の日東健兒の爲めに氣を吐けるを愛す。

○世の滿韓を語るもの皆利と權とを言ふ、僕今夏白山黑水の邊に遊びて利權以外の滿韓を見たり。

○想起す、一昨春僕北滿よりの歸途東淸支線の列車中偶々佛國知名の東洋學者シャバンヌ氏に邂逅し相携へて瀋陽に入る。

○シャバンヌ氏奉天に旅裝を整へ、警護の支那巡警數名を隨へて遠く鴨綠江畔通化縣への旅程に上る、當時馬賊猖獗内外人皆其放胆なる行動に驚く。

○通化縣洞溝は高勾麗の首都國内城の遺跡として、又好太王之碑現存の場所として史學家の間に名あるの地其好太王之碑巨大を極め重量四十噸と稱す、而も白人シャバンヌ氏が東洋學者の名に於て一碑石の爲に遠く巴里より到りて冒險的旅行を敢てせるは多しとすべし。

○單に利源調査、門戸開放、機會均等を叫びて滿韓一帶を俗了し去らんとするものは趣味の賊なり。

○撫順炭坑敷地内高麗燒の窰蹟あり、僕千金寨視察の後迂廻して窑爐の遺跡に至り其赭土の窩邊に土偶の肢に類する素燒の一片を拾ふ。

○思ふに此の一小土片以て支那史に所謂東胡民族が黑水を下りて國を長白山邊に建て、覇を稱したりし其範

圖が今の北韓より遠く北方撫順邊に及びたるの事蹟を證明するに足る。

○アレクセーエフなるものあり、露の海軍大將として極東太守府を旅順に開き倨傲自から居る、露人が關東州を租借し南滿洲を經營せる數年其間何等土地に對して貢獻するなし、露人の名に於て旅順に紀念すべきもの亞太守、須將軍以外唯一戰爭畫家シピヤーギンの名あるのみ。

○我に内藤湖南あり奉天文溯閣に古書調査を爲し、鳥居龍藏あり旅順老鐵山上の古墳に古代住民の研究を試み、博士白鳥ありて松花江畔に金の舊都を探る。利權以外に於る滿洲啓發の漸く邦人の手に致さるゝは之を露人の無爲なりしに比して多しとすべし。

○僕今次の行安東縣の客舍に速水奉天副領事と會談し談偶々好太王之碑に及ぶ、氏乃ち柳行李の底より石摺を取出し言ふ是れ好太王碑の石摺なりと、之を開かんとして六疊の座敷尙狹ふして全幅を開き得ず。地の利と同文の便あるにあらざるよりは一領事豈能く這個學界の珍を手にし得んや、若しシャバンヌ氏の苦心に對し來る難易の差豈千里のみならんや。

（二）

○慶州は羅朝千年の舊都たり、而して王陵壘々、默して二千年の興廢を語る。

⊙慶州城の南半里石築の古塔一基あり、芬皇寺九層塔なるもの、今崩壞して其三層を遺す塔下三個の石獅あり叢中に起伏す、大さ四尺許貌狀極めて雄魁なり。

○九層塔は西曆六百三十四年の建造たり、若し荒草の間に遺棄せらるゝ石獅の一對を迎日灣より舶載し來り之を伯大隈の邸に移して千三百年の青苔の天衣に包まれたる石獅に早稻田邸の玄關を飾るあらば主伯との配合調和極めて妙ならん。

⊙僕慶州に遊ばんとして途を大邱に取り、某韓吏の家に三國遺事及東京誌三卷を見る、其羅朝の盛代を記する所「城中無一草屋、接角連墻、歌吹滿路、晝夜不絕」の文字あり。

○足一度慶州に入る、茅屋矮舍相櫛比する猶他の市邑

に似たり、獨り民家の墻壁に廢石斷柱を亂用し、野徑原頭に敗礎巨材の轉散するを見るに於て人をして新羅千年の盛代を想はしむ。

○僕慶州に入るの日直ちに韓馬を賃して府の西南里餘の地に太宗武烈王の陵を弔ふ、碑碣既に失せて現存せる巨大の龜趺を見る狀形彫刻共に唐代のものに類す。

○王陵を辭して途を東に取り瞻星臺に登り轉じて奉德寺に韓國最大の梵鐘を見其擅坐の紋樣が我奈良朝のそれに酷類するあるを見ては共に唐代の文明を師としたるを想ふ。

○韓牛は大にして韓馬は小なり、滿洲に騾あり馬と驢との雜種にして體軀亦其中間に在り、而して韓馬は正に驢と騾との中間に位す。客の韓馬に由るもの馬背に上らずして其肩に踞し、兩脚頸を挾みて鐙なく、兩手鬣を握りて勒を用ひず。

○慶州の南四里にして佛國寺あり、西曆七百五十二年の建造として韓國藝術の活歷史たり。僕慶州より韓馬々上の人と爲りて佛國寺に向ふの途、砂川の水邊烏鵲多く、村娘出てゝ白衣を石に打ちて洗ふ、馬夫先に立ちて小走りに走り、韓馬歩を運ぶ甚だ急、馬鈴の響高ふして烏鵲驚き村娘は靜に馬上の僕を睹る。

○佛國寺の佛像伽藍皆可、而して最も審美眼を惹くものは大雄殿前の多寶塔なり、花崗石材に細緻なる彫刻を加へたる此の如く、千年の雨打風敲に委して而も些の廢損を見ざる此の如き、奇巧終に及び易からず。

○僕乃ち多寶塔の礎石に踞して憩ふ、礎石下薔薇の丈低きもの一輪の花を戴す、花瓣鮮紅燃へんと欲す、僕覺へず手折りて襟邊に挿む。

○境内を一巡し紫霞門外に立ちて靑雲橋下の芝生に乘棄てたる韓馬の悠々草に飽くの狀を見、泛影樓に登りて眸を蔚山方面に放ち再び歩を移して殿前に還り一僧を先導として背後の吐含山に上る。

○若し夫れ吐含山頂の石窟庵裡二丈五尺の大石佛を仰ぎ見ん時、誰れか古代の韓人が能く技巧と偉大とを解し得たりしに喫驚せざらんや。

○予曾禰統監に副統監として南韓を巡遊し慶州に至り佛

國寺を訪ひ更に背後の山道二十餘丁を攀て終に石窟庵に到る、土民甚だ之を德とす。

○僕石窟庵頭櫻樹の甚だ老さるものより櫻實を挐き桑樹の太だ高からざるものより桑實を摘み來り巖角に踞して渇を醫す。

○韓南の山上に櫻と桑とを見んと旣に豫想の外に在り其實を採りて渇を醫する更に豫想外なり、而して此巖角より放眸直ちに日本海を望み得るに至ては寧ろ望外なり、

○大邱觀察使朴重陽君頗る善く當代の事務を談す、韓人中能吏の稱あり、朴君一夕僕の爲めに特に純朝鮮料理の宴を自邸に張る、主客三人卓に着く時、白磁の碗約六十卓上に列せらる、杯に盛る平壤の古酒濃紫恰も古葡萄酒に似たり。

○朴君說明して言ふ、此膳尙ほ略式なり此他の佳肴珍味多く需め易からずとするも、碗の數に至りては一人の膳部優に五十を超ふるものありと。

○朴君に二子あり共に我滋賀中學に在學す、蓋し近江の地昔時韓國と特種の史的關係を有す、湖東八日市に百濟寺あり韓人の建設に係る、日野町に韓人鬼出集斯の墓あり。朴君が愛兒を滋賀在の一農家に托する、或は這般の史的趣味に因るか。

○慶州に於る羅朝懷古と佛國寺に於る古代韓人の藝術研究とは共に朴君勸誘の賜なり。

（三）

○僕京釜線に密陽驛を過ぎ、驛に賣る所の鮎鮨一折を買ひて之を車內に味ふ、風味恰として函嶺下のものに似たり、車中妓生三四あり、喃々能く語り能く歌ふ、「鮎鮨に紅衣の妓生歌ひけり」、寫實の即吟なり。

○南滿線に熊岳城驛を過ぎ、熊岳川の水淸くして砂礫なる、風物の密陽河畔に酷似するあるを見て僕端無く鮎鮨と妓生を想起す。

○關東州の鱺、大連の鯛味噌共に新發展地に於ける邦人の好土產として賞味すべしとするも妓生の風情に至りては獨り韓國の誇なり。

○京城鐘路の明月樓は一流の旗亭にして朝鮮料理に名

あり、僕一夕帝國新聞社長鄭雲復君の招宴に列す、漢城妓生の粹十餘名酒間を周旋す。

○試みに妓生の風姿清楚なるものに就て其名を問ふ、杏花、春外春、月色、蘭珠あり。御神燈に假名文字の名、調和せざるに非ず、只李氏の帝城月前の宴に春外春月色の名切に捨て難きを想ふ。

○開城は高麗の舊都たり、月明の一夕僕單身野外に杖を曳く。

○市の一端民家漸く盡きんとして絃歌頻に到る、墻に倚りて窺ふに妓生擔下に月に歌ふ。五百載の廢都の月色亦他に一物を要せず。

○平壤は官妓の產地たり、大同江畔の夕、宴席に官妓二三を聘して一絃琴に古詩一篇を彈せしむ、清興樓に湧く。

○安奉線の沿道に金家堡子を過ぐ、一村の婦女豐頰月眉を以て名あり。

○滿洲各地の山頂小丘に娘々廟あり、陽春五月某日娘々廟詣の俗あり、各村各屯の婦女皆家を出てゝ參詣の群に入る、少婦幼女の戸外の遊を爲すもの年中唯此一日に過ぎず。

○氷融け寒和らぎ溫風漸く到るの時、楡樹の陰、楊柳の邊より銀簪蓬髮の滿洲少婦が四五一團を作りて跟々步を移し來るの情景は支那の獨特なり。

○征露の役我軍既に鴨水を渡り、九連城を陷れて旅を鳳凰城に給養す、偶々娘々廟祭に際し鳳凰山頂亦老廟あるを聞き全軍の士卒暇を得たるもの相前後して登山し心窃に盛裝の美婦を夢想す。

○豈に圖らんや殺伐の氣滿洲の野に滿ち堡子屯子皆日本の兵營と化して長隴曲圃紅帽相望む、民家の婦女相警して戸外に出づるなし、登山の士卒皆失望して下山す、亦軍旅の一佳話たり。

○娘々廟訓してニャン、ニャン、ミャオと言ふ、僕特に其發音の奇なるを愛す。

○滿洲の奇勝を語るもの直に千山の奇峰を以て我耶馬溪に比す、僕今次の行湯崗溫泉に浴する二日、溫泉宿の後庭より直に馬脊に由りて五十淸里の道程を進む。

○高粱の畑、大豆の畦に自然の徑を成して千山々麓に到り亦導者を要せず、獨り鞍上の僕は李白を馬背に置くが如く、馬は意のまゝに路傍の大豆を根引して喰ひ、高粱の葉を噛る。

○馬を山麓に棄てゝ登山二十餘丁滿山皆梨樹なり、樹梢を仰けは劍峯相倚りて天を摩す。

○巨巖屋の如きもの路傍に横はる、面に刻する「洞天一品」の四字筆勢雄健を極む、巖角忽ち眼を奪ふものあり、凝視すれば縞栗鼠の跫音に驚きて巖に隱れんとするなり、人生の惶急にして天地の悠々たるに似たり。

○龍泉寺に上りて清冷に嗽ぎ、樓に立て氣を吐けば四面の劍峰雲を排して迫り來る、寺は明の萬曆三十八年の建立たり。

○我が春畝老公哈爾賓に露人の雄者と會見し、東洋平和の大策を案して歸來一夕の閑を湯崗溫泉に養ひ、輿に駕して千山の探勝に得意の詩嚢を肥す亦可ならずや。

○若し夫れ四月春風滿洲の野に吹く時千山萬樹の梨花白雲の大觀に至りては固より東臺櫻雲の比に非ざるなり。

○されど千山の缺點は水なきに在り、若し山奇にして水清く、萬綠千江の眺あり、月白きの夜時に杜鵑を聽くの風致に至りては之を安奉線沿道の山中に求めざるべからず。

○隈岳子なるものあり曩に安奉線八景を撰す、曰く安東の歸帆、五龍背の奇峰、鷄冠山の杜鵑、秋木草の牧童、草河口の殘月、連山關の白雲、金家の豐頰、橋頭の牛車即ち是。

○海拔七百尺の幽境鷄冠山中に遊子杜鵑を聽く、風情棄て難きものあり。草河口は現時汽車停泊の處、海拔一千尺山間の清域にして狀景酷だ我輕井澤に似たり。只金家の豐頰は八景として當らず僕釣魚臺の暮雪を以て之に代へんと欲す。

○鷄冠山の嶮に二呎六吋の輕便軌條が延々迂折するの狀は天下の奇觀たり、若し夫れ安奉鐵道の危險を叫びて此の奇勝を知らざるものは以て支那の山水を語るに

足らざるなり。
○此の山水の勝地が日清間外交の難問題たりしは憾とすべく、此好紀念ある鐵道が改築せられて其奇觀を遺さゞるは更に大ある憾たり。
○改築後の安奉線は僅に八時間の短距離に縮められて亦草河口の客舍に一泊の要なく、杜鵑の鶏冠山は二三分時の墜道と化すべし。
○私に聞く、此好紀念を有する天下無比の安奉鐵道の爲めに其模型を造りて畏き邊に奉るべしと、好企畫なり。
○倫敦タイムスのチロル、モリソン近く安奉線を通過して我軍事行動の甚だ奇抜なるに喫驚せりと傳ふ。

偶々續篇を稿せんとする時釜山の一友より書到りて曰ふ、好便あり例の古瓦を托す急に受領を乞ふと、筆を投して家を出づ。
此古瓦慶州、開城及奉天附近の佛閣塔廟に獲る所、皆千年雨風の友なり、偶受領し來て之を書架上に南洋諸島の古器と並列せんと欲す

柯　生

公設展覽會に於ける感想

紀　星　峯

天は高く晴れて、氣清い、十月十五日、文部省の第三回美術展覽會は開かれた。審査員の人選、美術家の確執など、種々の故障あつたにも拘らず、ともかく第一回よりは第二回と好評を博し來つた今度の第三回は如何であらうかと、種々の期待や疑問や想像に驅られて自分の行つたのは、丁度その日の一時頃であつた。さすがに場内は整然として、通路も列品の間も廣くゆつたりとしてゐる。當日特に招待されたフロックコートや羽織袴の嚴しい姿も何となくふさはしく、作品にも一種の威嚴一種の品格が添はつたやうに覺えた。

併し最初に懸けられた森月城氏の見せ物の或は展覽會を見せ物と利して特に最先に陳列されたのかは知らぬが、その着想と猿の描法とに於て去年の栖鳳氏の飼

はれたる猿と兎を摸倣したる作や、（榊原紫峰氏の動物園の猿も同様）、單に生采なき岡と川（平井直水）獅子（望月靑鳳）牧童（疋田芳沼）や、着想と色彩とに對照を著しからしめた鏡（鏑木清方）の傳彩と、殊にその神秘的なる一面の圖の技巧作意に走りて、生命の睛點を缺けるが如きを見るに至つて、心々不滿の空虚を覺え自意識の念、批判の心の高まるを禁じ得なくなつた。が幸にも足音往々絶えたる室に幾多の苦辛會心の作に對じ得たる心は、間もなく靜觀の怡樂に飛んて、畫象題意のさそふがまゝに移り行いた。

鹽原の奥（山元春擧）に溪四題（寺崎廣業）を憶つて對照の興に耽つてゐた頃、背後に友人K君の聲して、田舍の秋（高山春陵）五月雨（榊原苫山）等の所謂月並の作たるを指笑し、鹽原の奥の横卷に畫かれしは、下村觀山氏の小原御幸に倣つて、而かも對抗したのではなからうかと云ひ、綠雨霜葉（山田耕雲）の筆なく墨なきを難じた。我れは蹈險集利（玉舍春暉）に對しては、前面の西山翠嶂氏の轉迷開悟と云ふ命題のむつかしさとその描法筆意とを聯想し、大燈國師（猪飼嘯谷）に稍々着想の觀るべきを感じゐた時、審査員Y君の痩形が突然次の室より現はれた。同君は我れを茸狩（尾竹竹坡）の前に拉して推讃の語を洩した、我れは沒線的描法の氏が舊作に比し、その飄逸無邪なる筆致のよく題意に適ひたるを認め、又端なくも信貴山緣起等が如き古畫卷の飄逸奔放なる筆意を近代的にしたるが如きの感を爲したが、同時に畫品に乏しく、刷毛にて塗抹せる、胡粉勝ちの傳彩の不調和にして品位なきを窃に惜んだ。

今や我が目は纖月（菊地芳文）の幽境に轉じ、アレ夕立に（竹内栖鳳）の美しさに引かれ、霧（川合玉堂）や秋山雨後（寺崎廣業）や流燈（横山大觀）などの送迎に忙しくなつたが、この廣間には新進作家のT君、靑年洋畫家のH君、美術批評家のA君や、審査員の諸氏が居つたので、我が目は雨後（荒木十畝）油斷（尾竹國觀）等に開いてゐても、心は此等の諸氏の應接に遑なく、遂には全く現實の我れにかへつた。自分はこれより後も、

目を四方の列品より放たざりしも、歩みては話し、話しては歩みて休憩室に入り、思はず時を過したので彫刻と洋畫とに至つては唯一瞥したのみてあつた。故に自分はこゝに多くの作品に對する細評を止め、初めて場内を一巡して得たる二三の印象を記すの餘義なきに至つた。

自分には洋畫と彫刻とが、年一年發達の順境に向ひ、洋々たる前途に勇躍奮進してゐる若々しき健見に見える。殊に洋畫に至つては、その既往はともあれ、今は日に月に時尚に適ひ、世人に歡ばれて、波瀾なき多望の將來に素直(すなほ)に成長する好運に際會してゐるやうに見える然るに日本畫はと觀るに、或論者にその將來の悲觀されたるも道理、畫家の多くは歸趨に迷ひ、將來は愚か現在に於て正に生存の苦惱に悶えて、暗中種々の摸索を試み、少しにても何物かの手に觸れんと焦慮しつゝあるやうに見える。年々の出品に於て、日本畫には洋畫に見るを得ざる種々複雑なる事象が示されて、我等に解決を促すことの著しくなつたのは、その内證の發露である。現時の日本畫は洋畫よりもより多く眞面目なる研究と思慮とを我等に要求してゐる。自分は現に場内の日本畫の或物よりもその要求の聲を聞いた。我が印象はおのづから日本畫に强からざるを得ない。

依然第三回の會場の一半は、東京對京都の日本畫家の競爭場となつた。中に禽獸花卉の畫種は少なく、觀るべきものもない。山水畫を除いて、多きは歷史畫、風俗畫、人物畫といふ順序なるが、その多くは東京畫家の筆である。歷史畫に於ける描法彩色には一種の典型著しくなつて來た。そして與市宗高(尾形月三)射戲(荒井寛方)放虎(栗野觀鳳)惡者の靈(菊池契月)等にその例を見る。中て油斷(尾竹國觀)は技巧の達者なる點に於て傑出したるも、想に形に中心なく、多くの人物の單に點綴されたるに過ぎざるが如きは、合戰古畫巻と多く選ばぬ。人事に關した歷史畫や人物畫は依然記述的てなしと胸にこたへる、人生劇(ヒユマンドラマチツク)的の作は殆んどない。唯僅かに和樂(木島櫻谷)のあるを多とする位てある。文藝の大問題となるものは多くは日常事てある

生といひ、戀といひ、死と云ひ、何れか我等に尋常のものならざる。但たその各自に來り臨むや、特殊の運命、因緣、天啓に於てす。而してそを深く切に感ずるに至て清新な獨創な大作が成るのである。物思ひ（石川蕉玉）といひ、失意（橋本關雪）といひ、流燈（橫山大觀）といひ、特殊の命題を以てして而かも尙ほ清新獨創人を動かすに足らぬのは、宜しく再考すべきである。

最も多きは風景畫である。その中に京都畫家の靑物市（岡本蕉雨）京のまんなか（松村梅叟）花屋の庭（古谷藤三）八百屋のかど（入見勇市）などゝ題し、洋畫家の撰ぶが如き景致と命題とに着眼取材の新を想はしめた者がある。而かもその觀察は陳套て、題意にそはぬ心地がした。今年の風景畫中特に注意すべきは、形若しくは色に自然の風格よりも寧ろ季節又は大氣の影響したる自然の情致を現はさんとしたる者の多き事である例へば春の晨夏の夕（野村雪江）曉靄（田村豪湖）細雨空濛（田近竹邨）山村暮靄（川村曼舟）纎月（菊池芳文）寂寥（高瀨春曉）霞む春晴る秋（川中賴章）鹽原の奧（山元春擧）霧（川合玉堂）秋（上田萬秋）靜宵（吉原雅風）の如く命題に依つても察せらるる者が甚だ多い。山水を畫くに四時を按ぜざるべからざる事は、古く唐の王維の山水論にも見えてゐる。又墨を以て雲氣を染め呑吐變滅の勢あらしめたのは、宋の董源、巨然に早くも試みられてゐる、けれども元來東洋の山水畫は多くは主觀的に傾く。山水の或觀念をば畫家の感想を表現する一手段とする。眞の實在は我等の胸中に在りと思惟せるが如く胸中の山水を畫かんと努めた。事相の上に自家の精神を映發し體現せんとした。故にこの點より從來の東洋の山水畫は多くは理想的と評はれる。然に今の山水畫は自個に印象を與へた自然の情致を現はさんことを目的とこそすれ、決して方便とし手段とはせぬ。故に從來の理想派的の山水に比すれば、自然派的とも云はれやう。又科學的事實に據して、光線と色彩との瞬間的効果を描かんとする彼の西洋の所謂印象派とは、固より同視されぬが、併し古法舊格の常套を脫して、

自然に對し、そが光線的色彩變化の瞬間に於る即興の畫を描かんとせる所、從來の知的な象徴的山水に反抗もして情的な印象的な所、視官が迅速に總合的に捉へ得きる所の細目を輕視せんとする所など、多少彼れに似た所がある。故に意味でまた印象派的ともいはれやう而じて我れは斯る傾向をば場内の山水畫に著く感じためてある。

線に就いての各畫家の工夫と苦悶とは益々切になつたやうである。但し作品に依つて見れば、その工夫と苦悶とにも別がある。從來の發達した線に即して、而かもその特長を保有し益々發揮せんと工夫し苦悶する者と、線を沒するか、若しくは超越し得ざるまでも、本と離れ之を忘れんと努め悶ゆるが如き、即ちその顯著なる者である。彩色と線とを調和せしめんとする用意苦心企圖に至つては、此等に共通して見るを得るも、線と色との調和的表現法と線そのものゝ處置に至つては、兩者間に別がある。前者の錚々たる者は春擧、芳文、栖鳳、十畝、類章、江亭、玉堂氏等の作である。

此等の作は何れも近代(モダーン)の調(フイリング)を帶びて、清新な所があるが、併し中でも春擧芳文兩氏の作が、關西に發達せる近代畫派のクラシックの複興的傾向を示し、玉堂氏の作がその師雅邦に亞いて關東に發達せる近代畫の中堅たるクラシック派の殿將たるべき命運を負ふのてはないかと、高根の雪と霧の前に佇立して感じ瞑想に耽つた。

後者のチヤムピオンは大觀、廣業、竹坡氏等の作である。前者の諸作には線は積極的の力を現はしてゐるが、此等の作には消極的に用ひられてゐる、アレタ立に於てさへ線は大膽て、積極的である。之を沒せんと欲して處置に窮し、若しくは之が回避に努めたる流燈秋山雨後、茸狩などとの比ではない。勿論茸狩には線は縱横に用ひられてゐる。而かもその線は筆者が沒線的作品に於けるが如く、界線的(コントウル)である。廣業氏の兩作は種々の點に於て特に注目の價値がある。誰れかその溪四題と秋山雨後とに試みられたる幾多の苦心と努力とを諒知せざる。而かも雨後に雨後の情致乏しく、習

熟したる筆の草々と用ひられたる作に却つて調和の美を感じ、秋山雨後の樹法葉法等に却つて線に囚はれたるを感ぜざる者少なからん。

〇描線と沒線——鉤勒と沒骨とは唐代以來の問題てある。而かも古來この兩者の調和の美を現はされたる畫は、和漢に實に多いのてある。而して近く新意味の下にこの兩者の調和の美を圖り、この問題を或程度まで新たに解釋し得たるは菱田春草氏の落葉てある。この作に於ける線は所謂高古遊絲描的な氏が得意の優長順和なるもので、能く消極的な落葉の寂しみやさしみの表現と調和を爲してゐるにこの作は又色と線との調和如何に一歩を進めたる者てある。この兩者の調和は、不り夕立にも、秋山雨後にもまだ現はれてない。實にそれぞ我が日本畫家の難問題てある。かの沒線沒骨の問題も之が新解釋の前提に過ぎぬのてある。春草氏は今これが解釋にも一歩を進めたるが、併し自分の落葉に對して得たる強き印象は、寧ろ畫中に或物を感じたる事である。代々木村の木立の間に靜に散り行く落葉を觀じたる病畫友の眼に依つて、自分の感ずるを得たるその或物は、實にこの畫に久遠の生命てはなからうか。

自分はまたこの畫を以て近時著しくなつた色彩の情的な効用を認めてそを發揮せんとするに至れる新傾向の佳作と感じた。一體日本畫に於ける描線は何と謂つても知的である。知的であるが故にデフィニットである。その要素は容易に知られるが、自然物の情趣は現はれ惡い。そして用ふる墨も色を暗示するが、併し色彩をば與へない。その暗示するのも積極的色彩てはない。その濃淡の誤りない時に、我々の想像力が色をば補充するのであるから。(山村暮靄に稍々その例を見る)。又自然に於ける色は溫か冷か孰れかに傾く。然るに一抹の墨色は溫てあると等しく冷てあるから、明暗を看取することがむつかしい。そこで自然と彩色を用ひやうとする。殊に風景畫の如く、或特殊の感情氣持を現はさんとするものには、情的の色彩が自然とふさはしくなる。描線に比すれば色彩は情的である。色は我等

に深く觸れ、その感じはより多く本能的である。刺激に渇した現時に色彩畫の注意さるゝに至つたのも故あるやうに思はれる。又色には題意の興味より離れたる色そのものゝチャームがある。又よし日本畫の顏料は定限され不完全であつても、之が用法に於て舊套を脫することがむつかしくない。それ故に描線の上に看出されぬ新天地は色彩の方面に開けてゐる。ともかくターナーやホイスラーの如くに、自然に見ゆる色彩の美を示す方面に畫家が見界を廣げたのは賀すべき事で、一新現象とも一進步とも謂はれやう。而して色彩のものたる、之が眞正の印象は、色の調和か、若しくは自然物より得らるゝものたるが故に、日本畫家の用意工夫は自ら色の調和か、自然の色美の研究に注がるゝやうになつた。但し後者は洋畫に於ける特色であつて、日本畫には最も困難な點である。彩色の材料の點に於ても明暗を現はす點に於ても、光線の影響の下に於ける色の變調を現はす點に於ても、日本畫の顏料及び色彩法は、洋畫のそれと比すべくもない。如何に威張つても主要の胡粉及び墨は光線の影響の下に多く變化せざるを如何にせん。併し或論者の如く、日本畫の顏料や、寫實的基礎に本づける表現的方法の不完の點を以て、その將來の運命を云爲するは僻見である。未徹底の見てある。顏料の精粗は必ずしも作の良否と並行し比例するものではない。科學は繪畫に必要ではあるが、ヨーロッパの近代の畫家ほど、科學に苦んで居る者は世界にない。ヨーロッパの近時の畫評の中に、科學の進步即ち藝術の進步なりとの假定說を散見するが、正確なる解剖や、遠近法の知識や、光學上の法則の適確なる應用は、妙想的觀念の實現の効用を助くる外、藝術に重要なる價値を占むる者ではない。美術の目的は美にある。此等のものはその目的を達せしむる方便に過ぎない。況んや畫の表現法には色彩や明暗の價値の外に描線の法もある。かの論者は少くとも先づチシアンやヴェラスケッツやレムブランを了解する必要がある。

色の調和に就いては新進畫家に大に觀るべき作があ

る。アレ夕立に雨後と秋山雨後及び落葉の如きその最たる者である。廣業氏は自然に見ゆるが如き色の美を現はさんと力めて、洋畫的な彩色の厚さに工夫し、印象の美を現はさんとせられ、栖鳳氏は刷毛に筆勢を托して濃厚なる彩色を装飾的に用ひて、描線との調和を圖られたが、惜哉、廣業氏の作と與に調和の美未だ完くない。併し兩氏の作に於る色としての情的の力は、毫も色彩畫家下村觀山氏に劣らない。但し觀山氏の表現は自然の眞に逼らない。(國畫玉成會出品小倉山參照)。故に裝飾の美荘嚴の色調に富む。一體その精髓に於て毛筆的意匠の畫は、半肉彫的浮起の幻影をば狙はない(浮起は濃淡で容易に現はされ得るも)。影を投ぐるを忘れしむる。又彩色する部分も平面であるから、寧ろ彩色の調和をば線の調和を增大にし興味を加へんとするに努める。故に線と色との調和が亂され、明暗や浮起の寫實的効果を現はさんとする時は、自づからその色に對する感じは弱くなり不確となる。この理はその眞否をアレ夕立にと小倉山とに證してゐる。春草氏の落葉にも色の情的の力は著しい。併し觀山氏は色調と地(グラウンド)の金色との調和上色の力をば殆んど極度に用ひた。故にその色調は荘嚴的裝飾的積極的で、溫味を有つてゐる。落葉の方は紙本である。之を利用して檜檞柏などの樹幹の圍み凹凸瘤などを描ける手腕は、金地を利用したる觀山氏と同じきも、白地の背景のおのづから然らしめたる淡雅靜閑なる自然的色調は、却つて裝飾的要素をさへ繪畫(ムード)的たらしめた。又小倉山に比してこれは自然の情致を現はさんとせられた。故に小倉は勿論一樹一葉の布置描法にもより多く自然の面影宿りて寫實的傾向を帶ばしめた。

この畫及び深四題に對して自分は又端なくも色の品質に想到した。色は逼眞の妙を得ても、畫その物の品ひ事がある。色の品質の透明で新鮮なる者は、往々紙本絹本の日本畫の特徴とも見られる。而して洋畫に於て殊に同色が再三用ひらるゝ時に品質が失はれ易い。色の良好なる品質は手腕と知覺の精良を意味するばかりではなく、知識と批判力とをも意味する。故に畫家

は力めて修養を積まねばならぬ事をも思つた。二自分の場内に感じた印象はまだあつた。が暮れ行く途上の光景に趁はれた我れには、極めて要件であるかぬやうな心地せられながらも、遂に筆に浮び來らない。唯机前の今概括的に回顧的に思はるゝは、自分を感ぜしめた作中、その想に、形に、色彩に、二元の較著なる點の認められた事である。一は秩序整齊の觀念、他は精力又は自由の觀念である。前者は玉堂、春擧、芳文氏等の作に現はれ、後者は廣業、栖鳳、大觀、春草氏等の作に見える。前者の傾向はクラシックで、後者の傾向はロマンチックである。而して兩者の平均にやがて圓滿なる傑作は胚胎する。あゝ自分は日本畵の前途にも一道の光明を感ぜざるを得ない。

高山彥九郎と水戸學

文學士 横山健堂

今は既に亡くなつたが信州の海津村の養蠶家で、かねて骨董をひねつた矢島吉太郎といふ老人があつた。此人は養蠶家としてよりか、骨董商としてよりも、實に高山狂として名高い人であつた。苟くも、彥九郎を談ずる者で、矢島の名を知らないものは無かつた。此人は、中々、算盤は確かな人であつた。決して眞率なる、或は敬虔なる高山信者とはいはれる人では無い。或るとき、何かの動機で彥九郎の遺物を質に取つて、それが流れて自分の手に落ちたといふような譯で、頓に高山狂となつたのであると私は聞ひて居る。如何はしい好事家がかゝる大人物の遺物を揮廻はす者の中には隨分、怪い品物が多いのは、往々免かれぬことであるが、此人の彥九郎遺物は、悉く正銘の眞物はかりであつた。其一點は、人物崇拜家の中に於て、異采を放つて居る。畢竟、金と運とが、計らず、此の田舍翁を

して、かゝる世にも得難き清福を縦まにせしめたのてある。此人は、彦九郎の精神事業を默解し得る人ては無い。書畫の鑑定眼が、十分ある譯ても無い。それて、かゝる貴重品を珍藏して居たのは、何の事は無い、狐が稻荷の番をして居るようてある。若し彦九郎の靈にして知ることあらば必ず苦笑したのてあろう。さりながら、此人、全くの守錢奴とばかりも言難い、やはり一片の心、彦九郎に感動することが無ければ、あれほどまでに、高山趣味を發揮して高山狂といはれるまてにはなり難かろう。彼も亦、彦九郎の爲には、無縁の衆生てはないのてある。扨て、此人が嘗て彦九郎の遺物を一括して、出京し、傳手を求めて、乙夜の覽を仰ぎ奉らんことを願ひ出てた。その中に、藤田幽谷が、始て彦九郎に贈つた詩の眞蹟があつた。聞君高節一心雄、奔走求賢西又東、游學固懷奇偉策、正知踏海魯連風、十三書藤田一正としてある。此詩が、私の御話の發端になるものてある。

此詩は、彦九郎と幽谷とを結び付けたものてある。

彦九郎……水戸學の楔子てある。この一楔子から筋書が出來て、無數の波瀾が湧くのてある。この楔子があつたればこそ、彦九郎の影響は深く水戸學に刻み込まれたのてある。それは次第を逐ふてお話をすることゝして、扨て、此詩は、早く世間に知られたが、其の眞蹟の存じて居るのは意外の感がある。當時、幽谷は、水戸に居て、立原翠軒の門に學んだころの事てある。當時彼は神童の評判さへあつた。彼は、未だ彦九郎を見ない。見ないけれども、翠軒が彦九郎と懇意であるから、噂を屢聞いて、何と無く敬慕の志を起したらしい。彦九郎を魯仲連と見立てたは、少年の眼識としては、天晴のものてある。彦九郎も此の詩を受取つて、定めて莞爾として微笑したてあろう。これほどの秀才てあるから、其の前後に、翠軒から話の折々、幽谷を彦九郎に紹介したのてあろう、彦九郎も、「それは有望の少年らしい、どうかモノにして呉れ」とか、彦九郎の事だから、何か「シッカリやれ」といふ風に傳言するとか、或は文章か筆蹟かを見度い位の事があつた筈てあ

ると思ふ。此際の事は、委しく書たものは無いが、實情然かあるべきである。幽谷の詩に徴しても、言外の意が想像されぬでも無い。而して幽谷から詩を送つて志を表した。是は、挨拶とも束修ともいふべきもので謂はゞ初見參の土産物であつた。此時、相見たのでは無いけれども、畢竟、之に由つて懇親を通じたわけである。彦九郎の方でも、詩を受取つて見ると、思つたよりも、眼識もあり、氣骨もある、これは愈々前途頼母しきものであると、確信したに相違無い。それて、此の二大人物は、未だ相逢つて相語らぬけれども、相互の心中には、一脈の精神感應して、互に敬愛して居たのである。幽谷が彦九郎に面會したのは、翠軒に隨つて、江戸で逢つたので二十歳前後でもあつたろう。その會見には、二人者ともに、多年の想望を現實にして而して、逢つて見れば一層快心であつたと見える。彦九郎が、「足下の如き卓越せる者は未だ見ず」といつてゐるのを見ても想ひやられる、此の如く、此の二大人物を結付けた最初の握手は、踏海魯連風の一詩である。

此の場合、私は彦九郎が水戸に來た最初の時に溯りて御話する必要がある。彦九郎が水戸に來た動機は、水戸學を目的として、而して義公の餘韻を慕つて來たのであることは、申すまでも無い。而して來て見れば、水戸には、中々、學者もあるが、就中長久保赤水の地理學は、彦九郎を水戸に引付けるに、與つて力あるものであつた。此事は彦九郎の生涯に大關係があるから十分御話せねばならぬ。赤水、諱は玄珠、字は子玉、赤水はその號、常陸の多珂郡赤濱村の産、實に大海萬里の波瀾を朝夕、眺めて育つた人である。安永元年から彰考館に仕へて享和元年八十五歳で沒した。彦九郎と交際を始めたのは、六十前後、定めて、日本輿地路程全圖が出來上る頃であつたろう。彼は、日本全國は、略ぼ漫游したのみならず、右の全圖を作るころには、平生、地圖を步障に張つて置き、雲水、行商、旅客等何人たるを問はず、來る者は／＼引き入れて御馳走をして　國の話をさせて、參伍研究すること二十餘年にして完成したといふことである。此の時代に、何人か、

かく地理學に浮身をやつした人があろう乎。彼は當代の第一人てある。内には國學は復活する、外には、世界の大勢は、大海の潮と湧きて、日本の海岸線を拍つて來た。而して日本人中興の氣勢は、恰かも春風が渡る島の胸を騷がすように、國民として自から興奮發動せしめて已まざるのてもあるが、この頃から旅行探檢の氣風勃興して、寛政三奇士の外、木村謙、間宮倫宗、古川古松軒等が輩出したが赤水は其の先登者てあつた國粹黨は國權黨てある。國權家に尤も必要なるものは國の地圖。而して疆域沿革圖てある。疆域沿革圖は、國運が盛なれば盛なるて、衰へれば、衰て居るて、いづれにしても、尤も雄辯に國權主義を鼓吹するものてある。歷史地圖の見るに足る者が出來たのも赤水に始まる。松下村塾ても、赤水歷史地圖を用ゐたことを、故品川子爵は話された。されば此點に就ては吉田松陰も、大分、赤水に感謝すべきてある。而して赤水は、彥九郎に對しても勿論お師匠てある。彥九郎は赤水を尋ねて、例の步障に張り付けた地圖の前て、大に地理談を鬪はし、頗る其の該博に驚くと共に、其の人格學風が、スツカリ彥九郎の氣に入つたといふような譯てあらうと私は想像する。彥九郎は、赤水から、つねに地理學を學んだ外に、兎も角も、此の兩人は忘年の親交てあつて、心腹を打明けて語らふ仲てあつた。

彥九郎が水戸に引付られた方面から見ると、右の通りてあるが、彥九郎が水戸を引き付た影響を考へると、また並々ならぬ感動を與た者てあると私は思ふ。之を具體的に代表する者は、即藤田幽谷てある。彥九郎が水戸から受けた感化の大なるだけ、それだけ幽谷が、彥九郎から受けた感化は大なる者てあると云ふを得る。水戸は彥九郎を鼓舞し、彥九郎は幽谷を鼓舞した而して彥九郎が幽谷を鼓舞した精神は、彥九郎が水戸から鼓舞された精神てある。水戸は、偉大る幽谷を産出したが、彥九郎と云ふ保姆の手を借りて、その出生兒に、祖先代々の精神を吹込んだのてある。畢竟、水戸學者は、彥九郎に接して、活きたる水戸學の權化を見たわけてある。義公の時を去ると、既に遠し。水戸學の精神は、學

問文章に傳はるばかりであつたのに、計らずも、茲に彦九郎といふ活精神を見たのである。水戸學から言へば、彦九郎に依て得たる利益は、蓋し非常である。彦九郎は學問文章の士にあらず、彼の水戸の爲に一卷の著述をも傳へなかつた。乍併、彼は往復談論の間に其の烈々たる精神力を以て、水戸學者を鼓舞作興した。幽谷が、彦九郎を祭る文を讀めば、如何に彼が水戸學者を動かしたかは分る。彼の生命は親炙にある面識にある謂はゞ彦九郎は一大猛火である。對岸の人、乃至、面のあたり見知らぬ人は、左程にも思はないが、實際之に觸接する者は、其の炎々たる威力に燒き盡されぬものは無い。彼の全國漫遊が維新中興の大氣運を作興するに有効で有つたといふは、恰かも、彼の一大猛火團を轉ばして原野の中を轉ばしあるいたといふやうな勢であるからである。彼は、かくして、其の精神の火力を以て全國を燒き廻つた。而して水戸には、殊に其の火力を集注したのであつた

尊王論の唱首は義公である。乍併、その大日本史は全國に普及するには至ら無かつた。義公の議論は史冊に顯はれて居る。之を口で鼓吹したものは彦九郎であつた。義公の隨筆に「伊勢の御師何某太夫などいふ者、毎年御祓御供暦鮑やうのものを、たれがしが旦那なんど、のゝしり、ゆかりを尋ねてくばりめぐる、我聞く神は不淨を避くと、況や伊勢は日本の宗廟也、秡供物なんど凡下の輩たやすく拜受すべき事にあらず、然るを穢土不淨をも別たず、我物がほに猥りに配るは、神慮も如何あらんや」と書いてある。このやうな事を、彦九郎は喝破して廻つた。彼は、諸國をめぐつて、東照宮などゝ言ふ侍でもあれば、怒鳴りつける。彼に怒鳴りつけられると、誰でも身の毛がよだつといふ。若し雷霆に人格があつて、擇んで、奸物の頭に落ち掛るものとすれば、彦九郎の喝破のやうであらう。彼は到處に志士を尋ねて談論するに、御歷代天皇の御諱山陵まで悉く暗記して誤るといふこと無く、王室の衰微を歎き、覇府の跋扈を憤りて、慷慨淋漓、聲涙共に隨つ。木石と雖も感動するに足る。彼は「泣男」だと、言

はれたこともあるが。それは林子平が彦九郎と會見したことが無いからである。彼は悲んで泣くのでは無く憤りて泣くのである。彼の語りて泣くは頗る光焰がある。而して彼の議論には經營があり、策略がある、彼の行動には、方針があつて、大勢の趨向を察して動いて居る。彼は頗る明らかで、頗ぶる鋭い男である。彼の勤王論の唱道は議論にあらず、研究にあらず、實に傳道である。いはゞ、彼は勤王論の敬虔にして大膽なる牧師である。彼の學問は、屢々水戸に往來して、義公の學問を祖述する外に、機軸を出しては居らぬ。乍併、勇猛熱烈あらゆる困難と危險とを冒して、單身以て異教者を說破し感化し、以て天下の勤王風を吹き渡らした功に至つては、彦九郎が傳道の力である。勤王論は義公之を祖述し、彦九郎之を傳道したのである。

「裸百貫」といふ俚諺があるが、それはまさに彦九郎の事である。私は、彦九郎に於て「人格の力」を嘆奨せねばならぬ。彼は、肩書一つある身で無く、孤劍一行李、海内を濶歩して、爲さんと欲するところを爲し、百世の機運に貢献した。彼は偉男兒である。而して彼が如何にして、能く其の年々、際限無き大旅行を敢て爲し得たかといふ事は、興味ある問題である。此事は、十分に考究すべき價値はある。彼の事績を能く研究せざる者は、彼を以て、旅費も十分に持たずに、慷慨激越の一點張りて、周遊したように思ふ者もあるが、それは頗る見當違ひである。天下昇平爛熟の世の中に、ソンナ事で一世に持て囃やされるものでは無い。彦九郎は到處て、決して嫌はれたことは無い。質撲素朴は其の持前であるのみならず、それは何時と目的も無き大周遊であるから、出來るだけの儉約は無論爲なければならぬ。彼の粗服は、已むを得ざることである。乍併、彼は人間並の爲すべき禮法を缺きて、無作法の事をしたことは無い。「旅行中ですから失敬する」といつて、脊廣服を著けて、式場に列する、貴人に逢ふ」といふ流義は、彼は斷じて遣ら無かつた。彦九郎は農村の孝子を尋ねるときにも、チャンと禮服を著けて往つた。彼は貧乏人の善行者を尋ねるときには、口先で褒

めるばかりで無く、或ひは孝經を持て往つて與れるといふ風に、獎勵品を贈つた。彼は卓拔の奇節があつたけれども、並外れた異樣の態度を現はしたことは無い彼は粗豪磊落、以て貴人先輩を凌轢することは爲さぬ彼は相當の宿屋に泊り、相當の交際も爲る。平常には、極めて質樸武骨な風采をして居るが、其態度は禮法に叶つた立派な紳士である。何處に推出しても差支の無い、見事な人格である。それで以て旅費の仕送りが出來て、專念に周游が出來るとすれば、彦九郎の游歷は大したものである。

彦九郎の財源はといへば、無論、彼の家產である。彼は新田郡に居て、其先祖は新田十六騎黨の一人であると稱へて居る位、而してその家系を誇稱するに足る程の資產を持つて居た。彼は所謂鄕士で。家業は農でありながら、系圖と資產との光りで。兩刀を帶して居た彼は長脇差では無い。人から讒訴されて、法廷に呼出されても、兩刀を帶する由來を、立派に言譯が出來たのみならず、改めて兩刀を帶することを許された。貧乏の農家では、許されもしまいし、また許されたとても致方も無いものであろう。或は、彼は豪富であるが、家業を屑とせずして、棄去つて奇節を事としたといふ者もあるが其も亦た誤りである。彦九郎は依然たる戶主である。彼の留守を守る者は、其の夫人である。彼の夫人の事は、餘り傳はらぬけれども、確かな人で、世帶を守ることが出來て、彦九郎をして後顧の憂無からめした人であろう。評判の無いといふことは、良妻たるの事實には、必ずしも關係は無い。評判の閨秀には、兎角、香ばしく無いのが多いのは、誰も知つてる通りである。別に有名には無が人が、却て家の爲には役に立つた人が多い。彦九郎の夫人も、其の例であろう。而して平常の業務を擔當すべき人には、彼が兼ねて然る可き番頭を見立てゝ置いたであろう。今から考へて見れば彦九郎の留守は如此次第であつて、彼が資產を棄去つたのでは無い、自から貨殖に從事しなかつたといふだけである。而して留守からは、彦九郎の出先に向けて、時々に資金を送つて來るといふ都合であ

るし彼ゝ時々歸つては家事も見るといふ有樣で、出先と留守との聯絡を取つたのであらうと私は考へる。
　彦九郎の生計を考究するのは、私が本題の主論では無い。右は行掛り、稍峽路に入つたやうである。扨、話前に戻つて、彦九郎は、紳士たるの態度を執つて、先輩貴人に交際を爲る。中々、如才の無いだけの事は遣つて行く。而して其人忠誠、議論英發と來るから、誰も歡迎して感心せぬ譯にはいかない。彼の風采はといへば中々、立派な男振である。鼻高く、目深く、口廣く、丈高く、總髮であつて、立派な髯が生えて居る。繪に畫いた關羽の再來だと評判されたといふ、水滸傳の調子でいへば、威風凜々相貌堂々たるもので、何人が見ても、偉丈夫と思はれる風采であつた。人物といひ、資產といひ、これ程の資格が全備して居るのだから彼が先輩知友の間に持て囃やされたことは非常であつた。先輩も貴人も、彼の爲に、詩歌文章を贈つてそれからそれと順々に推選紹介して行つて、彼は又た到處で持て囃やされて彦九郎の往來するところ。彼の人物は大評判になつた。彼は、つねに士林の話題に上つた。彼の歿後に、其の傳を作つた名士が多く、彼に關する名士の詩文佳作が割合に多いのに徵しても、彼が當代の立者であつたことは分る。彼の遺物の中には、名士の筆蹟が頗る多いといふこと、而して其中に、前にお話した十三歲前田一正の詩もある。彦九郎には義助といふ子があつて、是は林祭酒の門にも入學したので見れば、尋常に、世を渡つた人であらう。此の義助は父の切腹の翌年に、久留米に下つて、藩廳始め關係の人々に、「亡父が先年御世話になつた」禮を述べて廻はつた。
　彦九郎は神機英發の人である。周游に出る前に、一冬試みに袷衣一枚著て露宿して見たけれども風も引かぬに依て、出游を始めたといふ事から、既に異常である。天明の饑饉に、彦九郎は江戸に居たが、故鄉の新田邊に百姓一揆が起つたと聞いて、取るものも不取敢、急いで歸るに、早や夕方であつた。知人の許に、チヨツト立寄り、其人の妾に、シカ〳〵と語り置いて去る。

其の夫、歸り來つて、「彦九郎は正直者故、命を捨てんも知れず、吾は直様、奔り付かん、誰々にも知らせて遣れ」と言置いて飛出す。それから人々、傳聞きて、追々に、馳出し、二十餘里の途を朝早く彦九郎は到着し午時までに江戸から後れて馳せ付けた同志者三十餘人もあつたが、一揆は既に收つた後てあつたから、其晩、一同引連れて江戸に歸つた。舞臺は違ふが、秀吉が賤嶽に馳せ付けのたと、神機英發の趣は似て居る。彦九郎の如きは、戰國時代に生れしめば、まさしく一方の雄たるべき人てある。試みに、寛政の三奇士を以て比較するに、彦九郎は、第一に著述の無い點が特色てある。彼には日記がある許りてある。彼は決して無學では無い、乍併、子平や君平の如くに、立言は無い、研究は無い。彼の學問は悉く實行に現はれて居る、學識と實際と一致して居る。彼は子平の如くに、科學的な、而して奇拔といふ特點は無い、乍併、君平の如くに道學的ては無い。彼は駿臺雜話を讀んて、其中に諸葛孔明の三顧出廬を引いて楠公の一呼直ちに君命に馳せ參じたのを以て、輕々しいと論じてあるを見て、「コンナ迂遠な見識ては萬卷の書を讀んても何になる乎」と言つて、大に怒り罵つて、其の書を地に擲つた。此一點てゝ彼の學問の遣り方は分る。彼は活學てある。彼は「論語讀みの論語知らず」ては無い、彼は讀んだ事を行ふ人てある。三奇士の中て、英雄といへば、先づ彦九郎てあろう。彼は、啻に同臭味の人許りとは限らずに、隨分廣く先輩、貴人、有司にも交つた。各方面の動力たる人にはワタリを付けて置いた。京都朝廷に、接近しながら、幕府の有力者にも、不都合の無いだけにして居る。彼が帝室及び公卿に對する態度は、隨分、露骨てある。餘人ならば、あれほどの活動は、迚も出來まいと思はるゝほどの事を、彼は敢て遂行し得た。とは言へ、彼は幕府の注目を免かるゝことは出來無かつた、彼は終に大勢に打勝たずして、憤死したが、乍併、彼は爲度い事は爲て見、伸ばしたいだけの志は伸ばして見たので、「一束縛」の手をして、己れの身邊に近寄らしむることは無かつた。彼は、幕政の下に、「幕政顚覆」

の信念を抱いて横行した者と謂ふ可く、其死や寧ろ悲壯である。

私は彦九郎の人物を考へると、東湖を憶起さゞるを得ない。東湖は倜儻にして大略あるの人物、其の氣合は、世が世ならば、麾下を組織して中原に乘出すべき人てある。彦九郎は、學は其の識を養ふ爲めて、劍は以て身を守るに餘ある。東湖は學者てあるけれども、詮索して文章を書く人ては無い、回天詩史でも常陸帶ても、一卷の參考書無しに書いたといふことてある。彼の著述は、直ちに血性を擄べて文章と爲る英雄的てある。彦九郎にも、今少し文才があつたら或は、著述を遺したてもあろう彦九郎は、皇室の衰微を挽回する爲に樣々の大膽なる經營を爲した。太平に馴れた學者からは空恐ろしく思はれたのてある。故に、彦九郎の膽略を識る者は彼を亂民と評した。天下の大勢を顚覆しようとするのてあるから、或は亂民てあるかも知れぬ。東湖の人物如何と、西郷南洲に尋ねたら、南洲は「東湖は盜賊の親分のようだ」と答へた。彦九郎と東湖とは人格趣味、必ずしも相似して居るといふ譯けては無いが、ともに、亂民とか盜賊とかいはれるだけの相似の人物てある。此二人者は、共に一方面の人格ては無い。頭もあれば腹もある、そして手腕も確かりして居る大人物てある。而して、年代の前後の關係から前者は後者の少時の敎育に、影響を及ぼしたてあろうと思はれる。山陽が彦九郎傳にも、少時、其父春水から屢彦九郎の事を聞かされたとある、春水は氣難しい、極嚴格な人てある。それて彦九郎には大分感心して居たらしい。如此天下の名士が彦九郎に感心しては、其子弟門人に、後々までも話して聞かせるといふ風てあつたが、東湖の父、幽谷と彦九郎とは、尤も親密な相愛の仲てある。彦九郎は幽谷を國士無雙と推賞した。寬政二年、露人北海に來り、風說紛々。彦九郎則ち挺身以て探險せんとして出掛るとき、長久保赤水に歿後の事を賴み置いた。「此行、生還期し難し。唯一つ思遺すことがある。私に一人の女がある。何卒藤田の妻に遺ることが出來たらば本懷てある」如此次第て、彦九郎は幽谷に思込

んだものであつたが、如何なる次第か其後の成行は知らぬが、彦九郎の女は幽谷の妻にはならなかつた。乍併幽谷も彦九郎には非常に感激して居た。傳說に據れば、高山の女の書いた和歌の短冊が、幽谷の家に在つた、幽谷も隨分大切にして居た。例の嫁娶の一件が多少進行したといふわけであつたろうと思はれる。昔の事だから寫眞といふ譯にゆかぬ。先づ筆蹟を送つて見合ひといふ意味を表はした。筆蹟は、中々、見事であつた、隨筆の或書に、高山女の短歌の事が載せてある。兎に角、才女ではあつたろう。さも無くば、彦九郎も、子の愛に引かされて、ツマラヌ女を國士無雙の幽谷に釣合はせようとは思ふまい。話が纏まらなかつたのは或は藩の事情であるかも知れぬ。他日、幽谷が妻帶して年數も經た後ちの事、時々、晩餐の席で、「春の夜寒にサ、一ツ」といふような情景の時、其の夫人に向つて例の短冊の昔語を話し出して、昔語をしたといふ事、その夫人は山口氏則ち東湖の母である。其後、藤田氏に火災が有つて、右の短冊は燒けて仕舞つた。幽谷は啻に其夫人に昔語を聞かせた許りで無く、其子の東湖に對しては屢、彦九郎の話を聞かせたであらう。幽谷は、家庭の教育には深く注意した人である。先輩偉人の談をするときに、自分が深く傾倒した彦九郎談は殊に力を入れて話したであらう。東湖は少壯、頗る擊劍の修業をした。劍は岡田十松の弟子である。その頃、寒稽古の情況を父に報ずる書柬が一卷藤田氏に傳はつて居る。其の堅苦勇猛の様、誠に感嘆すべきものがある。東湖の書柬に依れば、同門の弟子、齋藤彌九郎等一兩輩の外、技に於ても讓るものは無いように見える。彼は擊劍に於て身心を修練したのであつた。其時の有様を少しお話すれば、寒稽古中、大抵、今の十一時から十二時過までに歸つて、二時頃から起きて、自分で湯を沸かし食事を整へて出掛ける。仕合の本數を帳面に記入するのが、外に適任者が無い爲めに、彼の仕事であつて、それで夜が深けるのである。每日の事だから、途中眠る〳〵歸ることもあつた。寒稽古の最終日の前夜は、徹宵であつた。修業の結果、東湖は免許の腕前

になつた。右の稽古に對し、幽谷は、大贊成で盛んに奬勵して居た。されど幽谷は、東湖の如くに、勇力の人では無かつた。前年彥九郎が『アナタは武藝は出來るが、武藝は啻に身を守るばかりでは無い、身心修練の善法であるから、大にお遣りなされ』と謂つて、頻りに幽谷に勸めた。幽谷は、彥九郎の勸告通りには出來無かつたが、其意見は銘記して居た。其の精神が則ち、其子に對して、充分に武藝の教育を實施するに至つたのである。

すべて少壯時に受けたる深甚なる感化は、其一生に少からざる影響を及ぼすものである。其の感動の印象の存する上は、假令、感化の主體は滅するとも、感化は、つねに行はれて居るわけである。而して其の人物が、能く發展して、正當に自己の精神狀態を其子に傳ふることが出來るならば、最初の感化其ものは、又た其子に影響するのである。――彥九郎對幽谷……東湖の場合は、それであると私は思ふ。幽谷は義公以來の水戶學の大成者である。東湖は、それを一身に現實して見せた人である。謂はゞ、幽谷に至つて、水戶學の一定理が出來上つて、東湖は、其例證として出現したのである。水戶學は、例證に依つて、能く人に了解されるけれども、或は又た、定理の光彩も好き例證に依て發するけれども、歸着するところは定理に外ならぬのである。此の定理の出來る根源は義公である。義公の精神を推服闡明して、水戶學の定理が出來たのであるから、幽谷は、能く義公の精神を了解し、公を景慕し崇拜するの、極めて深く且つ篤き者であらねばならぬ。此點に於て、幽谷は彥九郎と肝膽相照らした。彥九郎は、嘗つて出仕を願はず。『若し義公にて在すならば、執鞭の士と雖も、吾は甘んじて之に隨はん』と平常言つて居た。彼は如此、深く義公を景仰した。而して幸にも亦た國士無雙と思ふ幽谷を水戶學の流れの中に發見したので、彼が感嘆の情は、重ね〳〵高まつた。彼がかねて義公を崇拜する志を、幽谷に傾注して仕舞つた。幽谷が之に依つて得るところ多かつたとは無論である。畢竟、義公は水戶學の種子を蒔き、幽谷に至

つて花を開き、東湖に至つて實を結んだのである。而して彦九郎は、他から來て耕耘を助けて以て、好き花を開かせるようにした人である。彦九郎と水戸學者の關係は決して幽谷父子に限らぬのであるが、幽谷父子は水戸學の代表者であるから、其の他の人は暫らく之を省畧した。幽谷と彦九郎との關係は、「和歌の短册」とまで進んだが、抑もの端緒は、彼の「十三童の詩」である。それから、水戸學の花たる幽谷‥‥東湖の光彩に影響するような感化も出來たのであるから、私は、此詩から説き起したのであつた。

　私は水戸の彰考館を拜見したことがある。朱舜水が支那から齎らし來つた釋奠の具や書籍等の澤山なるに驚いた、流離顚沛の際にも、如此、澤山の荷物を持つて遠行するといふは、一面には、彼が名族の碩學であつたからである。而して彼は此の豐富なる御土產を以て、義公の水戸學に貢獻した。然るに高山彦九郎は如何。彼は一風呂敷の荷物と、腰間の日本刀あるばかりである。彼の精神事業は、籠つて日本刀に在る。彼は日本刀に倚つて海内を横行濶歩して、燃ゆるが如き『傳道』を敢てした。若し出來るならば、彼に孤劍昂然として海外にまでも日本魂の『傳道』を敢てしたのであらう。舜水は祭具書册を以て、水戸學の種子の肥料を供した。彦九郎は則ち、日本刀を以て耒鋤に代へて、水戸學の畑を耕やしたのである。（完結）

十月念三稿了。風落ちて夜靜かに、獄裏の白菊、燈火に映發す。[illegible][illegible]生記す

永井荷風論

現代人物評論（二十二）



△永井荷風君

相馬御風

僕は永井君の作を、お先走りして賞めた一人である。まつたく『あめりか物語』を初めて讀んだ時は、嬉しくてたまらなかつた。毎月々々同じやうな調子の、同じやうな臭の、同じやうな色の作ばかり讀んで居た所へ、あの通り色合なり、調子なりの變つた作を讀んだのだから、フレッシュに感じたのも無理はない。第一舞臺が新らしかつた。アメリカと云ふ異國を描いたと云ふ、それだけても珍らしかつた。而もそのアメリカと云ふ異國を今迄多勢の人が好加減なうはつ面だけの紹介をして居たのと、全く異つた方面から描いてある。それだけても非常に珍らしかつた。併し僕が何よりも先づ嬉しく感じたのは、作者の情緒の新らしさと、感覺の新らしさとてあつた。『あめりか物語』を讀んだ時僕自身にも何だか情緒と感覺の新らし世界が開けたやうな氣がした。日本語でもこんな文學が出來るのかと云ふやうな氣がした。書き方の上でも、僕は「こゝだな」と思つた程感服した。無結構無脚色と云ふやうな考が、はじめて實現されたやうに思つた。見方によつては、單に紀行文かスケッチ位に見てしまはれるやうな、平氣な、當て氣のない、あの書き方が、堪らなく嬉しかつた。こんな風で、僕はスッカリ荷風君びいきになつてしまつた。僕は當時私信を以て、その嬉しさの意を荷風君へ直接に傳へたいとまで思つた。

つゞいて『アデュー』が出た、『祭の夜がたり』が出た。『地中海』(?)が出た。『カルチエーラタンの一夜』が出た。『蛇づかひ』が出た。僕はます〳〵荷風君びいきとなつた。やがて『フランス物語』が出ると云ふ噂が傳へられた。僕は遠くから來る若い女でも、待つやうな心持ちがした。するうち雑誌の用事て、本物の荷風君に逢ふ機會を得た。その前には、中村星湖君が毎晩曉星學校て一緒になると云ふので、いろ〳〵噂を聞いて居た。「疲れたやうな人だ」と星湖君は云つた。「疲れた人！」僕はこの言葉が、詩ても聽くやうだつた。いろ〳〵とその「疲れた人」を想像して見た。

ゝつひに本物の荷風君に遇つた。訪れる前に人から訊いた、余丁町の大きな御屋敷と云ふそれだけて先づ氣がしけた。今迄あまり大きな御屋敷なんかへ出入した事のない所から、その所謂「大きな御屋敷」を訪れるについては先づその訪問の仕方から工夫してかゝらなければならなかつた。「若旦那樣」とか「若樣」とか云はなければ通じないと誰やらが云つて聞かせた。それやこれやて僕の胸はワク々々した。

大きな門があつた。門から玄關までの道が非常に長がつた。木が繁つて居た。玄關の敷臺が廣かつた。玄關には何とか云ふ大きな蒼い字の額お掛つて居た。玄關側の部屋の窓にロシヤ更紗が掛けてあつた。ベルを鳴らすと、奥から十五六の書生さんが出て來て、敷臺の上に座つて、平伏した。……ロシヤ更紗の窓掛の部屋は、荷風君の部屋てあつた。床の間の壁にニイチエとヴエルレーヌの胸像が掛けてあつた。フランス語の小說らしい本が書架に亂雜にならべてあつた。荷風君は絣の着物に絣の羽織と云ふ扮裝てあつた。ヴエルレーヌの詩の話、ダヌンチオの小說の話、音樂の話、それから日本の文壇の話――たゞもうフレッシュな話ばかりを聽いた。頰骨の出た蒼白な顏、奇麗に分けた長い黑い髮……たゞ僕は此人に絣の日本服と、煙草の敷島なのが不調和だと思つた。

やがて「フランス物語」が發賣禁止になつた。荷風君びいきたる僕、いかてか默つて居られやうぞ。早速飛んで行つて、原稿を借りて來た。そして讀んだ。二度も三度も繰り返して讀んだ。『放蕩』の一篇は、僕の術風熱を極度に高上させた。僕は自分の事を憤慨するやうな調子て、『フランス物語』の辯護と賞讚とそして梗概とを書いた。矢張り舞臺の新らしさと、情緒の新らしさと、感覺の新らしさと、それから形式の純なのが何より〱嬉しかつたのだ。荷風君の作に現れた舞臺も情緒も感覺も、凡て僕等には未知の世界てあつた。僕はこの未知の世界に導いてもらつた作者に對して、心からの敬意を表し、愛慕を寄せた。

その後度々荷風君に遇ふ機會を得た。話はいつも新らしい藝術の話であつた。僕は荷風君に遇ふ度に、新しい印象を受けた。而もそれは直に胸へ受ける印象てあつた。そしてその印象は常に新たなるものてあつた。

『監獄署の裏』が出た。『祝盃』が出た。『歡樂』が出た。僕が荷風君から受ける印象が、妙に纒らなくなつたやうな氣がし出した。今迄受けて居た印象に、何だか溶け合はぬものが入つて來たやうな氣がし出した。更に『歸朝者の日記』が出た。いよ〱妙になつた。胸てばかり受けて居た印象の國へ、頭が手を出すやうになつた。そして妙に苦情を申し立てたいやうな手つきをし出した。初めは頭の方も「一寸珍らしいなア」と云つた。胸の方も安心して居た。所が、一度二度と變つた印象が、度重なると頭の方から「變だなア變だなア」と云ふ聲が、胸の世界へ傳はるやうになつた。胸の方ても。何だか變にザラ々々した、飯の中へ砂ても交つたやうな工合になつたと思ひ出した。頭の方ては益々苦情を申し立てる。胸の方ては「今迄はこんなてなかつたがなア」と云ふやうな聲が出だした。折角僕の好きな荷風君が話をして居る側から、誰か他の者かいらぬ口出

しなするのぢやないかと云ふやうな疑が胸の方に起つた。頭の方では、こんな淺はかな事を云ふのは怪しからんと、盛んに息巻く。胸の方ではやつきとなつて、いやそりや考違ひだ、わが荷風君はそんな事を云ふ人ぢやない、誰か側から口出しするのだと云つて承知しない。胸は依然として、變り物の無い荷風君の味を、うまい〳〵と云つて居る。

僕の最近の荷風君の作に對する態度はかくの如くである。「讀賣」で誰やらが荷風君の此頃の作は「日本を論ずる書」見たいだと云つたが、僕も矢張その「日本を論ずる書」見たいな荷風君の近作に慊らぬ一人である。僕が荷風君の印象を初めから受けて來たのは、胸からである。頭からではない。荷風君から受けた僕の印象は、作に於ても人物に於ても、矢張り情緒の人と云ふ一點に歸する。隨て作家としての荷風君に對しても、僕は如何にしても、頭から物を言ふ人とは思へない。矢張り胸から物を言ふ人としか想ふ事は出來ぬ。所が、近頃の荷風君の作には、大分頭が口を出して居る。而もその頭は、胸に及ばざる事遠き頭である。荷風君の胸の世界は、實に僕等には、たまらなく嬉しい世界である。荷風君がいかに頭に物を言はせても、胸から出た一言一句にも力に於ては及ぶまいと思ふ。荷風君の頭には、たしかに何か淺はかな誘惑者が居るやうである。胸から出たらば、もつと〳〵深味のある聲となるものを頭がお先走りをして云つてしまふ爲めに、折角のサムシングも力拔けをした形になつて居る。僕は一日も早く荷風君の頭から、その誘惑者が追ひ出したい。そしてあの「アメリカ物語」や「フランス物語」に出て居るやうな荷風君——荷風君の胸の世界から出る聲が聽きたい。

何だかわけの分らぬ事を書きならべて、甚だすまないやうであるが、僕自身には大にわけの分つた事なのである。僕は他の人よりは、わが愛慕する永井荷風君に、このわけの分らぬ謎のやうな言葉の奥にある、僕の心が讀んで貰ひたい。妄言の罪は幾重にも御侘びを致します。

△歡樂の人荷風

荒野の客

●荷風氏の名は「地獄の花」によつて、初めて廣く記憶された、尤も之は處女作では無い、「花の心」だの「巷の灯」だのと、隨分と早くから創作をした。然し「地獄の花」は出ろ場合も場合だつたからだらうが、創作としても兎に角着目すべき價値があつた。

●夫れに其の廣く知られた他の一因は、其の破局（カタストロフキト）が、强姦と云ふ凄慘な事實があつたからにも依る。而して其の場所の描寫は、隨分と精細な、多少衝動的なものであつた樣に思ふ。

●當時の氏は柳浪氏の門下にあつたが、大體の傾向は同じ寫實でも、柳浪氏が單に偶然した人生の、悲慘な一部を切り取つて、深刻に描き出すと云ふ丈のとは違つて、氏のは遺傳と境遇と、性慾必然の盲目的壓迫から來る、人生の暗黑面を專らに描いた。之は氏がゾラを崇拜して、其の主張を其儘に感受したからで、其後「大牧每日」へは、ゾラの飜案を出し

て、随分と如何はしい描寫があつたものだ。

●然し佛國ですらも、ゾラの當時の作物に對しては、道德上の非難が却々激しかつたものだ。日本で斯の傾向を攝取した荷風に對して、奈何ぞ多少の批難を免れやう、氏は確かに小杉天外氏の受けたやうな、一部の非難を受けた程の注意人物であつた。唯だ氏が未だ大家として現はれず、一部にしきや名が知れて無かつた爲め、天外氏程の大きな波動は無かつたのである。

●天外氏と云へば、天外氏は矢張りゾラ宗の使徒であるが、當時の荷風氏は同じ傾向でも、內容の布置の自然は天外氏に及ばず、又た主張が餘り、露骨であつた代り、筆力の粗硬な中に、天外氏よりも幾部分の鋭い描寫と強烈な暗い氣分が潜んで居た。

●氏の短かい半生涯は、作家として之を前後に分たれる。即ち米國から佛國へ行き、佛國から歸朝した後の氏は、作物に於て全然異なつた徑路に入つた。或は根本の思想が變化した爲とも云はう。

●此頃氏の親友たる、某作家に、荷風觀を叩くと、「荷風君は初めからあんした反第二義道德觀を有して居た、唯だ初めは其の發表に氣後れ勝であつたのが、佛國に往つて始めて立派な確信を得て來たのである」と、或は之れが眞證であらう。

●氏の近作を「歡樂」と云ふ、歡樂の二字氏の現在の思想を表徵して殆んど遺憾が無い、曩に人生の暗黑面のみを探つた氏は、今は人生の歡樂のみ追求めんとして居る、其上を其上をと彌が上に強烈な歡樂の刺激を享受しやうと努力して居る。氏の全幸福は唯だ美と歡樂の享受で、若し氏に悲哀と云ふものがあらば夫れは歡樂に飽滿して、其の刺激力の薄くなつたのを感じた胸上一片の悲愁即ち之れだけであらう。勿論其の氣分に於て、幾分頽廢的（デゼネレート）の分子が含んで居るにしても、彼の一派の徒の人生の空虛を感じた失望を、強て歡樂で詐らうとする、苦しい積極的逃避法とは其規を異にして居る。要するに氏は歡樂の爲に歡樂を求むるのである蓋し氏は歐洲文明の中心たる佛京巴里に於て、あらゆる官覺的な、刺激の強烈な歡樂に豐滿した、其人に取つて、其の好むが儘歡樂を享樂されぬ土地は、即ち失望の鄕土である。已に絕對的に放縱なる觀樂を要し實前に碍げる道德と地理あるを許さぬ、即ち之を碍ぐる物を呪ふに於て其の祖國たると祖國の道義たるの差は無いのである、然し氏の如き祖國の呪咀は、唯だ氏の閱歷と傾向にして始めて味はる可きで、氏ならぬ他者が之に對して反感を起すも素より然る可き筈。之を愛國の國民から見て、不健全な思想、非國民的と罵るも、又た充分の理由ある非難である。

●此の意味から來て、氏の歸朝以來の創作は、其の歡樂享受を碍げる、あらゆる形式と精神に反抗した露骨な奮鬪史である。一條の感情で貫いた異色ある歸朝者の具體的日記である。

●曩日の氏の作物は、人間種族に對する、生物學的の研究から出立した概念を事實によつて潤飾した、寫實派に屬した物であつた。廣い人生とか、狹い特殊の個人性とかを宛らに描き出す事は、氏の特長ではなかつた、ゾラにも確に其弊がある。

●最早文明と人間種族に對する大なる悲觀者は、今や文明に對する大なる謳歌者となつた、之が非常なる態度の變化ではあるまいか。

●今日の氏の作物は、最早や概念では無い、主觀が其中心となつた、最初の描寫一通は、今日は詠嘆となり、怨嗟となつた。主義の爲に描かずして、唯だ、現在の我の爲に、現在の我の享樂の爲に、野の鳥の如く自由に歌ひ、野の獸の如く自由に吼える。人間は何うなつても、人生の終局は何うであつても、氏に取つては何の交渉も苦痛も無い、唯だ現在の享樂に醉へば夫れで澤山だ而して之を大膽に、放縱に發表する、之が氏の今日の立場で又た生命である。

●其の内容既に斯の如くであるのに、氏は歡樂の源泉たる、美を悄悦し更に之を感受し、感味する感覺が極めて鋭敏で、且つ極めて纖細である而して其の印象を再現するに當つても、如何にも絢爛的色彩に富んだ絢爛で豐富で華美で、清新な、ヴカブラリーを有する、氏が一面に於て、立派な散文詩人として、匹敵の無い技量を有するを、何人か疑ふ者があらう。

●素より斯る作物の中に、藝術上の約束たる、人物の個性の發展とか生活問題の實相の描出とか廣い意味の、人生の歸着點とかなどを求めんとするは無理であらう。而して之が明かに氏の短所である、然も氏は藤村花袋諸氏が有する、之等の物を缺乏し乍ら、猶ほ其の藤村花袋の有せざる物を以て、別の一地位を文壇の上に占めた。

●之によつて見れば、個性、人生必ずしも何人にも必要で無からう、然し必要の無いにした處が、氏の如き一本調子の主觀。變化の無い對境は果して無窮の壽命を有するものであらうか。之を重ぬる事多きに至つて、遂に人に飽かれはせぬか、而して氏は、之を繰返す事、既に多きに過ぎはせぬか、現にかの「歸朝者の日記」の如き、徒ひに技巧を弄したゞけに、作者漸く窮せりと疑はしめぬだらうか。否な。嘗ては其の芳烈な情緒と多彩な技巧に醉はされて、反感的感情を顯はすに遑なかつた讀者も近頃やゝ反感の聲を擧げつゝあるではないか。

●況んや、刺激の多い、色彩の豐麗に過ぎた氏の技巧は、漸く人の眼力と頭腦を勞らして、割合に早く倦怠せしめる嫌ひを見るに於てをや。氏は今や作家として存在の危機に瀕すると共に、又た何等かの一轉機に瀕して居る。

●兎に角、氏の思想は、いかに模倣多い創作界にも、一あつて可なり、二、三はある可らざるものだ。唯だ其の掩はざる自己の大膽な告白と、其の鋭敏な、纖細な神經官能と、豐麗で多彩な充實した技巧とは、慥く現時文壇の傲りとし、異彩とすべきものであらう。

●要するに荷風氏は、同じく自然派中に網羅され乍ら、傳習的思想に反對して、我れ自身を大膽に告白せんとする點。過去未來を蔑視して、唯一「現在」に執着する點。其の現代に腐れたる點、其の頽廢的情分を含む事多き點、肉慾の力の壓迫を擔ふる點、其の自我的にして作家性格の分明に、且つ實感的なる點等に於て所謂自然派作家と相違するが。其の情緒的で理智的で無く、態度、觀照凡てに、森嚴な問題解釋をするを以て任せ

ず。彼は人生を土臺とし、之は文明を對境とし、彼は藝術に努めて醒めんとし、之は放縱に努めて醉はんとする。彼は離れんとし、之は沒せんとする、彼は生活の悲哀を叫び、之は生活の歡樂を謳はんとする而して幾分浪漫的の傾向を有する所に互に相容る可らざる差違があると思ふ。

△永井君について

眞山青果

永井君の作品が善良なる風俗を壞亂するものと認られて、頻々發賣禁止の厄に遇ふのは、同君の爲めにお氣の毒でなりませぬ。然し今度の出版『歡樂』が發賣禁止になつた源因はその點に於いてゞはなく、中に危險なる非愛國思想が流れて居るのを、今の當局者が恐れた爲めだと或る人が來て話しました。假りに然りとしての話です、これは。

私は今日までその筋の取締條件が風儀だとか男女問題と云ふ餘小事に限局されて居たのを不思議に思ひます。新しい人の書くものは根本から自由なのです。五官感觸以外の事にも大きな深かい考ひ方をして居ます。或る人達の見方からすれば、子をして父に頁かしめ、妻をしてその夫に頁かしめる爲めの文學と見えるかも知れません。今日まで官憲の騷擾徒勞した事の如きは、謂はゞ徴中の徴なる問題なのです。

狹隘頑固なる今の一般思想から云つたならば、今の新しい小說は未だく廣い範圍と根本の思潮の上から處分して行かなければならぬことだと思ひます。問題が復雜なるだけ相互防衛の工夫も講じられるだらうと思はれます。自然主義對社會の交涉問題はやつと一歩本問題に近付いたやうな觀があります。今日までのやうな有樣では、非難される方の人たちにも不滿であつたらうと思ふ。

種々の問題が起つて來ることでせう。然したゞ非難するにしても取締るにしても、飽まで虛心に問題を研究して貰ひたい。世間の人々は好く今の作家は年少男女に媚びるとか、奇拔を衒ふとか一口に申しますけれど却つて然う云ふ人達の議論の方が甚しく俗論因襲に媚びて自分の立場を衞つて居るやうに見えます。自分の生活狀態に適應した議論は誰にしても吐きたいものです。

まるで別な話になつて了ひました

△永井荷風氏

德田秋江

永井荷風氏に就いて所感を記してくれとのことですけれど、僕は永井氏の作物を多く讀んでゐないから何にも申上げることがありません。けれども氏の作物を讀んでゐないといふのは、決して氏の作物を輕視してゐる譯ではないのですから、さう取らないやうにして下さい。

僕は、永井氏に限らず田山花袋氏の作品や島崎藤村氏の作品や高濱虛子氏の作品を精讀して諸家に關する稍々詳しい所感を公にしたいと思

てゐるのですがまた其の機會を得ません。若し是等の、現今活動してゐる作家を批評するのが、時期尚ほ早ければ、故國木田獨歩氏や、故長谷川二葉亭氏などを詳しく評論して見たいものと思つてゐます。

永井氏は、これから多々倍々創作をせらるゝ事であらうと思ふから、その内一人で更めて所見を公にするとして、僕は差當り、何よりも斯よりも永井氏の境遇が羨ましい。十月十五日發行の「文章世界」で氏の「廿歳前後」といふのを見たら、氏は藝術家になりたい存念であつたのが、家庭の事情で許されず、それが爲に隨分面白い方面に道樂をせられたやうであるが、それが如何にも氣樂な道樂のやうに見えて羨ましい。お父樣のお金をふんだんに使つて歐山米水を遊び戯れて、それで故國に歸れば文壇の形勢は、恰も可し、此の佛蘭西仕込の青年文士を歡迎すべく準備されてゐたのである。佛蘭西の文學にあこがれてゐる今の文壇は露西亞文學を代表する唯一の人故長谷川二葉亭氏へ珍とする如く荷風氏を珍としてゐる。けれども意味は大變に違ふ。氏は實に當今の文壇の寵兒の一人である。長谷川二葉亭氏などが、一つは心柄からと、二つは氏の一生の目的が其處になかつたからとてもあらうが快々として樂まない二十餘年の長い歳月を閲した後漸く文壇に於ける自個の時代に際會して、際會したと思へば、間もなく夭折したといふに比べて永井氏の文壇に於ける行程は、實に平坦砥の如しと言つて可い。

お金はあり、(寫眞で拜見したのだが)男は好いし、文壇に、餘り讀む人の無い佛蘭西語は讀めるし、文章は可なり書けるし、それで不足を言へば罰が當る。

ですから僕は、永井氏の書れた「監獄所のうら」や「歡樂」や「歸朝者の日記」に何んな不平染みたことが言つてあつたつて、やれ痛快だの、それ反抗だのといふ強い、ロブチイな感じは少しも起らぬ。けれども永井氏は趣味の豐かな方だと常々思つてゐる。そうしてまたその趣味が。本當に、贅澤な、貴い米の趣味であつて、その趣味を思ふ存分に充たすことが出來るらしい。

つまり氏の不平とか反抗とか、又は哀愁とか頽廢とか言ふのは、自分は必ずしもその當事者、經驗者ではなく、傍にゐて、氣樂に、其樣なことをば、スキートな空想のベールを被せて味つてゐるのである。

けれども僕は、永井氏のやうな好い境遇に在る人が、これからドンドン文學の方面にも表はれて、暇にかけて凡ての點に注意の行き屆いた作品を出されることを希望する。急拵へだとて必ずしも粗末な作品になるとばかしに限らぬが、暇さへあれば、念にも念を入れるに越したことはない。

それから氏は、折角、吾々田舍出の旅烏と違ひ、交際の範圍も上流の家庭に在るのであらうから、毎時も〳〵自分の小不平や小感情を抒することばかしをしないで、其樣な方面の題材を捉へて、今少しは大きな仕組みの創作を試みられたら何うかと思ふ。(十月廿日夜)

△誕生の幸福

上司小劍

荷風君は夙くから新文學に眼を開いた人で、殊に其の洋行後に於ける人生の觀かたと、爛熟した技巧とには毎も感心して居ります。併しながら私の嗜好と云つたやうな方から云ひますと、荷風君の作物には態とらしい、無理に其の壺へ持つて來て嵌めた趣があるのと、餘り濃厚に過ぎた書き振りとが、何うも私の舌に合はぬことがあります。

私は、何事も帝國主義とパアトリイズムとで固めなければ氣が濟まんと云つたやうな、所謂現代の謳歌者――微温的論客――の說き立てたる淺薄な文句を見るのが厭やで耐らないとともに、また何事にも反抗的態度を執る時代の咒咀者の說くことを聽くのにも飽々しました。私の好むところは、もつと淡然、冷然として併も深い鋭いところのある人生社會の觀察ゝ批評とにあるのです。

荷風君は必ずしも反抗者ではなく、咒咀者でもありますまいが、其の書いたものには時に據ると、極はめて淺薄な且つ狹い境土に限られた反抗的、咒咀的議論の含まれてゐるのを見ることがあります。

けれども同じ山でも望見する人の立つ場所によつて形の異るやうに、同じ時代の暗影でも、缺陷でも、乃至は歡樂の要求でも、人生全體に對する絕望でも、私のやうな貧乏な下等の生活境遇から見るのと、荷風君のやうな準上流社會の生活境遇から見るのとでは、映じて現はるゝ上に非常の相違を來します。荷風君の文壇に於ける成功は、この『誕生の幸福』と云つたやうな點に負ふところが少くは無からうと思ひます。

現はれかたも異れば、落ち付く先きも無論違ふでせうが、私は荷風君の抒情的作物の或る點を見て、何となくフランスのサン、シモン（一七六〇年――一八二五年）を思ひ浮べることがあります。――現在に滿足しない情が非常に強くて、何ものにかあこがるゝと云ふ點に於いてゞす……時代の違ふ今日、荷風君が禮服のまゝ、馬車を下りて荷車の後押しをするだらうと云ふのではありません。――

△歡樂の人荷風

草野柴二

花瓦斯、花電燈――ニスを塗つた牀板も、天井、壁、欄間、そこに懸列れた思ひ切つた裸體畫も、燦然爛然と耀き渡る、數十のテーブル、數百の椅子、巴理つ兒は素より、英、獨、伊、一寸露さては黃色の支那人、眞黑の馬尼剌人など世界の人の散財場所とて、夏の頃はホールの中のみならず軒下まで殆ど一つの空席も無い。さまぐ＼の寶子、ブランデエの杯ベルモツトの盞のかち合ふ中を、づば抜けた寫眞、裸體畫、人形、扇子地圖、巴理案內を、少し鼻の下の長しと見込つけたる遊子の目の前につき付けて、嫣然と笑む。それを又遙かの彼方より優しき斜視で監視するは誰が家の子？田舍人のきよろつく樣の可笑しとて折々骨張の派出な扇子

に下半面を隱して眼元に秋波を流す艷容は、葭町、柳橋の阿嬌の掛けても及ぶところでない。

並に東洋の日出國——即ち巴理のカッフエーでは第一にきよろつく人の國の好男子、是は例外で、荷の葉をわたる風のすつきりと淸く凉しき面立は、例の優しき斜視に先きのとは別様の監視を鋭くさするに十分である。加ふるに彼は情緒主義を尊とする東西の古典に通じ、源氏物語とヰクトル ユーゴー、玉矛百首とエミール、ゾラ、廣津柳浪とエルレーヌなどを或は嘗て崇拜し或は今も崇拜する『歡樂』の青年である。巴理滿城の春に醉うてはそゞろに故國の冷、小、醜、汚を耻ぢ、金髮白面のヂヤンヌ、アンヌを擁しては更に梅花の油、島田の髷の只一向におとなしきを偲み、果ては『佛蘭西物語』に故國の文明を呪うて、是れ風を壞り俗を亂すのみならず、非國民的なり非愛國的なりと當路有司の怒りを買ふ。

偏狹なる「道德」の色眼鏡に睨まれ、目もり怪しき「秩序」の衡秤に量られるのは尙ほ忍びもする、文壇の人にまでその濃厚の文致、特色ある感想を淺薄なり幼稚なりと嘲けらるは心外である。況や我が文學の作物を淫靡放縱なりと唾棄することをや。卿等は日本人を知るのみ——日本人の醜惡なる、悲慘なる生活を知るのみ。世界歡樂の中心地を踏まず、巴理女に Monsieur と呼ばれしことなく、肉柔き纖手、紅燃ゆる朱唇に觸れしと無くして、獨特なるそこの空氣、カラし、トーンに養はれたる我が濃艷多情の文學を淺薄幼稚と酷評し、淫靡放縱と苦がき面す。潛越の沙汰である。

荷風は佛蘭西に Acclimatise された人である、時間(タイム)と習慣(ハビツト)の鎖を以て巴理に縛りつけられた人である。その濃厚の文章は、その特異なる感想と共にその Acclimation である——土地馴化の極めて自然なる結果である。日本に娛樂のなきを悲み、徒らに奇矜の過ぐるを傷むのは、決して、只輕佻なる洋行歸りの人の漫然と西洋を崇拜し東洋を罵るのとは違ふ。眞實巴理の都を歡樂の黃金鄕と思ふのである。眞實東京の巷を醜惡と感ずるのである。その泰西を揚げて故國を貶すのは腹の底から出るまことの聲である。嘘なき叫びである。本當にさう感ずるのである。

只荷風のこの感想は萬事一歡樂を中心としてのもので、廣く其他の社會には及ぼされてゐない。人を見ても自然を見ても、風俗を觀察し習慣を研究しても、その感想は——それは實に特色あるものなるにも拘はらず——悉く走つて一の「歡樂」に集る。歡樂の如何はその觀察、描寫徵を穿ち細を盡す、而かも其他の文明は殆ど批評されない。荷風の文明批評は唯一の歡樂を中軸として常に同じ軌道をぐる／＼回轉してゐる。取材の範圍は決して狹いのでは無い、たゞ、感想の變化に乏しい。餘り度々同一の感想——歡樂のみ——を繰返されると、厭になる、否讀者は感じなくなる、特異の感想も痛切、切實を失つてくる。讀者の胸に痛切、切實を感じさせぬ作品は文學では無い。

荷風は巴理の歡樂場裡に Acclimatise した感想を世界のそれ——少くも日本のそれに變へればならぬ、自己を表白する方法にも今や變化を求めればならぬ。(完)

△永井荷風氏

守田有秋

一

永井荷風氏は本年に入て、勃然頭角を顯はした新進作家である。氏が外遊以前の作は、何んなものであつたか、固より讀みも仕なければ、讀む可き價値も無かつたらうと思ふ。歸朝された後も、自分は「監獄署の裏」を讀む迄は、一顧をも傾け無つた。蓋し是れは理由がある。

自分は文藝を以て、大事業なりと考へるだけに、迚も富貴の家に育つたお坊つちやんなんどに、是が眞面目に遣れる仕事ではないと思つて居る。て永井氏の如き、銀の匙を以て育つた人が、よし筆先て、小器用な事を書き得るとしても、要するに其は若旦那の慰み半分の仕事て、書かれた作品と云つた處て、徒らに空虚な文字を羅列したに過ぎまいと、一圖に思つて居た。てあるから、自分は評判の可なり高つた「祭りの夜の話」なども、頭から馬鹿にして讀なかつた。「監獄署の裏」も標題の奇抜な處から、ツイ釣込れた讀んだと云ふだけてある。然し一度其の作品を讀んで後、自分は初めて自分の空想の誤て居た事を自覺し、同時に今度は反動的な長敬の念を懷くやうに成つた。

右言ふ如くて、自分は氏の作品を讀むの機會があつた處へもつて來て「佛蘭西物語」は發賣禁止、「アメリカ物語」は讀み得ず、僅かに手許にある「歡樂」と「歸朝者の日記」に依て、氏の作品を品騭せんとするは、餘りに大膽てはあるが、然し、自分は氏の本領の發揮されたのは歸朝後一年間の創作にありと信ずるが故に「歡樂」一卷に依て得た自分の淺薄なる考へを吐露して見度い。

二

「歡樂」に收められた九篇は、悉く傑作とは云へないが、概して傑れた作品である。殊に卷頭を飾れる「歡樂」一篇は、確に一卷の壓卷と稱す可きものであらう。「歡樂」に次ぐの作品は、何を云つても「監獄署の裏」てある。其から「祝盃」、「牡丹の客」、是等は何れも卷中の白眉と云ふ可きてあらう。

「歡樂」は、確に自然派の作よりは區別して見なければならぬ。其の情の奔放なる、其の詞藻の豐富なる、其の文字の絢爛なる、其の筆付きの優婉なる、そして讀者の感情としつくり融會する邊り、何うも、在來の自然派諸家の枯談なる文章とは比較にならぬ。此篇ては現實な曝露すると云ふ事其自身よりも、寧ろ情緒的に、夢の樣な青春の戀。戀に飽滿した刹那の不快、倦怠。戀を失つた瞬間の絶望、不滿。其等の事件を華かな文字て並べて、其裡に人生の實相を反映せしめやうとしたのだ。てあるから、在來の自然派作家の作品のやうに、讀者は、讀了した後に感得する理屈や、疑問や、反社會的の感よりも、寧ろ談い哀愁の念——其れも同情のある——に驅られる。

「監獄署の裏」にも歡樂て見るやうな、情緒的な個所が尠くない。是を自然派の作風と云ふよりも寧ろ情緒派、耽美派の作風なりと云つた方が

適切であるかも知れない。けれども此の作には「歡樂」よりも更に反社會的な、社會主義的な、アナーキスチックな思想が漲つて居る。其の祖國の教育を咒ひ、藝術を咀ひ、遂に國家其自身を咒咀して、皮肉な文字を並べた邊りには、餘程痛快な處がある。其の家庭を咀ひ、俗衆を罵り、遂に現代社會を痛罵した邊には、却て壯快な處がある。けれども是れあるが故に、此の一篇を讀了して得た印象は感情の融會でもなければ、消い哀愁の念でもなく、又美に對する憧憬でもない。唯だ燃えるやうな反抗的の思想である、破壞的の考へである。であるから、讀んで居る中も、常に叱咤され、罵倒されて居るやうな氣持がする。然しながら是を別にしては此篇の取得はないのであらう。成程描寫も却々好いが、然し其れよりもレボルトの思想を情緒に描くと云ふ事の方が此の篇の重なる點であらう。そして是は、永井氏の現代の日本及其の社會に對する聲ではなくして、近代思潮の赴く處は、早晩必ず斯る絶叫になるに相違ないと思ふ。

其れに付けても自分は氏の態度が、自然派諸家の態度と愈々相違して居る事を此一篇に依て想察する。蓋し氏の思想は決して、日本帝國に於ける自然主義者として、自然主義を抱懷すると云ふやうな、其様の曖昧なものではない。從て氏は、無解決に滿足して居る人とは思はれぬ。若し無解決に安住して停る事が出來るならば、何も其の祖國を咀ひ、其の社會を罵る必要はあるまい。成程氏は赤旗を推し立てゝ、現代と爭ふ人ではあるまいが、有ゆる現代社會のものを否定する態度は、解決を有し、理想を有する思想家にして、現代社會に換ゆるに何等かの改良されたる他の者を以てせんとして居る事が解る。要するに氏は明かに自然主義者ではない。然し「歡樂」に收めた諸篇の中には自然派の作品も混つて居る例へば「祝盃」「牡丹の客」等の如き、其れである。

最近に世に表はれた「歸朝者の日記」は、少し狙處は違つて居るが行き方は「監獄署の裏」と同じである。然し自分は「歡樂」と「監獄署の裏」の二篇さへ讀めば、其れて、荷風氏の作全體を推す事が出來ると思ふ。何故かなれば、現在までの氏の作品は、大別して以上二篇の、何れかの系統に屬するもの許りであるから。

人物の性格とても餘り多くの作品ではないから、類型が多い、是は當分止むを得ぬとせねばなるまい。

三

今後の氏は何う云ふ工合に發展するか、其は疑問であるが、兎に角今日の儘で進めば、氏は早晩ゴルキィ風の社會革命を夢想する作家になるか、或はトルストイ風の宗教道徳を云謂する作家に成てあらうと思ふ。自然派の懷疑的な、虚無思想でなくして、何等かの解決を有し、理想を有する思想家の常として、多くは爾う成なければならぬ必然の勢てある。

又自分等が異彩ある作家として永井氏を取扱ふ所以のものも、現に氏が、自然派と異る態度により、理想なり、主義なりを頻りに振廻すが故てある。若し單に在來の自然派作家としてならば、何も事々しく永井氏を論ぜずとも、青果氏あり、風葉氏あり、花袋氏あり、早稻田文學社諸

氏あり。其れて澤山てある。

唯だ注意す可きは、正宗白鳥氏の思想が極端まて行つて、不知不識の間に一轉するならば、其は必ず永井氏と同徑を取るてあらうと云ふ事てある。

其から、前云ふ如く永井氏の文體も、其の重なる作品は自然派の諸家とは相違して居るから、若し「歡樂」にあるが如き儘て進んだならば、將來必ず新に別派を創設するてあらうと思ふ。創設と云ふと語弊があるが兎に角新しく一家をなすてあらうと信ずる。

是を要するに現時文壇は、此の異彩ある文士に對して嚴密なる注視を拂はればなるまいと思ふ。

△荷風氏の印象

服部嘉香

△荷風氏を訪問したのは今年の春、まだ寒い二月に「東京毎日新聞文藝記者」、と云ふ名刺を出して行つたのが初めてであつた。玄關へ出て來た小間使に「荷風さんは居られますか」と聞くと、「若樣てございますか」と念を押してゐた。厭な家だと思つて待てゐると、やがて通されたのが廊下を右へ突き當つた薄暗い部室てあつた。丁度相馬御風氏が來てゐて、紬入羽織を着た脊を丸うくして火鉢にあたつてゐた。部室の暗いのは庭の立樹が多いからてあらうがあの明るい色彩を好む荷風氏がよく此處て我慢をしてる事だと思つた。その天井の低い六疊ぐらいの部室と荷風氏とは何うしても調和してゐない。極端な束縛と陋習の中から極端な自由が生れる。荷風氏が詩人てあるのも無理はない。

△「あめりか物語」は御風氏が發見した抒情詩てある、と思つて讀んてみた。其後の短篇を見ても氏の感覺の鋭敏てあり且つ淸新てあることに感じた、且つ、多少の嫌味はあつたが其の表面が如何にも自由てあり大膽てあるのに感じた。其の通り荷風氏のスピリチュアル、サイドは全く華族と離れてゐるが、いま當面に荷風氏の顏を見た最初に、私は其の背影になつてゐる華族の血液といふ事を考へた、その鼻の下の濃い生毛のやうな髯を見て華族の肉體と云ふ事を考へた。荷風氏の容貌の中には未だ「若樣」がある。

△新聞にはアンリ、ド、レニエの詩の事を話して貰つた。談話の調子は小鳥が地上を飛ぶやうに、輕快な發作的のものてあつた。それが濟んてからパリーの夜の光景を二つ三つたづねてみた。私は荷風氏の作を讀んてからパリーの夜と云ふものが無暗に好きになつた。「僕は唯だ遊びにヨーロッパへ行つてみたい、そしてパリーの夜と、イタリーの夕暮と、スウィッツルの雪と見て歸りたい」と好む友達などに話をした。

△荷風氏の作は、あくまて自由に自分の感情を述べてゐるのが羨ましい。私はいまの自分が全く抒情的態度を取るべき時代だと思つてゐながら、あれほど大膽に表白する事を知らない。荷風氏の作を見てはいつもはら〳〵思ふ。あれまて十分に云へるものかと始終思つてゐる、だから

物に感し易い私の性質は、却つて荷風氏の作に惹きつけられるやうになつた。そして自分の感じてゐる事を先取して、却つて云はれて了つたやうな氣がしては時として嫉妬の情を起す事がある。

△以前は荷風氏の文體には舊い技巧の嫌味があつた、此の頃は其れが殆んど痕跡を止めてゐないか。本紙前號の「斷腸亭の日記」なども文章が大變旨いと思つてゐる。

△それから荷風氏の作はセンスに滿ちてゐる、總ての風景や光景や事件を、氏は常に色にし、光にし、響にし、香にしてみる。その態度が好きだ。實際荷風氏の作は新らしい感覺が生命である、印象主義と云ふ事はまだ表面の態度ばかりに云う事でない、物を見、聞く態度の上にも云へる言葉と思ふ。古いものを引き出すが、ミルトンの『パラダイス、ロスト』の中に、セーメンが愈々新世界へ遠征する事となり、衆魔一同喝采稱讃する事を叙したあたりに、

For Eloquence the Soul, Song charm the Sense.

と云ふ言葉がある、是はミルトンの詩人として傑出してゐる一面を證明する言葉であるが、荷風氏の作は此言葉に考へ合せると、全くセンスの文學と云はねばならぬ。詩の尊いことは其のセンスを忘れない點に在る、さうすれば荷風氏の作には新らしい詩の要素が含まれてゐると云はねばならぬ。私は荷風氏を日本の現文明を嫌惡する批評家としてよりも寧ろ詩人として敬服する。——但し氏が此の頃發表してゐる評論にはあまり感じない新しい詩の技巧と音樂と云ふ事に付て荷風氏はあまりに音樂的な考へを持つてはゐないかと密かに思つてゐる。

△書く事には連絡が無いが、二月に荷風氏を訪れた時は、一度私は「明治文學史」を書いてゐた時分で、その必要から氏の舊著地獄の花を貰つて來た、その時に『荷風著作集』とか題して合本してあつた此の以前の短篇を集めたものを借りて來たが、三十五六年頃の荷風氏が好く解つた。「地獄の花」には華族社會の肉慾生活が描寫してあつたが、直譯體の文章で殊に遺傳といふ事がエムファティックに書いてあつた、私は荷風氏自らを見、又その後現在までの作物を讀んで、華族の肉慾と云ふ事を色んな方面から考へてゐる。

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

三省堂編＝創業三十年記念

世界地圖

全壹軸 縦五尺八寸 横五尺六寸 絹緞子紋織地美装 附錄索引 四六二倍 百五十餘頁

●實用と装飾とを兼ねたり

本圖は弊堂創業三十周年の好機に際し記念出版として提供したるものなれば**營業の觀念利益の打算を**外にし特に最低廉なる價格寧ろ實費を以て販賣す而て本圖が、**政客、學者、實業家、宗教家、及、教育家必須の掛圖たり家庭に於ても、學校に於ても、會社、官公衙、將た、娯樂の集會所に於ても、**普く歡迎せらるべき實用上の良圖たるのみならず、**家庭の趣味と娯飾とに對する、斬新なる提供たり**

●印刷の精巧

本圖は、美術上の理法を應用して彩色を施し、二十遍摺を以て、圖面の鮮明彩麗を期し、且、各彩色にはインキ艶を施し、汚點附着の時は、濕布を以て容易に拂拭し得べき様にせり。故に、之を一見するときは、**恰も名匠の手に成れる高尚優美なる模様畫を展開せる觀あり**

●表装の善美

殊に軸製表装に多大の注意を拂ひ、其天地に貼附せる緞子織の如きは、特別に地質・色合・及模様を選擇し信を斯業に博しつゝある機業家に命じ織製せしめたるものなり。其の從來坊間に有りふれたる軸製地圖の表装と霄壤の差あること、固より論なし。故に。本圖は如何なる家庭の壁間に掲げらるゝも、優に装飾と趣味とを助くる逸品として、**山水花鳥の名畫に相對するの眞價あるべし**

定價 八圓
特價金三圓八十錢
荷造實費拾貳錢
送料別に申受く

編成説明書 呈上

發行所 東京 三省堂書店 神田 振替貯金 東京一五九七

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

海外新聞雜誌豫約期

文藝學術政治農工商等如何なる方面に於ては其率先者たり勝利者たるは必ず海外新聞雜誌の購讀者たる現下の急務を見て此際弊社は廣く各國新聞雜誌社と特約を訂して來年度よりは著るしく豫約價を遞減し且從達の益々迅速なるべきを期したり願くは昨年に二倍したる弊社新雜誌目錄に由て或は特に展陳したる著名なる各雜誌約千餘種の見本現品を貴覽の上即時御注文あらん事を(來年度一月分よりの雜誌御注文は即ち今日を以て最好機とす)

東京市日本橋區通三丁目

丸善株式會社

支店
大阪市心齋橋筋博勞町
京都市三條通り麩屋町

目錄は御要求次第即時送呈



十七の頃

佐藤紅緑

七歳八歳から木太刀を持て町中を彷徨く、蜻蛉釣りや土鰌掬ひおせぬてはなけれども、其れよりも子供の遊びは喧嘩でつて、嘘の喧嘩は本當になる、石を飛ばし、地べたを叩き廻り、果ては眞劍木刀の決闘となつて、弱いものは負ける、強いものは勝つ、瘤が出來たり血が滲んだりしても泣き面をせぬが武士の子、津輕人の魂だとしてある。其癖翌日學校で敵同士が出會つても、昨日の勝負は一切水流しだ、瘤の源因も引掻き傷の恨みも思ひつこなし言ひつこなしにして仲よく遊んで一日を暮らす、喧嘩の事をいつまでも根に持つものを

は卑怯者だといふ。

勉は恁ういふ土地に生れて恁ういふ風に育つた、併し一體氣の小さい質で、喧嘩は餘り好きでない、其れでも一月に一度や二度の喧嘩をしなければ幅が利かぬ、いや〳〵ながら攫合をした處で勝てやう筈がない、勝てないから猶ほ好かぬやうになる。

勉は孤兒である、七つの歳に母に別れ十三の歳に父に別れ、其れから直ぐ叔父の手に引取られた。叔父の重平は勉と同じく高橋姓で四十をずつと越えて居た、西南戰爭の時に中尉で、田原坂の戰ひに左脚を射たれ、今まは恩給と公債證書の利子で辛うじて一人の甥を養つて行かれる、暫らくは郡役所に奉職したり又裁判所の中で證劵印紙や何かを賣たりして居たが、何分不具の身體で思ふやうには行かぬ處から其れ等も一二年で止めて了つて、今は閑塞げ旁々罫紙を摺つたり、林檎の袋を張つたりして居る。

「俺あ決して貧乏でないぢや、要る木があらば幾何でも買て呉るて、懸命と勉強しろよ」

彼れは晩酌の五勺で、赤銅色の顏を美くしきまで艶〳〵させながら勉を恁う言つて勵ますのが癖である。正月の三ケ日は必らず明治七年頃の、洋袴に太い赤い條の入つた軍服を着けて廻禮する事と、春先になると枸杞の垣根に莚を敷ひて胡麻鹽の頬髯を頬冠りに包んだまゝ往來の人の笑ふのも構はず喜多流の謡を聲高に吐鳴りながら接木をする事と、火事があると如何な遠い處でも構はず必らず義理に行く事と其れから一生無妻で暮らしてる事とは世間での逸語に上つて居る。

「喧嘩して泣いて歸つたら家さ入れないぞ」

勉はいつも然う言はれたものだ、七つの歳から十七の今年まで、叔父にも然う躾けられた。外へ出ると、二言目には「馬鹿野郎」「卑劣い奴」「おい戰らうか」が出る、石が飛び棒が降る、家へ歸ると「喧嘩に負けたら士族の子ぢゃ無えぞ」と怒鳴られる、瘠せ我慢して喧嘩もするが、氣の弱い勉はつく／＼情け無く感ずる時もあつた。

或時、勉の宅から四五丁も離れてる、學友の野宮の家へ遊びに行つた、野宮は勉と同年で、喧嘩をする前に必らず眼球の眞中から涙がボロ／＼落ちるといふのを以て有名な弱蟲で、其代りに學校の成蹟にいつも優等だ、弱蟲は大抵優等であつた。

野宮の家は弘前の町では中流以上の構で黑塀に黑門、整然と刈り揃へた生垣、鷄やなんかの遊んでる庭畠―弘前では庭と畠の區別がないのが多い―其れに二階があつて、椽側が長くて、いろんな人が出たり入つたりして居る、勉は第一其の多人數なのに驚いた、祖母さんといふのと大祖母さんといふのがあつて、伯母さんが二人あつて、御母さんがあつて、妹が二人ある、皆んな女だ。其れ等が奥の間で時々笑ひさゞめく聲が暖かく陽氣に聞える、跛の叔父さんと只た二人つきりで淋しく暮らして居る勉には殆んど別天地のやうに思はれた。野宮の御母さんは心を籠めて勉を欵待した、野宮は勉の手前をも憚らず折り／＼狎へた調子であの菓子は不味いとか、何とかの雜誌を買て吳れなければならんとか我儘を言ひ散らす、其れを御母さんは一々採用になつて莞爾／＼して見せる、全然嬰兒のやうだと勉は野宮を侮つて見た、同時に御母さんがあるといゝな姉さんてもいゝと得も知らぬ悲哀が起つた。野宮とは其れから五

年越し往來して居る、其間に二人の伯母さんが相前後して何時の間にか姿が見えぬやうになつた。

勉は十七となつた。東京に國會が開けたといふので、何かしら日本の國は急に豪くなつたやうな氣がして勉のやうな少年間にも一種の自重心が起つた、市内各種の學生團體が盛に演說會や討論會をやる、演說といつても文章朗讀のやうなもので杜撰な形容詞で捏ねあげた感情的な文句を奇妙な節で謠ひあげるやうなものである、勉も野宮も此の流行に驅られて、何か一つの會を組織しやうといふ相談をした、此相談の結果二人は準備委員として同級の青木を勸誘した、青木は去年落第して同級になつたので馴染も淺いが、誰れにでも當り工合のいゝ至極角の取れた男で、其代りに喧嘩といつたら直ぐに尻端折をして逃げ出す、卑怯者だと言はれても僕は弱いんだから逃げるのだと明白に言ひ退けて別に耻かしいとも思はぬ、だから今では青木を相手に戰らうといふ者もない、人を笑はす事が上手で、休みの時間には眼を剝いたり鼻と耳とを一緒に動かしたり、飴賣の眞似をして見せたりして絕えず衆を笑はして居る、町方で流行る俗唄を第一番に聞覺へるのはこれで、「士族の體面」といふ事を生命よりも重く取扱つて居る弘前の學風には少しも合つて居る點が無かつた、其れで大抵二年目に一度は落第する、家庭の嚴しい士族の子弟は青木と交る事を耻辱と思つて居た位。けれども交際上手の彼は親友を持たぬ代りに敵を持たぬ、寧ろ半分は其の氣輕なのに調法がられて青木〳〵と可愛がられた、野宮と勉は會員勸誘の點からして青木に眼を着けたのも無理はない。二人の依賴に青木は非常に喜んで應じた。

今一人は寺澤唯一といふ男で、年は勉等よりも二歲も多い、學期の半ば頃から缺員補充の試驗を受け

て此の二年級に入つた、何處から來たと訊いても笑つて答へぬ、強て訊くと日本國中を廻つたと言ふ丈けだ、彼れは舊津輕藩の歴々の人の妾腹の子で、母なる人は彼を携へて諸方に流落した揚句、故郷忘じ難して十數年の後再び弘前に歸り、今は寺町の菓物屋の二階に踊りの師匠をして其日を送て居る、此の話は勉が叔父に聞いた事で、彼は何となく哀れなる母子の上に同情を寄せて居た、幼さい時には東京にも居たらしい、僕は五つの時に九段の招魂社の鳥居が横にしたまゝてあつたが唐銅で造つた柱の虚を僕等は立たまゝて横に出入りしたものだ抔と言た事もある、初めの一二ヶ月間は頗る神妙にして居たが、半年經たぬ中に校中第一等の悪戯者となつた、先づ書學の時には机の下を向きながらむしや〱饅頭を食ふ、黒板が教師の頭に倒れる樣に柱を退らして置く、小使部屋から火鉢の炭を盜んで來る、控所にある生徒の辨當を食て置て知らん顏して居る、古木屋で新舊書籍の交換賣買する事を同級に教へたのは此男である。彼れの悪戯は隨分思切た事をするが併し極めて無邪氣なもので大抵は教師も一笑に付す事が多い、顳顬の邊りが馬鹿に濃くて剃り付けた二三日は青々として居る、一體に毛深い質と見えて頤の邊りも疎らに毛が生えかけてるので、勉等は彼を「親父」と稱んで居た。二人は此男をも勸誘した。

寺澤は二人の話を聞いて霎時考へて居たが軈て

「僕は贊成だ」と言て「併し加入る事は止さう」と答へた。

「どうしてだ」と二人が問ひ返すと。

「會費はどれ丈け要るか」といふ。

規則は未だ出來て居らんが、東京の雜誌を五六種—少年園に文庫、國民の友、學海の指針—を購讀したり其他の雜費を計算すると一人に就て五錢はどうしても徵收せねばならぬ。

「まあ五錢だ」と勉は答へる。

「五錢か、僕には迚も出せない」と寺澤は忸と伏目になつた。勉は俄然同じ思に打たれた、毎月の月謝五十錢の外に小遣といふて別に父兄から貰つて居るものは上流の子弟か左なくば町方のもので、士族の方では無駄費ひを耻として居る、叔父は學校の入用に就ては決して愚痴をこぼした事がないが、併し月謝以外に金の出る事を前後の考もなく決めて了つたのは不覺であつたと、寺澤の男らしい言葉に感服して自分の輕卒を耻ぢた。

兎も角も母とも相談の上でと寺澤は別れた途々勉は寺澤の哀れなる境遇を思ひ、自分は叔父がある丈けに其那心配のないといふ事も思ひ比べ、貧しき自分等と富める野宮と同等に交際つて居た事の過失を考へ、寺澤の母も自分の叔父も同じく自分共のために人知れぬ苦勞があるだらう抔と思つた。

併し其翌日は寺澤も母の許を得、自分も叔父の許を得て同士十六人で無名會といふのを組織した、會の名は寺澤の案出であつた。

其れは三月の末頃で雪は薄降りになつたが町も山も未だ土を見る事は出來なかつた、天氣のいゝ時には輕い東風が雪の外面丈を堅めるので、足駄を穿いたまゝ堅雪を渡つて一里二里の野山に遊びに出る、久し振りの郊外散策といふので、勉等は只だ檻の中から出た野兎のやうに當るを幸ひに跳び廻つて雪の

上に寐轉んで東北の春近き日光を薄雲の間から眺めたり、冬の北風と戰つてによき／＼と裸のやうに枯れて立つた木立を例の木劍て叩き歩いて思ふ存分大きな聲で詩吟をしたりして冬の死から蘇へらぬ谷々の谺を驚かしたものだ、午後になると堅雪の外皮が薄日の力に柔かくなるので、深入をした歸途には膝の上まで沒かる雪を七顚八倒の苦みて漸と町近く來て吻と息を吐く事もある。

朝は擊劍の稽古、其れから學校へ行く、學校の歸りには雪合戰をする、近頃は勉の日課が殖へて、叔父の重平から孟子の講義を聞く事になつた。丁度此の頃野宮の家に三番目の伯母さんが見えた、久しく青森の親戚の許に居たのが、病氣で歸つて來たのだといふ、伯母さんの名は篤子であつた。

病氣だといふもの丶勉の眼には何んでも無さ丶うだ、背丈けは低いけれども中肉の方で色の白い事は弘前の普通の女と同じだが、伯母さんの顏はいつも逆上てゞも居るかのやうに眼の兩瞼が薄紅くぼかされて居た、若し病氣なら頰がこけて居なけりやならんのに、寧ろ頤の下が溫かさうにくびれが付いて居る程一體に下膨れ勝なのを見ると、どうしても病氣のやうでない、野宮の話では始終頭痛がするさうだが、して見ると病氣てはないが、腦が惡いのだらうと恁う思つて居る。野宮の書齋は野宮の專有ではない、野宮が一番好きな祖母さんと同居て、祖母さんはいつも鷄の羽て作つた坐蒲團を圍爐裡からずつと離れた床の間の側に敷いて、そこへ絲車を持て來て、絕えずぐう／＼苧を繰て居る、野宮の處へ友達が來ると。

「太郞、私い此處に居ても宜いか」と尋ねる。

「居ちや困るな、彼方へ行て呉せ」と野宮が言ふと
「爾か、ぢや行きすぢや」と繪紙を張つた木箱の中から、貯への栗や干葡萄などを手摑みに出して來て
澤山あがれせよ」と言てずん〳〵と引込む、其れでも氣になると見えて、暫らくして御茶を持て來て
「學校で何か面白い話がありしたか」と坐りかけやうとする。
「彼方へ行けせといふに、祖母さんなんかいやだな」と野宮が怒鳴りつける。
「ぢや行きす」と躊躇して、狐の皮で作つたちやん〳〵こを着た背中を中曲に見せて行て了ふ、勉はいつも此狀を見て野宮は何だつて祖母さんをこんなに怒鳴るのだらうと思つて居た、其癖、野宮は此祖母さんが一番好きで大祖母さんは大嫌だと言て居る。

日が窓に射し込むので、窓を明けたまゝ話をして居る時には向ふの畠から庭の方へかけて御篤伯母さんの散歩してるのが見える事がある、いつも荒い縞の羽織を着て着物は五厘銅貨位の大きさの星のある飛白だ、肩には其頃流行りかけた毛絲の赤い肩掛を三角に折つて掛けて居る、始終何か考へてるやうに眞白い頤を襟深く埋めて兩手を內懷になし、重たい藁履を足に引掛けて、ぱたり〳〵と力なく引摺りながら、何を見るともなく一ケ所に瞳を凝らして凝と見詰めて居るかと思ふと、又たものに驚いたやうに、ふいと身體を向けてすた〳〵歩き出す事もある。あれが詰り病氣の故なんだと勉は賢こくも心に決めて了つた。

伯母さんの年は廿三であつた、併し勉の眼には十も二十も自分より多いやうに思はれて居た。

無名會は益々盛になつて、野宮の家を會場にして毎週日曜毎に演説會をやつた、勉の演説は非常に巧いといふので評判になつた、勉自身も爾信じて居た、討論が始まると伯母さんは襖の陰でこつそり聞いて居る、終には公然顔を出して聞くやうになつた、初めは會員の中から「女なんかを席に入れては」との抗議もあつたが、遂と其れも言ふものが無くなつて寧ろ伯母さんの見へぬ時には淋しく思ふやうになつた、楠公と孔明と孰れが優れるとか、大義滅親の可否とか内憂外患孰れか恐るべきとか其那問題に一生懸命の智恵を絞出して騒ぎ出す、議論中々終局にならん場合に伯母さんの裁決を請ふ事もある、伯母さんはいつも預りとするのが例で衆が其れに満足して散會する。

伯母さんは何處で學問をしたのか勉は知らない、けれども伯母さんほど何でも知てる人は世界にあるまいと信じて居た、伯母さんの書齋は支那百家の書が黄色な表紙の耳を揃へて積まれてある、其頃出版の日本文學全書や歌學全書なども殘らず揃へてある、あれ丈けの本を皆な讀だのかと勉は舌を捲いた。

野宮と勉と二人の時には、伯母さんは徒然草の講義をして呉れるので、四書九經でなくば英語數學より他に讀だ事のない勉には頗る面白く感じたので、毎日夕飯を濟ますと野宮の家へ通ふやうになつた。

其間に雪が解けて道路に土が見え出すと、間もなく奥州の春は一度に來て、梅櫻桃李申合はして咲き初めると、土地の人は只だもう薄暗い雪囲ひの穴の中から出て麗かな天の色、日の光を拜む事の嬉しさに大抵手にものが付かぬと言たやう、學生どもも只だ夢中になつて立野邊りを跳び廻る、されども勉は何故か今年は餘り野原を好まぬやうになつた。

或る朧夜の時であつた、勉は例の通り野宮を訪ねて、室へ通ると野宮は居ない、若しや伯母さんの室かも知らんと其處へ行て見ると、室は眞暗がりてある。

「伯母さん〱」と呼ぶと。

「え」と答へる、聲はいかにも氣の無さゝう

「暗いぢやありませんか」と言ても返事が無い。

「どうしたんてす、伯母さん」と言ふと急に思ひ付いたやうに

「勉さんなの？」と言ふ

「あ爾てす」と窓の方に座りかけて

「燐寸が無いのてすか」と言ふと

「燐寸？」と暫らく間を置て「燐寸はあります」と今度は明晰と言て机の邊りで燐寸を音させたが、幾度も仕損じて漸やく洋燈に點火た、が、仍且默つて机の前に兩手を懷に入れたまゝ茫乎と考へて居る、勉はちらと其顔を見た。

「伯母さん泣いてたんてすか」と言て了つてはつと氣が付いた。

「え、泣いて居たの、泣きたくて仕樣が無いんてすもの」と机に顔を當てたまゝ暫らく其の美くしい髪を顫はして居た、恁うなると勉は何と言て宜いか分らない。

「ねえ、勉さん泣いてもいゝてせう、泣かして下さい、これが私の病氣なんてすから、直き癒りますか

ら待て丶下さいね」と途切れ〳〵に言て軈て顔を上げて、手巾で涙を拭き
「可笑しいてせう、これが病なの」と笑顔を見せて洋燈の心を上げた、
「どうしたんてす」と勉は小聲て言ふ。
「病なの」と再び涙を拭いて
「太郎が居なくても讀みませうか」と徒然草を取り上げた、勉は例の如く其傍へ摺寄る。
と、栞をした頁を開けて伯母さんは一二行讀み下したが、突然絶句して默つて了つた。
「沅湘日夜東流去、愁人の爲にとゞまると少時もせず」と勉は口の中で讀てこれは唐詩選にある詩だな
と思つた、伯母さんは未だ默つて居る。
「嵇康も山澤にあそびて魚鳥をみれば心たのしむといへり」と今度は聲出して讀て見たが伯母さんは未
だ默つて居る。
「病氣の故だ、煩くすると宜くあるまい」と勉は暫らく本に眼を落したまゝ待て居たが、物珍らしさう
に室の中を見廻した。
室は亂暴に取散らされてある、衣紋竹に掛けた着物は紅い裏を翻へして見せて、其下は解いたまゝの
帶や赤い下紐や薄汚れた白足袋やが置きつ放しにしてある、床の間の花瓶に活けた木蓮がほつたほたと
書物の上に散つて花の蕊丈けが茶色に乾いて殘つて居る、机の下には木枕が一つ轉がつて居る、これは
頭痛のする時横になる爲めだと勉は思つた、最初は流石にいかにも室内の不整頓のに驚いたが其れも病

氣のためだと思つた、そしてどうかして伯母さんの病氣を早く癒してあげたいものだと念じた。

「其れから如何したの」と伯母さんが言た。

「え、其れから」と釣込まれながら突如なのに驚いて、頁を伏せた本を再び取上げやうとすると

「今日は止しませう」と伯母さんは窓の方を向いた。蛙の聲が暖かさうに聞えた、窓は何かに包まれたやうに薄ぼんやりと朧に軒の影を映し出して居る、阪の上では何か聲高に爭ひながら二三人の聲が行く。

「え、止めませう」と勉は答へた、何だか此室は蒸すやうな氣がして匆々に暇を告げて門を出た。

門を出ると春の夜は美くしい、城の高濠の上に茂れる六百年の松檜が田打櫻の眞白なのを隙間に見せて、朧の寂莫に昔を語てるかのやう、僅かに梢の輪廓丈けを動かして居る、阪を登ると招魂社の境内、其處から伯母さんの書齋も見下される、津輕富士の岩木山は夢のやうに薄白く裾の方丈を見せて居る、家々の春の灯は人を戀ふる如く相瞬いて何となく懐かしい、勉は社の後ろの木株に腰掛て少年時代によくある詩めやうな冥想に耽つた。

冥想が破れると伯母さんの事を思ひ出す、此頃は一日も伯母さんを見ずには居られない伯母さんは美くしくて親切で、情けがあつて惡戯をしても叱らなくつて、何となく懐かしくて、何だか今夜のやうな美くしい中に情けが籠つて居る春の夜と何かの關係があるやう思はれた。併し今の先刻何故伯母さんを慰めなかつたらうか、慰めるにも何と言てい丶のか知らないんだから罪にはなるまいと辨解して見た、

併し何故泣いたんだらう、勉は礑と難問に出會した、何故泣くんだらう、病氣に泣きたくなるといふ病氣は聞いた事がない、彼れは恁う辿つて端なく野宮から聞いた事を想ひ出した、祖母さんと大祖母さんと仲が惡いと、伯母さんと野宮の母と仲が惡いと、其爲めに伯母さんは青森へ行たり弘前へ歸つたり始終動いてる事、恁う思て見ると伯母さんは今日野宮の母と喧嘩したのかも知らぬ、勉は勉丈けの考を此處まで纒めて、して見ると伯母さんは可愛さうだ、伯母さんのやうな優しい人と仲が惡いとすれば、其れは伯母さんが惡いのでない、相手が惡いのだ、斷じて相手が惡いのだ、と恁う決定した。

決定して見たものゝ何だか其れても無いやうな氣がするので、勉は根氣勞かれがして結論を他に轉じた。

何にしても伯母さんは可哀さうだ、恁う思ふ中に伯母さんの境遇は何となく自分の境遇に似て居る、伯母さんに敵があつて泣いて暮らすといふ事と自分が父と母に別れて貧しき叔父の世話になつて居る事と、同じ哀れの中の人だといふ樣な感じがして、同時に伯母さんと共に泣くのは自分一人丈けであらうと思つた、人に同情するといふ事は人に同情を求める心と一致するもので、勉は少年時代に有り勝な悲哀の感じを伯母さんの上に向けて見て、得も言はれぬ滿足を感じた、同時に伯母さんが若し自分の母であつたならば、どんな悲しい事があつても構はぬのだがと再び淋しい思に返つて、此身體を此儘に伯母さんの懐に抱かれて野宮が其母に對する如くに自分もして見たいと思つた。

其後二三日經つと伯母さんは餘り泣かないやうになつた、其替りに動もすると理由の無い事まで笑い

出す、奥座敷、納戸、書齋、庭でも畠でも伯母さんの居る處は其の笑聲で知れる、其爲めに野宮家は打て替つて春風吹渡つた。

或時勉が行て見ると、丁度伯母さんは畫の御稽古であつた、伯母さんの畫の敎師は笹森乙彌といふ人て伯母さんを三十位と思て居る勉の眼には此人は五十位に思て居た、實際は三十二の分別盛であるが、どういう理由か額際が著るしく頭の方へ禿げかけて居る、眉が恐ろしく太くて眼が大きく男らしい相恰てはあるが、口元が妙に力なくいかにも人生に疲れきつたやう、一寸見には聾の人によくある顏で、笑ふといふ事は極めて稀に、若し笑つても病人の如く大儀さうに口端を弛ます丈けてある、何處へ出るにも袴を脱した事はない、懐に何かしらの本を一杯に膨らまして、大抵は釣竿を擔いで何處かへ行く、畫は中々の評判で此の二三年前から高等小學校の畫學の敎師に雇はれたが、敎師は大抵敎師の制服と制帽とを被るものだが、乙彌樣は洋服が嫌で、進退を賭して爭つた結果、乙彌樣丈けは洋服を免除された。今こそ學校では先生と稱ばれてるが、何處へ行ても乙彌樣で通つたもので畢竟稱號が何であらうと乙彌樣には釣の獲ものの多少ほどは重く思て居らぬらしい、伯母さんの話に依ると、彼は單に畫のみならず、和漢の學に於ても優に中學校の敎師以上で近頃は釣をしながら英語を獨學してるさうだ、畫の稽古が終ると乙彌樣は釣の話を始めるこれには伯母さんも弱つて居たが、近頃は例の笑ひ崩れながら口重い乙彌樣の話を喜て聞くやうになつた、先づ釣の好時機は梅の蕾のぽつ〳〵紅らむ頃が第一て、秋の魚は芦の穗が絮になる頃がいゝとか、魚の嗜好と餌の選擇が大事だとか、魚の性質に依て釣の手加減が最も六

つかしいとか、彼は訥辨ながらも殆んど無駄のない趣味のある言ひ様て、勉には少なからず感興を催ほした、話の中て魚は最も聰明な耳を持て居るものだと言た時、伯母さんは腹を抱へて笑つた、勉も笑つた、併し乙彌樣は莞爾ともせず、靜かに笑の止むのを待て居る、斯ういふ鹽梅て果てしがないので勉は先刻程馬場の濠の傍て春の茸が大分生て居たのを見た事を話すと、伯母さんは直ぐ行て見やうと言ふ、乙彌樣も行くといふので野宮をも誘ふて四人て門を出た、馬馴らしの處までは僅かに二丁許り、芝生は一面に緑を敷きつめて柔かに草履の底を擽ぐる、此處は何人も足を入れぬ處なので、向ふの植込に小鳥が何十羽となく飛び廻つて居る。

と突然伯母さんは

「驅け足い」と叫んで逸散に驅け出した、野宮も勉も負けじと驅け出した、乙彌樣も驅け出したが、不意を食つたのと足駄を穿いてるので遙かに後れた

三人が御城の土手に腰を下した時に、伯母さんが呼吸ぎれと笑いたさとて七顛八倒した、二人も乙彌樣が不意を喰つて懐の本を確と抑えた時の顏を思ひ出して笑つた

「併し先生の前て其那に笑つちやいやてすよ」と言て又笑ふ

「構はないさなあ、乙彌樣なんか」と野宮が言ふと、伯母さんは眞面目になつて

「爾ぢやありません、乙彌樣なんて言はずに先生と御稱なさいよ、東京へ出ても立派な書家なんてす」

と言ふかと思へば、直ぐ向ふを見て顏を眞赤にしたが、遂と怺へ〳〵た笑ひたさを一度に破裂さした、

乙彌樣は足駄の鼻緒を切らしたので片方を手にぶら提げたまゝ依然片方を片足に穿いて、びつくりがつくりしながら草の上に散亂した本を拾ひ集めて居た。

「片つ方も御脱ぎなさればいゝに」と伯母さんは呟やいて又笑つた。

三人が茸を取てる中に乙彌樣は漸やく本を懷に集め込んで、仍且片足だけ跣足になつて息を切らしながらやつて來た。

「どうしても若い人にや敵ひせんぢや」と木の根の塵を丁寧に吹いて腰を掛け

「御篤樣も隨分と足が早いでごわせんか」と袂から鉈豆煙管と反古紙に包んだ煙草を取出したが燐寸が無いので、きまり惡さうに再び袂に引込まして了つた、伯母さんはふいと顏を反向けた、笑ふまじと怺へて居る事は耳の根まで紅くなつてるので分る。

「隨分御轉婆でせう」と伯母さんが笑を自分の事のやうに紛らして言ふと

「活潑ですな」と乙彌樣は例の疲れたやうな口を弛ました悄と伯母さんを見詰めて居る。

此笑ひの間に野宮は露も滴る春の紫濕地を兩掌に餘るほど取て來た。歸りしなに伯母さんは沈丁花を一枝折て手に提げた、三人の後に就いて乙彌樣は片足駄で仍且跛平蹣平やつて來る、勉が折り／＼振返ると、乙彌樣は伯母さんの後ろ姿を魅入るかの如く見詰めて居る瞳を直ぐ外の方に外らして相變らず暗い顏で俯向勝に重く歩き出す、乙彌樣とは門の外で別れた。

伯母さんが沈丁花を書齋の瓶に挿した時春の香が室の中に漂ふた。

或夜勉が伯母さんの室へ行かうと縁側を拔けて二階の梯子段に掛らうとすると、伯母さんは階子段の中程に腰を掛けて一心に下の座敷の方を見て居る、段の中程は三尺四方ばかりの壁を切拔いた窓のやうなものがあつて、窓の破れ目から座敷の中が見られるやうになつて居る、それは此地方のやうな寒い國に光線取りのためによくある窓である、勉は好奇心に打たれて伯母さんは何をしてるのだらう自分を嚇かす積て隱れてるのではないかとも思つた、其れから此方から嚇かしてやらうと足音を盜んで伯母さんの側に近付くと、伯母さんは目敏くも見付けて、手眞似で以て靜かにしろと合圖のやうな事をする、勉は默つて寄添ふた。

「足音さしてはいけませんよ」と小聲に言て伯母さんは勉の手を握つて自分の膝の上に載せた、其手は燃える程溫かゝつた、近頃は勉も伯母に慣れて手を握られる位は何でもなくなつた、其れでも往來で女學生の一群に出會す場合には何といふ事なしに顏が赤くなる、赤めまいとすればする程益々赤くなる、勉は伯母さん丈けは女でないやうな氣がして居るのだ。

すると野宮の父の怒つた樣な聲で

「其れぢや私は知りせん、御篤の事は貴方方御二人に任せすぢや、今日から妹とも思いせんぢや」といふ、勉は吃驚して息を殺した、すると祖母さんの聲て

「其らほど肝を焦かなくても宜いてせんか、御篤は婚嫁るには婚嫁るのだけども、未だ急がなくとも宜いと思ふはて」といふ

「其れだて私は知りせんと言ふんてす、あれも厭だ、これも厭だつて何時までも爾してる中に貰ひ手がなくなりす」と父は疊みかけて言ふ

「もうこれで今年ばかりて八つも斷はりした」と野宮の母は愚痴らしく言ふ

「其んでもはあ」と大祖母さんが嗄れたやうな聲て「器量だて江戸や松前は知らぬ事、弘前ては評判に高え事だし、學問の方でも今度出來る女學校の教師に頼まれてる位だし、何處といつて惡い點の無えものを、なんぼ何でも乙彌樣のやうな人に呉てやるつて、癩病系や片輪でもあるまいし、青森の師範學校の校長樣や裁判の役人樣まで斷つたのに、其れてはあんまりてせんか、あんまり御篤は猫の子や犬の子や……」と終は泣聲になつて聞えぬ、すると祖母さんの聲て

「まあ宜うごさね、私よつく話をしますて、其れても物の作法ても知る事か、腹の赤え鮒を二三尾持て來て、御前とこの娘を私に呉れせと仲人を立てずに直接に話し込むなんて今の世界では濟むかも知らねえけども昔なら氣狂か亂心者てす、書が上手でも公債證書があつても田があつても位がなければ何になりす」

「位々つて百人首の繪合せおやごせん、貴方方のやうに婆さんになるまで後家て暮らさせるなら其れても宜うがせう、私知りせん、もう御篤の事は御免蒙りす、登美、明日朝早く大鰐さ湯治に行かう」と父はふいと立ちかけたらしい、大祖母さんと祖母さんと野宮の母の宥める聲が混亂に起つた。すると伯母さんは、ふうと長い溜息を吐いて、例の通り兩手を懷に入れて考へて居たが、默つて二階の方へ上つ

て了つた、取殘された勉は恰も惡事の同伴に捨られたやうな氣がして、其儘足音を盜んで家へ歸つた、歸つて今夜の事を考へて見たが、何が何だか薩張り分らない、大人といふものは妙な事で喧嘩をするものだと思ふた丈けであるが、併し其中に伯母さんが嫁に行くといふ問題だといふ事は分つて居る、乙彌樣が伯母さんを貰ふのだらうとも思つた、乙彌樣の嫁にならうがなるまいが、其那事はあの人達が決めるので、大人が決めるのだから惡いやうにはしまい、何れにした處が伯母さんは仍且僕の伯母さんだと勉は恁う思つて只だ自分共の聞くべき事でない事を聞いたのは惡かつたと心に耻ぢた。

一年の大厄日たる定期試驗が來た、無名會は暫らく休止した、勉は何となく學校の課業が厭になつたので、此試驗を氣遣つて居たが其れでも中位で三年級になつた、青木も今度は漸なく及第した、野宮と寺澤は優等であつた、試驗が濟むと暑中休暇に入るので、勉等の翼を伸して遊ぶ季が來た。

弘前で青年共の一年中の愉快な時は七夕の侫武多祭で、町々から侫武多といふ燈籠を舁ぎ出す、燈籠は大抵武者人形で其れは竹を以て骨を造り紙を張て其れを彩色するので、人形の中に幾十となき蠟燭を點す、大きいのになると屋根よりも高く、人形の大きさが人間の二三十倍なのもある、之を舁ぎ廻る人夫は近郷近在より驅り集めて凡そ五六十人も要る、其れ丈けでは面白くない、侫武多と侫武多が衝突する場合に、そこで一場の喧嘩となる、木劍竹鎗を以て戰ひ出す、勝たものは負けたものゝ燈籠を分捕つて多くは燒て了ふ、一年中の優勝の名譽は其町のものとなる、だから祭の時には大抵一人や二人の死者を出す、祭が濟むと昨日の恨を水に流して互に握手する、子供も出れば大人も出る、町の名譽のために六

十餘りの白髪に鉢鐵を當てゝ出るものもある。其頃は鍛冶町と下町の戰が多かつた、鍛冶町は平民を代表し、下町は士族を代表する、如何なる場合にも木劍丈けで刄物を用ひぬのが士族側の矜りて、鎗、薙刀、大太刀何でも構はぬから敵を斬りさへすればいゝとしたのは平民側であつた。

勉は去年も木劍を以て戰ひの先に立たせられたものだが今年は何となく其れが馬鹿〳〵しく思はれた其れでも仍且木劍を振廻して人數の中に加つて居た。

祭も六日目の御終ひの夜、勉は傍と組を拔けて野宮の家へ立寄つた、野宮の家では父と母が野宮の小さい妹二人を連れて溫泉へ行たので、今では伯母さんと野宮と大祖母さんと祖母さんの四人きりとなつた、大祖母さんは祖母さんよりも達者で朝に起きるとから叱言を觸れ廻つて垣根の下に落ちてる杉葉を集めては風呂場へ運んだり、鷄の糞を掻き寄せては肥料の穴へ抛り込んだり、米を搗いてる側からさつさと糠を運んで戸棚の抽出へ入れたり叱言と共に身體を動かすから夕暮になると全く疲れきつて、燈火の付かぬ中から蚊帳を釣らして寢て了ふ、祖母さんはこれは佛のやうな人好して、何でも人にものを與るとが好きだから乞食の類が門に絕へた事がない、これは大祖母さんより意氣地なして、御念佛を唱へる外には居眠しながら糸を紡ぐ丈けである、恁那風だから野宮の家はがらりと淋しくなつた、近頃は靑木も折り〳〵遊びに來るやうになつた。

勉は此夜とう〳〵佞武多を抛し込んで伯母さんと野宮と三人座敷の椽側て、豆枝を噛りながら妖怪談やら豪傑談を語り合つたが、伯母さんは弓張月といふ小說を物語つて與れた、水滸傳と三國志より他に

讀だ事のない勉には其れが非常に面白く感じた、夜が更けて來たといふので伯母さんは饑じからうと握飯を作つて呉れた、野宮と勉は其れをむしや〱やりながら猶ほ伯母さんの靜かな調子で物語る顏に熱心の眼を向けて謹聽した。

「もうこれで止しませう後は明日にして」と伯母さんは切り上げた、雨戸を引いたのは六日の月が既に沈んで了つて、天の河が冷たい風を送る頃であつた。

野宮と勉は並んで其の傍に伯母さんが、三人同じ蚊帳に入つた。

勉は寢やうと思つても眠られない、七つの年に母に別れたので、母の懷の感じとては何にも殘つて居らぬが、若し母と添寢の樂しさといふものがあるならば今夜のやうな心持を言ふのであらうと只だしみ〲とした嬉しさに眼が益々冴へた、伯母さんと一緒に居た事は今まで幾度もあるが、一緒に居るといふ事と、寢るといふ事とは大變な差異である、親しさの度に於て後者は寧ろ極度を超へて居る、勉には其れが嬉しい、自分が伯母さんと母子か姉弟であつて普通の關係ではなくなつたといふ事を自分で確かめたやうな氣がしたのだ。

「伯母さん」と言て見る

「はい」と伯母さんが答へる

「未だ眠らないてすか」と言ふ

「何だか蚊が入つたやうぢやないの」

「いえ、蟵の外で鳴いてるんでせう」

「爾てせうか」

恁な一言二言を交はしてる中に、伯母さんが自分の傍に寢て居るのだといふ事が胸に確かまつて來るので酒にでも醉ふたやうに嬉しく野宮と三人でいつまでも恁う人里離れた處に居たいと思つた。

餘程の遠くで佞武多の喊きが聞へた、其れと野宮の鼾と調子をなして居るので、勉は面白半分に鼾の間隔を計つて見たが、其中に段々引込まれるやうに氣が遠くなつて、うと〳〵と夢に入つた。

ぱつと光明が眼に射し込んだと思ふと同時に自分の頭の上を擦つて過ぎたものがあるので勉は別に驚くといふ程でもないが、半ば驚いて不圖眼を開くと蟵の中は片隅の方からぽうと明るい、其の明りの半ばを遮つてるのは人の身體で、手燭を持た手が眞白い肱と共に横に突き出てある。

「伯母さんだ」と勉は恁う思つて又うと〳〵と眠りかけると、薄い瞼を透して燭の光が閃然と動く、動く度毎にひよいと眼を開く、と見ると雪のやうに白い身體が、搖るゝ光と共に蚊帳の緑を彼方此方へと動き出す。

「おや伯母さんが」と勉は腰から上に何物をも留めぬのに驚いて聲も立てず見て居ると、伯母さんは誰れ憚らず其の美くしい肉の色を惜氣もなく燭に照らして蚊を追ひ蚊を燒く、ふつくりと膨らんだ乳の邊りから仰向き勝に蚊帳の上隅を見詰むる胸と首筋、肩のなだらかに滑つて、一體に圓みを持つた背中から腰の輪廓、勉は只だ美くしさに肝を潰したが、西洋の油繪で見た天女のやうだと思つた、爾思てる

中に眼が堪らなく眠くなつて來る、薄眼をして居る瞼が重石で抑へられるやうに低れて來る、勉は何となくもう少し見て居たい氣もする、半ば懵乎して半ば意識して居る、すると伯母さんは正照に此方を向いた、勉は奇妙に耻かしさを感じて眼を閉つた、閉つても伯母さんの擧動は歴々と浮み出す、天女が蚊帳の緣りの霞の中を泳いで居る、今一度見やうか、其れとも如何しやうかと思てる中と天女も蚊帳も燭の光も凡て朧々に消えて肉體の眠たさが、好奇心を壓して快き眠りに入つた。

眼がさめると既に雨戸が開かれて淸々しい夏の朝日が庭の木立を洩れて靑苔の上に隙間々々の影を落して居る、蟬の聲も聞ゆる餘程遲いのかと慌たゞしく起ると野宮は未だに鼾をかいて居るが、伯母さんの姿が見へぬ、勝手を知てるので台所から盥を持ち出し井戸端で、手水を使つて居ると、突然背後から「わあつ」と言て嚇かしたのは伯母さんであつた。

「御早うござい」と顏を拭き了つて挨拶をすると

「御早う」と輕く言て嫣然して見せる、眼の涼しいのに唇が紅く眞白な齒がちらと見へる朝の天色は瑠璃の如く紺碧で、夏が終らぬ中に天は秋を帶びて居る。

伯母さんは白飛白の單衣を着て淺黄色の帶を締めて居た、足に引掛けて居たのは麻裏の草履であつた。

「貴方の起きるのを待て居たのよ、御城へ行て見やうと思つて」

「御城へ？」と勉は驚いた、日本國中にも昔の城のまゝそつくり一木一枝も伐らずに舊狀を存して居る

のは周圍一里もある弘前の城のみてあるとは勉が屢〻聞いた處で、全く樵夫の手も入れず滅多に人の出入を許さぬので、城の中は荒れたきまゝに荒れて居る、其れでも栗拾ひ、茸取りなどが偶には行くので路丈けは付いて居る、番人小屋もある、女とて行かれぬ事はない、のみならず伯母さんが行かふと言ふのだから無論行かねばならぬ、勉は第一に弱い女を連れて自分が保護者の地位に立て淋しい處を二人で歩く事が嬉しいと思つた。

「行きませう隨分難義てすぞ」と勉は勇んだ。

「歸つてから御飯にしませうね」と伯母さんは、長い胡麻竹の枝を持て來た、蛇が出るといけないからと言たので勉は笑つた。

二人は西の角の壘を超へて中へ入つた、壘を滑り下りると早や深林に入たやうな氣がする、朝日は二三丁も前の木に遮られて、中々此邊までは屆かない、六百年來の松、柏、銀杏なんどが精一ぱいに枝を交はしてるので其れに絡はる籐蔓、藤、蔦などが思ふ存分に蔓つて居るのに下は莢、虎杖、椎柴いろいろなものが地の色も見せぬ、勉は先に立てずんく\歩くと、伯母さんは其帶に握まつて掛聲しながら跟いて來る、一町許も來たと思ふ頃大きな七葉樹の下に出た、此處は少し許りの芝生があつて木立も幾らか薄く、暑からぬ夏の朝日が夜露に濡れた齒朶や石蕗の葉を滑らかに光らして居る、去年誰かゞ此處に息んだと見へて栗の毬がそこら中に散らかつて居る、二人は此處へ息んだ。伯母さんの髪に毬の葉や栗の枯葉などが引掛つて居た、勉は其れを取てやつた。

頭の眞上を栗鼠がきい〳〵啼て過ぐる、山鳥の聲が喩しく聞える、勉は昨夜思ふた如く人里離れた深山に伯母さんと二人で此に居るのだと思ふた、伯母さんは些とも休まず、其處ら中の草の葉を挘つて香を嗅いて見たり、木の實を拾つて直ぐ其れを抛つて見たりして居たが、併し何となく此の淋しき不安に堪えぬといつたやうな眼で四方を警戒して居る。

二人が此處を立た時、朝日に顏を照られた伯母さんはホッと上氣したやうに兩頰を染めて居た、此處から漆の木立があつて其の臙脂のやうな紅葉が眩ゆく照り返すと、勉も伯母さんも顏中が醉ふたやうにほてり渡る。

「私か前になりませう」と伯母さんが言て前へ出た、一々其竹杖で足元を叩いて見て一歩〳〵に進み出す。

「此那處へ夜來たら如何でせう」と伯母さんが歩きながら言ふ。

「其りや淋しごすな」と勉がいふ。

「男でも淋しいの」と問ふ

「夜だつたら淋しいす」と答へながら臆病に思はれやしまいかと思つた。

「爾？其れぢや二人でも」と一寸振返つた

「二人つて」と勉は澁る。

「貴方と私と二人だつたら」といふ拍子に伯母さんはひたと足を止めて慌たゞしく勉の肩に縋り付いた。

「どうしたんです」と勉は不意を喰つて四邊を見た。

「何でせうあの音は」と身を寄添へる。

「鳩です、角櫓に鳩が澤山居りますて」と勉は其儘立て居ると、伯母さんは仍且勉の肩に手を掛たまゝ勉の手を握つて動悸の靜まるのを待つかのやうに見へた。

「行きませう」と勉が動きかけると、伯母さんは、

「待て下さい、もう少し待て」と言たが、此時水を打たれかの樣な烈しい戰慄が出た。

「勉さん私の手をぎゆつと握つて下さい」といふ、勉は其通りにした。

「背中を打て下さい」といふ、

「何處を打つんですか」といふ、

「何處でもいゝから打つて下さい、痛く、痛く骨が折れるやうに」といふ、勉は處構はず打つた。

「これでいゝんですか」

「もう少し此儘にして置て」と伯母さんは失神者の如く倒れかけた、勉は辛うじて其腕に支へた、伯母さんの髮から香水とも付かず香油とも付かぬ一種の香を嗅いだ、これは女の香だと思つた、が、同時に昨夜の事が歴然と眼の前に浮び出た、裸體の女！ 自分の母でもなく友の伯母さんでもない裸體の女といふ考が稻妻の如く閃めいて來た、伯母さんは未だに依然として自分の手を握つて居る、其手は微かに慄えを帶びて居る、勉は俄然として自分は男だ伯母さんは女だといふ事が明らかになつた。

非常な羞耻が犇と胸を打た、勉は顔を眞赤に染めて四邊を見廻した。

「さ行きませう」と低い聲で言て身體を動かすと伯母さんは漸やく手を釋いて

「御免なさよ」と居ずまいを直し、今度は振返もせず、ずん／＼先に立て行く。

伯母さんの後ろに跟いて勉は妙に心苦しく思つた、慾うして二人て歩いてる處を友人に見られしたら困ると思つた。今まて勉は伯母さんは男てあるか女であるかを考へなかつたに相違ない、其れが女であると決まつといふ事は勉の由々しき一大事てある、勉が昨夜眠た眼に見た事は案外精密に頭腦に印まつて居たのてある。

不圖立止まつて伯母さんは例の如く勉の肩の處に攫まる事があると、勉はいつになく顏が赤くなる、赤めまいと努むれば努むる程益々赤くなる、どうしたんだらうと自分でも不思議に思つた。

茂りを出ると豁然と境此に開けて青絨氈の芝生、濠高く水滿々と角櫓が白い影を涵して居る、濠の向ふに牛が五六頭寢ころんだり立たりして居る、番小屋の天窓から眞直な煙がすうと騰つて靆てへら／＼と流れて行く、日の光が限なく照るが、夏の朝は暑くない、背ろの今ま拔けて來た茂みには秋早き百舌、鶺鴒などが囀つて居る、此處へ來ると勉は又今までの茂みの中の考も薄らいて、伯母さんは仍且伯母さんの氣になる、二人は芝の上に坐つた、限りなく碧い空の色を眺めた、伯母さんは唱歌を歌つた、幽かな谺が此の一里四方人の氣もない古城の角々から反される、只だ明るく只た靜かに只だ淸々しい。其れから伯母さんは跣足になつて芝の上を驅け廻つた、次に濠の中へ小石を斜めに走らして何段に水を切れる

かと競爭して見た、其れも疲れた時二人は横になつて話をしたが、何故か勉は口數が少なかつたので伯母さんも拍子拔の體で何か考へ込んで了つた。

　すると西の角の茂みの中からほういと呼ぶ聲がする、二人が今來た路を誰か來るらしい、二人が默つて居ると再びほういと呼ぶ、草深き中に聲が埋れて空虛な城中に妙に響き渡る。段々聲が近づいて來るので、其れは青木だといふ事が分つた。向ふて

「ほうい」と呼ぶ、此方から

「ほうい」と返す、城の中は此の二つの聲丈けて、其れが止むと俄かに淋しい。漸やくにして青木の姿が見えた、が此時は二人が歸りかけた時なので、青木を麾いて大手の御門に路を取た、路は坦々たる昔の大道て、兩側の松杉これも昔のまゝだといふ。

　青木は昨夜徹夜て佞武多に付き廻り、野宮の處へ訪ねたら二人は城の中だと聞いたといふので後を追ふて來たのだと語つて、其れから昨夜の喧嘩の面白かつた事、自分は敵の大人三人許りを撲り伏せた事などを嘘と思はれるのが承知の上て高慢氣に話した、勉は馬鹿々々しい奴だと思つた、併し伯母さんは青木の話よりも其の話し振のいかにも滑稽て、顏中の道具を悉く動かす事に興味を持たらしい、青木が話すと直ぐ笑ひ出す、青木も知遇に感じてか益々乘氣になつて出放題を振廻したが遂と種切れとなつて今度は其頃見世物に來た支那人の口上をやつて、自分の帽子を伯母さんの杖の先に付けて皿廻しを眞似出す、妙に尻を振てよか〳〵飴を踊る、伯母さんが譯なしに笑つて居ると彼は尻を捲つて腹ん這になり

片足を上げて犬の小便する眞似をし出したので、勉は腹立たしさに小石を拾つて投げると、きやん〳〵と仍且犬の啼聲を立てゝ一二間走つたが、何を思つたか、軈て松の木に登り初めた、伯母さんは立止つて笑ひ轉げる許りにして其れを見て居る。

「伯母さん行きせんか」と勉は促がす、伯母さんは默つて青木を見上げて居る、

「伯母さん」と勉は力を籠めて言て「貴方が行かなければ僕は歸りす」といふ、

「まあ見ていらつしやい」と伯母さんが答へる、

「あんなもの見度かありません、伯母さんはあんな素町人のする卑しい事を見度いんですか」と敎圄く、

「何だつて其那に怒るの」と宥めるやうな優しい眼を向ける

「伯母さんは僕と話しをするよりも青木の方がいゝんでせう、僕は歸りす、伯母さんは青木と一緒に御歸りなさいせ」と身を慄はして歩き出すと、伯母さんは驚いた風で

「其那事を言はずに一緒に來たんですから一緒に歸りませうよ、ね勉さん」と肩に手を掛けて顏を覗き込むやうにする、勉は悲しくなつた。

「いや僕は、僕は、青木なんて伯母さん、僕は歸りす」と無理に手を握り切てすた〳〵走り出した、伯母さんが呆氣に取られてる中に青木は計畫齟齬と言た顏付で松の木を下りて來た。

走り出した勉の顏に涙があつた、大手の門を出て左に外濠の端へ差し掛つた頃、伯母さんと青木の門

を出た姿が見えた、勉は態と顏を反向けた、見えないけれども確かに伯母さんは手招きをしたらしく思つた。

　むしやくしやに癪に障つて勉は滌の中へ手當り任せに石を拋り込んで居ると

「雜魚の背中さ當りすぞ」と聲掛けたものがある、振返ると其れは乙彌樣であつた、昔風の觀世綯で作つた韮山形の笠の上から頰冠りをして、釣竿を二本ほど肩に掛け、餌箱や鈎箱やらを腰の廻りに付けて、坐蒲團代りの莫蓙切りを尻のうしろに垂れて居る

「何をして居す」と乙彌樣は尋ねる

「何もして居せん」と勉は身體を捩らした

「ほうい」と伯母さんの呼ぶ聲がする。

「あれ誰か呼んてるのは君ぢやごいせんか」

と言て、乙彌樣は門の方を眺めたが直ぐ默つて了つた。

「ありや野宮の伯母さんてす、僕には用が無いてす」と勉が言て歩き出す、乙彌樣も默つて例の暗い顏をして歩き出した。

「君達はいゝな」と乙彌樣はしみ〳〵として

「十六か十七てせう、若いな、現代の學問はどん〳〵出來るし、昔ものは敵はねえぢや、勉強しせよ、勉強が大事だ」

詰らない事を言ふ人だと勉は思つたが、其言葉の調子のいかにも哀れつぽいのに勉も妙に心を惹かれた。
「乙彌樣近頃野宮へ行きせんか」と何氣なく言ふと
「私は行きせん」と暗く答へて何か考へ込む、
「僕ももう行きせん」と勉が言ふ。
「君もすか」と乙彌樣は仍且力なく言て默て了ふ。裁判所の角の處へ來た。
「左樣なら」と勉が言ふ
「左樣なら」と乙彌樣が言ふ。
二人は兩方へ別れた、勉が振返て見ると、乙彌樣の例の物思はしげな後ろ姿が段々に濠端の草に隱れ行く。
今まで氣が付かなかつたが、此時天は一面に掻曇つて寫眞屋の屋根へ大粒の雨がばら／＼落ちて來ると、彼方此方て干物を取込む女の慌て聲がする、勉は一寸驚いたが、何だか腹がむしやくしやする、走つたり何かするのは面倒臭いので、雨に中つたまゝのこ／＼歩き出す、濡れた頭が馬鹿に暑い、誰れの爲めに雨にまで中るやうな事になつたのかと、當てもないが誰れかを怒つて見たい氣がする。
「いゝ罰だ」と勉は口の中て言て見た、伯母さんも青木も雨に中つて弱つてるだらう、いゝ氣味だと思ひながら自分も仍且顏も胸もびしよ濡れにして歩いて居る

家の前まで來ると生垣の中から叔父さんの新聞を讀んでる聲が聞へる、叔父さんは毎日向ひの家から新聞を借りて來て讀む、只た讀むのでなく叔父さんのは恐らしい大きな聲を立てゝ嚙み付くやうに音讀するのである、社説雜報廣告までも讀み盡し、讀て了ふと折目正しく疊んで

「どうも難有うごすと言て返して來い」と其都度必らず口上を敎へる。

又た讀てるなと思て勉は門を入つた。

「勉か」と待兼ねたやうな聲

「あゝ」と答へると

「一寸此處さ來い」といふ

行て行ると叔父さんは例の通り　兩陛下の石版摺の掛物に供物をした床の間を背にして足の短かい天神机に肱を凭せかけ、勉の坐るのを待て

「何處さ行て居た、昨夜家を明けて今まで何處に行たんだ」と頗ぶる機嫌が惡い。

「野宮の家に居した」と勉は明晰と答へる。

「野宮？どうして其那處へ宿つた」

「遲くなつたて泊りした」

「野宮つてのは馬の糞のよな髮を結てる生意氣な女子のある家だべい、若を者を集めて毎晩惡戯をして居るつて話があるて、貴樣も碌でもない者になつたぢやないか」

「其りや噓です、伯母さんは其那人ぢやごいせん、僕は何にも知りせん」と勉は瞳を光らして熱心に辨解すると、叔父も合點行たらしく

「何も知らねば其れていゝぢや、ぢやが貴様は今ま何歳だと思ふ」

「え？」

「年は幾つだ」

「十七です」と勉は知れきつた事をといふ風に口を尖らす

「十七にもなれば一人前の男でないか、俺あ十七の時にや師匠の代稽古をしたものだ、貴様のやうなものぢやなかつたぢや、小智恵ばかり廻りくさるて、身丈もいつまでも伸びないのぢや、早く大人にならないて如何するか」とぽん〳〵言て

「本ても讀め」と横を向いて新聞を取り上げた、勉は默つて其處を退き、台所から庭へ廻つて、自分の書齋へ登つた、其處は元と物置きてあつたのを其の二階へ古疊を敷き、板壁には新聞を下張りにした上へ叔父が石板摺のナポレオンを買て來てぺたりと張りつけて與れた、天井が低いから窓も少さい、其窓の傍へ勉は机と本箱とを置いてあるのだが、夏になつてから、窓を外して古簾を掛けた。勉の坐る處二疊許りを除いて、あとの四疊は葛籠や古簞笥や鎧櫃其他古屛風などが占領して居る、擊劍道具は勉の背後の柱の上に吊るしてあるが、其の柱がくしの板に勉の自筆て精神一到何事不成と書かれてある。

勉は文章軌範を取出して讀だ、叔父は勉を叱る時に必らず御終いに「本ても讀め」と言ふ、叔父程讀

書を強うる人はあるまい、其れも默讀して居たのでは承知せぬ、何でも大きな聲を出して朗讀するのに限る、勉の聲を聞て叔父は莞爾しながら跛を曳て庭を歩き廻り、時々横鎗を入れて過誤を正す。

勉はやけになつて大聲で讀み出した、二三行讀むと自分で何を讀でるのかわからない、聲は淀みなく出るが、恰ら他人の聲を聞くやうて、心は何處となく他の方に走る、其中聲も疲れて只だ本に眼を置いたまゝ默つて了つた。

「十七にもなれば大人だと叔父さんが言た、學校で十七の者が多いが、其れは一人だつて大人でない、學校へ行てる中は大人にはなられないものだ」と恁う思つて叔父さんの無理を主張して見た。

家へ入ると突如に叔父さんにがんと喰はされたので何が何だか薩張り分らない、泊つたから叱られた泊らなければいゝんだ、と恁う思ふと、今朝からの忌々しさと、青木と伯母さんの顏が眼に浮ぶ、青木は例の卑しい眞似をして伯母さんを吾が物顏に笑はして居る狀も見へる、爾すると急に伯母さん處へ行きたくなつて來た、一體自分が爾那に怒らなくてもいゝ事を何故怒つたのだらうといふ氣にもなる、門の前で手招ぎした時に引返せば宜かつたと弱い心も出る、勉はいろ／＼の妄想を搔き退けるやうに頭を兩手で抑へ、ころりと倒れて、忸と眼を塞ぎ自分で伯母さんといふ觀念を深くしやうと試みたが、不意に伯母さんの姿が眼より離れて了つた、慌てゝ伯母さんの顏は恁ういふ風でと空に描いて見たが、其れが如何しても浮び出せぬ、氣が焦々する程に悶へて顏を想ふてる中に、不圖昨夜の裸體が眼に浮ぶ、勉は胸を打たれて顏を赤めた。不安のやうな蟠りが新らしく心に起つた。

昨夜までの伯母さんと、昨夜以後の伯母さんと別な人のやうに思はれた。

「勉、勉」と、叔父の呼聲に慌たゞしく起きて下へ降りると、來客と見えて話聲がする、行て見ると客といふのは、叔父が四五年前まで役つて居た下男東吉の女房お淺であつた。

「勉」と叔父は二度び呼んで「貴樣一寸行て來い、東吉の馬鹿め、又酒を飲んで夫婦喧嘩を始めたんでお淺が泣て來たて、貴樣行て東吉を說法して來いや」とお淺を顧みて「勉が行けば大丈夫だ、俺の名代だと附言へよ、いゝ年をして飲んだくれて、仕方のない奴だ、勉、大儀だがお淺連れて行て來い」

叔父は一人で決めて一人で饒舌つてる中に勉はもう行くものに決まつて了つた、暗から棒で何が何だか分らない

「何しに行くんです」と訊くと

「馬鹿、いゝ年をして分らないかよ、喧嘩なんかすると聽かないぞと言て來るんだ」

「僕ですか、僕は其那事」

「出來ないといふのか、馬鹿、俺あ足の傷が痛くなけりや貴樣にや賴まないんだが、其位の事は貴樣、馬鹿だな、本當に、貴樣、馬鹿……」

叔父は苛々して馬鹿と貴樣を言ひ續けてる中に、お淺は框から下りて履物を穿きかけた、勉も叔父の權幕に恐れて草履を穿いた

「草履でない下駄を穿け」と叔父が怒鳴る、勉は下駄に穿きかへた。

お淺と一緒に出たもの丶、東吉に會つて何と言ていゝものか分らない、お淺は既に自分を其那事に慣れて居るもの丶如く、東吉の給料――東吉は役場の集金人である――生計の苦しい事、自分の着物が不殘質に入れてある事、給料は皆な酒代になる事、去年の病氣で醫者の藥價が未だに滯つてある事、手桶が毀れても箍屋へ遣る錢もない事などを涙まぢりに話し立てる、お淺も伯母さん位の年だと思つた、併しお淺は飽くまでもお淺て、下男の嬶で、貧乏人て、穢ない顏をして、前垂て眼脂を拭いて往來の日影を歩いてる人種て、伯母さんとは人種が違ふと思つた。

それでも氣の弱い勉はお淺の話を聞て同情の念が起つた、東吉が非常に憎くなつた、何にも言はずに東吉を撲つてやらうかと思つた、そしてお淺が自分を大人扱ひにして、今まで聞いた事のない活計の話だの、亭主に對する不平だのを打明けてくれたのが馬鹿に嬉しかつた。

行て見ると東吉は上り框から轉げ落さうにして腕を枕に寐て居たが、お淺の聲を聞くとむくと起きて

「何しに來たば、早く首でも縊て死て了え」と怒鳴りながら、蹌踉と立上つてお淺を蹴らうとする。

「何處へも行たんてせんぢや、旦那樣に願つて折檻して貰ふべいと思つて御願して來したぢや」とお淺は逃げながらいふ

「何だつて旦那樣どこさ行た」と又打ちかゝるを

「若樣連れて來したに、若樣、此通りてさいね」と猶も逃げ廻る。

「東吉」と勉は大きな聲て呼んだ。

「へい」と東吉は勉を見て、再び忸と眼を据へてる中に膝をぺたんと折て、捲れた前を直し、仍且ぐらくしながら
「勉様ですか、やあどうも面目次第もごいせん」と急に温和になつて、頻りに頭を下げる、勉は拍子抜がした、夫婦喧嘩の仲裁などいふものは非常に難しいものだと思つて居たが案外手數のないのに寧ろ落膽したが、向が恁なに温和に出たので勉も自重心が出た。丁度巡査が馬士を叱るやうな調子で一言二言不心得を諭した、東吉は只だ謝つて居る、お淺も御蔭さまで安心したと御辭儀の百遍もする、勉は得々として此處を出た。
何だか自分が急に大人になつたやうな氣がする、叔父の威光といふ事は毫も思はずに自分の姿を見て平伏した東吉の態度は、どうしても自分が豪くなつたのに恐れて居るからのやうに思はれる、十七にもなつてと先刻叔父に言はれた事が此に始めてわかつた。
「自分は大人だ」恁う呟やいた時に勉は得も言はれぬ自重の喜祝に觸れた。
其翌日から叔父の古傷が猛烈に痛み出した、僅か一日の中に發熱四十度に昇つた、醫師に訊くと此の冬餘りに無理をしたからの事で大した事はなからうといふ、勉は帯をも解かず晝夜介抱した。東吉夫婦も心を盡して看護した。
「若しも叔父が死んだら如何しやう」と勉は看病をしながら恁う思つた。自分の孤兒であるといふ事が痛切に悲しくなつた、今まで叔父が自分を養育してくれた恩が身に沁みて難有くなつた、早く學校を卒

棄して叔父を養はねばならぬと思つた、勉は自分の責任を感じて來た、叔父が眠つてる顏をつく〴〵見ると、元氣なやうでも病には勝てず年には勝てぬ、眼尻の深い皺、ぼうと汗に亂れた胡麻鹽の髮、痩せた頬の髯、力なく開いた乾いた唇から露はに出て居る薄鼠の齒、死の影が暗い洋燈の背ろ邊りに迫つてるかのやう、勉は其れを見て

「今まで御苦勞を掛けて濟みませんでした」と言ひたくなつた。

　此の一種の悲哀は益々勉の自重心を促がした、自分は大人である、自分は世間の中に入つたのだといふ氣が確かになつて來た、其れと共に今まで面白かつたものを見ても毫も面白くなくなつた。

　叔父の病氣は漸々快方に向つた、けれども勉が伯母さんを尋ねる程の暇はない、勉は看病しながらも、ともすると魂が伯母さんの方へ飛んだ。

　或夜の事、叔父さんの許を得て勉は自分の書齋に寐た、書齋に寐るのが久し振である、看病疲れを今夜はぐつすり眠らうと床の中へ入つたが、どういふ譯か怪しく胸が躍つて眠られない。

　窓は西を向いてるので、秋氣冷やかに南下りの月光が斜めに射し込む、勉は月を見ながら眠らうと床を窓近くへ移した。何といふ蟲か壁の隅に來て美くしい聲を顫はして啼き立てる、勉は悲しくなつた、只た自ら涙が落ちる。眼を擧げて見ると机の影本箱の影がいやに扁平に疊に落ちて具足櫃、屛風、道具箱が皆な其れ〴〵に影を作つて居る、室中凡てのものが影を作つて、其れが暗く〳〵と天井の方まで擴がつて行くやう、其の闇の中に金具丈けが怪しく光る、勉は段々に自分も闇に包まれるやうな氣がした、

風ががさ〳〵桐の葉を吹鳴らす、下の物置でぎしり〳〵木の箍破れるやうな音がする、世界は悉く死んで生きてるものは自分一人丈けのやうに思はれる、卒然として勉は淋しくなつた、淋しさは物に怖るゝ淋しさでなく自分が永久に孤獨であると言たやうな淋しさである、勉は洋燈に燈火を付けた、そして再び枕に額を當てゝ考へた、神經が非常に過敏になつて居る。

と、思に耽て居ると、何か暖かい春の風の吹渡つて居るやうな別天地が別にあるやうな氣がし出した。其れは自分の室とは餘程の遠くであるかのやう、勉は其れを模索した。

遠くに索めたものは足元であつた、毎夜思ひ出さずには居なかつた伯母さんの事を、今夜は如何してか忘れて居た。此の静かな室で今夜は充分に伯母さんの事を思ふて寐やう、恁う思つて勉は小聲で「伯母さん、伯母さん」と呼て見た、いつか一緒に寐た時は伯母さんの美くしい唇から出る呼吸を自分も呼吸したのであつた、伯母さんの手が自分の肩に掛つたのは城の中であつた、あの時自分は何故何んにも言はなかつたのか、恁う思つた時勉には最早、母としての伯母さんと女性としての伯母さんとの區別が無くなつた、只だ伯母さんが戀しい。

何故恁那に戀しいのだらうかと、自分に問ふと見た、何故だか分らない、いつの間にか爾なつたのだ勉は突然起きて半紙と筆と硯とを寄せた、枕に胸を付けながら俯伏になつて書き初めた「敬愛する伯母さんよ」と書いて破つた、「篤子さんよ」と直して見たが敬愛の二字が何だか他所〳〵しく思はれた。

幾度も書損ねて、とう〳〵冒頭の修飾を無しにして思ふた丈けを其儘書かうと決心した、筆を取て見る

と案外書きよい、書いて行く中に次第に胸の鼓動が靜まる、其代りに顔が熱して眼が輝き初める、感情が感情を嵩め、筆が筆に熱を加えて、勉は只だ夢を辿るが如く十五六枚の半紙を盡くした。

筆を擱いて吻と息を吐くと、非常に氣持がいゝ、今まで溜りに溜つた胸の濃霧を一度に散らして了つたやう。其れを封筒に入れ向の宛名を書いて轉りと横になつたが、考へて見ると自分ながら大膽極まる所爲のやうで、妙に氣も引けて來るが、併し勉は今まで覺へのない快さを感じた、其中に未だ書き足らぬ處があると思つて封筒を破つて讀み返したが讀て見ると是れて充分のやうにも思はれるので、再び新らしい封筒に入れ、直ぐ郵便に出さうかと思つたが、流石に其れまでの勇氣もなく机の抽出に藏ひ込んで、ゆつたりした心持になつて枕に就いた、

此の手紙を伯母さんが見たら驚くだらうかと思つた、どんな心持で自分を見るだらうと思つた、返書はどんなであらうと思つた、若し伯母さんが怒て引裂いて了つたらどうしやうと思つた、其時は自分は此地に居なくなる丈けだと決心する、母になつてくれ姉になつてくれと書た丈けで何も怒る事はあるまいと辨解して見た、同時に自分の意味は其れ丈けではないのだといふ事に氣が付いて心中に耻ぢた。

手紙は抽出の中にある、いや郵便函の中にある、手紙は配達夫の手に依て配達される、配達の途中にある、伯母さんが受取らんとして居る、明日の今頃は返事を書いて居る、どんな顏で、どんな態をして、どんなにあの美くしい髮を灯に照らして、考へる時には例の手を内懷にして自分の乳の處を弄りながら、伯母さんは其れとも知らず今夜はもう寢たてあらうか。

勉は大膽にも今まで考へた事のない事まで想像もし回顧もするやうになつた。

翌朝起きて見ると、勇氣が大分挫けて手紙を投函するまでには至らなかつた、併し其夜も亦た長い手紙を書いて、昨夜と同じ思を辿つた、其翌日も翌々日も。

斯くて勉の抽出に手紙が大分溜つた、叔父さんの病氣も略々癒つた、勉は伯母さんを訪ねる暇が出來た、けれども訪ねる事は何となく臆劫になつて一日二日と延びる間に叔父さんは嶽の溫泉へ湯治に行くから一緒に來いと言はれた、勉は是非行かねばならぬ。

嶽から勉は野宮其他へ葉書を出した、野宮からの見舞狀も來たが伯母さんの事は何にも書いてなかつた。

叔父は病後滅切り元氣が弱つて、急に十歲も年を增たやうに見へた、夏は何時しか去て本當の秋も半ばとなつた、此土地では夏の終りが即ち秋の半ばで、爾かと思ふと冬が直ぐに來る、天氣のいゝ時には叔父の手を曳いて溫泉場によくある木通蔓細工や、ニギヤウと言ふ木を轆轤挽にする細工を見に歩く、叔父は勉に手を曳かれて歩く事を大變に喜んで居た。夕方になると勉は一人で散歩に出る。此土地は朝夕特に霧が深い、土地の人は其れをガスと呼んで居る、其れから閑古鳥が終日啼て勉には何となく旅といふ感じを深からしめた、勉は裏山に登つて溫泉の煙に籠められた小さき村を見下したり、鳥居丈けで御堂もない森の中へ入つて極樂のやうに明るい紅葉の下で、人寰と隔つた物の音響を聞いたりする事が樂であつた、宿へ歸ると叔父は淋しさうに自分を待て居る、或る夕方例の如くに歸ると、叔父は茫然

流れ行く雲を瞶めて居たが、勉の顏を見て恰も珍客でも來たかのやうに
「おう歸つて來たか」と非常に喜んで
「勉、出來る事なら俺の側から餘り離れないやうにして吳ろぢや」と體裁惡さうに忸怩して言ふ。
「叔父さんは獨りて居る事が淋しいのだ」と勉は恁う思つて其れから何につけても「叔父さんは可哀想だ」と思ふやうになつた。
其後は叔父は傷が痛んだり、癒つたり只だ愚圖々々して居るので、勉は弘前へ歸る事も出來なくなつた、時には
「なあに一人て居れば一人て居るやうに如何とかなるて、貴樣心配しないて學校さ行けよう」と言ふ事もあるが、勉ばかりを力にして居る事が其の附け元氣の中にも歷々と知れてるので、勉は
「學校なんか半年やそこら休んても大丈夫だす、其れよか叔父さんが氣を惴らないて養生して吳せ」といふと、叔父の眼中には旣に見せまじとしても濕ひ來る淚が見える、いつもなら
「馬鹿ッ、學校を休むといふ法があるか」と怒鳴るのだが、其の勢もなく
「爾か、落第さへしなければいゝがな」と言て、如何にも氣の毒さうに俯目になる。
「なあに大丈夫てす」と言て勉はつく〳〵自分の大人らしくなつたのに自分で感心した。
折り〳〵夜中に眼覺めて叔父の鼾を聞きながら
「あゝ叔父は自分丈けを便りにして居るんだな、自分が今まで世話になつたから、これから叔父を世話

しなけりやならん」と恁う思ふと、得も知れぬ勇氣が湧き立つ、自分はもう世間といふものに足を踏み出したのだと妙な嬉しさに微笑まれる

其中に岩木山の麓は寒さが早い、葱畑の霜に獸の足跡を見るやうになれば、村中は炭俵などを繋ぎ合せた雪圍の垂れを作るやら、炭竈の木を伐る雪舟を作り出すやらで、急に冬めき出すと、枯木林を搖ぶる風が是れから半年間雪の穴に籠る村人の心を淋しがらせる。

此處へ來てから勉は伯母さんへ三四度の葉書を出した、長い手紙は弘前の家の机に藏ひ込んだまゝで勉は葉書を書く度に彼の手紙を思ひ出した、此方へ來る時にあれを投函して來れば宜かつた抔と思つた、併し今更らあんな長い手紙を書く氣にもなれぬ、叔父の病の爲めに其の方の事が氣を挫かれた。寺澤から一通の葉書があつた。

「何時頃歸るか、歸らるゝなら早く歸つて呉れ、叔父さんによろしく」と只だこれ丈けてある、無性な奴だなと勉は笑つて、友の岩疊な男らしい顋鬚の濃い顏を思ひ出した、次て其の無遠慮な大きな笑聲も思ひ出した、遠く離れて見ると懷かしさは野宮よりも寺澤であつた。

其中に十二月に入ると雪が次第に深くなつた、叔父は

「もう歸らうか」と言ひ出してから二三日になる、此日二通の葉書が勉の手に入つた、一通は寺澤て一通は伯母さんてある、勉は伯母さんのをちらりと見流して懷に入れ、先づ寺澤のを讀だ。

「天柱摧け地維折る、女媧五色の石を煉りて鼇の足を斷つ、青木海中に入りて蛤となる、委細後便」

勉は呆氣に取られて苦笑した、次に伯母さんのを取出して見る、やさしき文字で細々と叔父の病狀を問ひ、自分が病氣で御無沙汰をしたといふ詫び言を書いた丈けであつた。

勉は急に歸りたくなつた。其夜叔父が再び歸らうと言ひ出したので、勉も同意した。

城下も早や雪深き町となつて居た、秋の初めに此處を出た勉は、餘りに其の時の推移の早いのに驚いた。留守番にして置いた東吉夫婦は且つ驚き且つ喜て迎へた。明日は伯母さんを訪ねやう、伯母さんは吃驚して喜ぶだらう、恁う思て其夜は熟睡した。

翌日勉は寺澤に起された、寺澤は早くも勉の歸弘を知たのであつた。

食事を濟まして書齋に入た、書齋は東吉夫婦が奇麗に片付けてあつたので居心が好い、机は西の窓から移して東の窓の下へ置かれてあつた、西窓は雪圍の板で暗くなつたが、東は雪の上を晴れ渡つた朝日の光が射返して障子の紙がピリ〳〵する程明るい。寺澤は其處で火鉢に凭れて待て居た。

手織縞の黑い羽織を着て、首に鼠色の綿フラネルの首卷をして居る、これは勉も同じ事だ、寺澤は稽古着を下に着てるので道場の歸りだといふ事がわかつた。先づ友人の動靜から、誰と誰との喧嘩は如何であつたといふ事から、教師の噂までして、寺澤は其の肉付のいゝ肩を揺り上げ

「處ろで君、君に相談があるのだが」と改まつて言ふ

「何だ」と勉が笑て言ふ、寺澤は何時でも恁那事を言て人を擔ぐのが上手である。

「眞面目な話だ、聞いて呉れろ、君どうか野宮の處へ行かないやうにして呉れろ、いゝか」

「どうしてさ」と勉は未だ笑て居る
「僕の手紙を見たか」と寺澤は眞面目だ
「うむ見た、十八史略だらう」
「ハヽヽ」と寺澤は高く笑つて「爾だ、青木海中に入て了つたぞ」と眞面目に復る
「青木がどうした」
「伯母さんが青木を誘惑しだぢや」
勉は腑に落ちぬので默つて寺澤の顏を見た
「あの女太い奴だな、青木を引張り込んだ」
「其那事があるものか」と勉は一度に赫と逆上して言た
「あるぢや、大いにあるぢや」と寺澤は火箸で火鉢の椽を叩きながら身體を搖ぶる
「あるものか」と勉が再び言ふ顏を見下すやうにして寺澤は默つて居る、勉も霎時默つた、此時自分の胸が動悸して居るのに氣が付いた。
「あるて言ふのぢや」
「一寸默つて呉れる」と勉は忸と自分の驚かされた頭腦を纏めにかゝると、只だぼうとして端緒が着かない、寺澤は構はず言い續けた、其れは伯母さんから青木へ送つた手紙を青木の母が見付け出し、青木に詰問したけれども實を吐かないといふので、青木の母が寺澤に賴んだ事、寺澤は青木を責め付けたら

白狀に及んだ事、抑々の初めは御城へ行た其の夜である事、其れから十一月まで密會を續けて居たが伯母さんから二人の關係を今日限りにして呉れと申渡された事、靑木の母は靑木を退校さして靑森の師範學校へやつた事、年上の女が子供のやうなものと關係するといふのは女の方から仕掛けたものだと靑木の母が言てる事を順序よく話して

「これは全く女の方から引張つたのだ」と寺澤は斷言した。

確たる證據を擧げらるれば一言もあらう筈がない、併し勉は半信半疑てある、

「爾那馬鹿な事は斷じて無い」と言た

「剛情だな君は」と寺澤が呆れた

「ある筈がないぢや、其れも大人なら兎も角あんな素町人の卑劣な奴の飴賣の眞似なんかする奴と私通くなんて」恁う言ひ掛けて勉は胸が燃え立つ程靑木が憎くなつた

「飴賣のやうな奴だて、伯母さんが私通いたんぢや、僕や君のやうな英雄には私通かんぢや、併し伯母さんは君に惚れてたんだぞ」

「馬鹿な事を」と勉は眞赤になつた、自分にどう恁うといふ事實よりも、惚れるとか何とかいふ言葉は町人などの用ひる言葉で非常に猥褻な言葉だと思つてるからてある

「君が武士の體面を保つてるて、靑木の方にしたのぢや」

「もう止めて呉れろ其那話」と勉はむしやくしやして言ふ

「止められないぢや、君は野宮家へ足を絶つと契約したら止めるさ」と落着き拂つて居る
「其那必要がないぢや」と勉は絶えず俯目になつて居る
「行たら引張られるぞ」と寺澤は益々眞面目になつた
「もう聞きたくないぢや」と勉は頭を垂れながら手を以て空中を推しやるやうにする
「君は恪氣を燒いてるぢやな」と寺澤は摺り寄る、勉ははつと胸を打たれて
「何を失敬な事を君は」と力味返る
「何でもいゝぢや」と寺澤はコツ／＼火箸を以て自分の膝を突きながら
「野宮の家へ行く事許さんぞ」と聲を勵まして言ひ放つた。
「何を」と勉は初めて正面になつて顏を上げた
「行かうと行くまいと勝手ぢや、寺澤、一體吾れ／＼の團體はこれまで女の話などするものは一人も無かつたぢや、君が來てから妙な猥褻な風が吹て來た、君が惡いのぢや、伯母さんの事だつて、伯母さんの事だつて」とこれまで一氣に言ひ下したが、もう呼吸が塞つて怪しく涙が催される
「伯母さんの事だつて、伯母さんは決して其那人ぢやないぢや、僕は首を斬られても辭言ふ伯母さんは其那人ぢやない、君は妙な眼で伯母さんを見て、人を讒誣するにも程があるぢやないか」ともう後は言へなくなつた、寺澤は大人のやうに吐息を吐いて
「君は伯母さんに誑されてる、伯母さんに惚れてる」と小さな聲で言つた。

「何でもいゝぢや」と勉は苛氣味て言ふ
「宜くない、僕が許さん」と寺澤は俄かに一喝した
「君が人を讒誣するのは君こそ伯母さんに心があるのだ」
「失敬な事を」と寺澤は眞赤になつた
「僕は證據を持てる、讒誣てない」
「いや讒誣だ、實に卑劣極まる」
「卑劣とは君の事だ」と寺澤は威丈高になつた
「もの言つたて詰らない一つ戰らう」と勉は甲斐〲しく言つた。
「喧嘩か」と寺澤は考へて「よし戰らう」と言ひ切た、二人ともに頭が極點に熱して居る、場所は御城の大手の御門前、時刻は夜の九時と決めた。
寺澤が歸ると勉は虛然して火鉢の傍に横になつた、寺澤の顏、伯母さんの顏、青木の顏其れ等が眼前の濃霧の中に出沒隱見して、胸は只だ煮え湯の泡立つやう、右を向いても左を向いても身體の置き所がない、其中いつの間にか眠つて了つた。
眼が覺めると火鉢の火が未だ殘つて居る、ものゝ三十分は眠りはしまいと思つた、つくねんとして一人て考へて見ると三十分前の光景が大過去の如く想ひ出される、頭も平素のやうに靜まつて居る、
「今夜は決鬪に行くのだ」恁う思つて勉は壁上の木劍を見上げた、忌々しさが胸を衝て騰る、

「伯母さんが青木と、あんな奴と」と呟やいて、心の底から情けないと言たやうな絶望の悲哀を感じた。
「併し伯母さんに限つて其那事は」と言て見たが、其れが中途でふいと消へて了ふ、勉は口惜しさうに唇を噛んだ
「僕は寺澤を欺いた、寺澤に向つて斷言した程伯母さんを信じては居なかつたのだ」と初めて此に氣が付いた。
「青木のやうな卑劣な奴と」と再び考が其れに復る
「或は噓だらう」とも思ひ返した「併し寺澤は失敬だから決闘は當然だ」と理由を付けて見る。
「だから伯母さんが手紙も呉れないのだ」と思つた時、自分の前の机の抽出に思を籠めた手紙の入つてある事を思出しそれを取出して火鉢の中にぐつと突込んだ。弱い火は黒い煙を立てゝ紙の燒ける匂が室に漲つた。
「僕は寺澤を欺いた」と恁う思つた時、勉は先刻寺澤が歸つた時、垢に穢れた首卷の上に埃だらけの髮を延ばした頭を掉て見て、何んにも言はずに梯子段を下りて言た其の後ろ姿を想ひ出して、はら〳〵と涙が滴れた。
叔父の用向で忙がしかつたので勉は暫らく忘れて居たが夕飯が濟むと、早や決闘の事が氣になり出した、九時といふ時刻は早いやうで遲い、待て居る間の心配を紛らす爲めに東吉夫婦と世間話をした。
叔父は早くから寢て了つた、勉は八時の鐘を聞いて家を出た、木劍には鍔を付けて、手拭を袴の紐に

括り付けた、これは負傷した時の繃帶の爲めである、下駄を穿かふと思つたが下駄は大きな雪の瘤が底に出來てるので地べたに粘着て居た、引剝がして瘤を叩くと其音に叔父が眼を覺ます恐があるので、低い齒の足駄にした、下駄は雪に滑るが足駄は滑らない。

家を出ると町中は未だ寢て居らぬが、凩が吹くので、店は皆鎖した、屋根の雪が深く蔽さつてる軒の下の隙間〳〵から睦まじさうな灯が漏れる、冬の月は曇りもなく澄み渡つて鼻を殺ぐやうな風が唸つて過ぎる、雪は最早三尺も高い、風に吹き堅められたのか、足駄の齒が雪に軋つてきゆつ〳〵と寒い音がする、途中で風呂歸りと見ゆる御婆さんと小さい女の子が行くのを追ひ越した、御婆さんも女の子も酸漿のやうに頭巾に顏を包んで、女の子は柄のついた提灯を持て、御婆さんは、棒鱈のやうに堅く凍つた手拭を袖の下から提げて居た。

角を曲がつて濠端へ出ると、月は正射に對岸の松を照らす、氷が一面に張り詰めて、其上に雪が積んでるので、枯芦の穗が二三寸丈け僅かに見へる、裁判所の構內で火の用心の柏子木が聞へた、右を見ると行當りの大通りの軒の燈がぼうと明るく雪路を照らして大通り丈けに人の氣のないのが寒く淋しい、勉は左へ曲がつて濠端に沿ふて行く、ばさり〳〵と松の雪が思ひ出したやうに落る音が聞ゆる、すると下の方でキヽヽと水鳥の犇めく聲がする。

「寺澤は待てるだらうか」と思つた「何だつて決鬪をするやうになつたのだらう」とも思つた、從つて決鬪は實に沒理らないと思つた併し此の場合になつて中止する事は斷じて出來ぬと覺悟を極めた。

勉は弱蟲だ、決闘に勝た例がない、口に豪さうな事を言ふが其癖臆病だ、年から言ても二つ下で、體格から言ても寺澤は岩疊で勉は矮小だ、勝敗は既に定まつて居る、

寺澤の言ふ處が道理にした處で、併し決闘は寺澤に勝ちたい、勝て謝らしてやりたい、勉は只だ其れ一心になつて居る、此の場合になると、伯母さんの事は伯母さんの事だ、決闘は決闘だ、全然問題が別になつて居るのだ。

九時の鐘が鳴つた、勉は何となく身體が慄へた、大手の門には未だ寺澤の姿が見へない、

「來たら一つ正眼で行かうか」と木劍を構へて見た、何となく足が地を離れるやうで胸が波を打つ、櫻門の横合から高く枝を差し出して居る老松がある、枝には大きな雪の塊が撐へられて居る、勉は其れを見て、雪礫を一つ作り

「若し此の礫があの塊に當つて、うまく落ちたら今夜の決闘に勝つのだ、當らなければ負けだ」と心に決めて礫を投げた、礫は松の枝の下を潜つて、門の扉に當つた、更らに一つを投げ二つを投げたが皆な外れた、なに其那占いが當てになるものかと自分で取消した、何となく不安である、勉は木劍を持て、大門の扉に付いて居る乳のやうな形のした大きな鋲を打つた、鋲は赤く銹びて板も朽つて居るので、ぽきりと抜けてから／＼と敷石の上に落ちた、勉はこれで緣起を直した。

寺澤は未だ來ぬ、大きな聲を立てゝ詩吟をした、聲は僅かに門に響く丈けて、寒さは反響を送らぬ、すると向ふから幽かに詩吟の聲がする、自分の反響ではない寺澤の聲だと思つた時、勉はぞくりとした、

が再び聲を大きくして吟した。

近づいたのは如何にも寺澤であつた。

「高橋か」と聲を掛ける

「寺澤待て居た」と勉は身構へる

「決鬪は止めやう」と寺澤は段々近く歩いて來る

「止めるもんか」と勉が言ふ、寺澤は默つて居たが、決然と

「さあ來い」と木劍を身構へた。

「さあ來い」と勉も身構へた、勉は擊劍で小手を取るのが得意であつた。

勉は一氣に逸つて滅茶〳〵に打ち掛つた、寺澤は勉の木劍を横から鍔際の處をしたゝかに打つた、寒に凍へた手が感覺を失つて木劍が雪の中に落ちた、同時に勉は足駄の鼻緒が切れて前のめりに倒れた。

眞向確かにやられたと觀念した、起上つて見ると寺澤は居ない、と見ると二三間先をずん〳〵歩いてるのは爾だ。

「寺澤」と呼んても默つて行て了ふ、

「寺澤」と夢中に驅け付けて、肩に手を掛け

「何故撲らないか、相手にならないと思つて僕を馬鹿にするのか、さあ撲れ、撲つて呉れろ」と勉は寺澤の前に立塞がつた

「まあいゝ」と寺澤は勉を推し除けて行かふとする

「よくはないぢや、負けたて撲られるんだ、さ撲れ」と又引戻す

「君は學問は出來るが馬鹿な奴だな」と言て寺澤は逸散に驅け出した。

「撲れ〳〵、寺澤」と勉は半狂亂になつて追驅けたが、暫らく立止まつて、すた〳〵と引返し、落ちた木劍を拾ふて雪の上にむづと坐つたが、さあ口惜しくて堪らない。

「寺澤の奴、撲りもしないで豪さうな面をして、御情けて免してやつたといふやうな風をして、俺の度量を見たかといふやうに氣取りやがつて、畜生、人を馬鹿にするにも程がある」と勉は頻りに劫を煮やし立てたが、相手が無いので氣草臥がする、仕方なしに起上つて足駄を拾ふと鼻緒が切れて居る、勉は足駄を濠の中へ抛り込み跣足のまゝで驅け出した。

其夜は一夜まんぢりともしなかつた。翌日は頭が重いと言て一日寢て居たが、夕方になつて、ふいと家を出た。

西風が恐ろしい唸り聲をして針の粉のやうに細い吹雪が顏となく襟元となく刺すやうに鋭どい、勉は野宮の門を入いた。

野宮は驚き喜んで迎へたが勉が默つて居るので變な顏をして自分の書齋へ通れとも言はずに立たまゝ勉を見詰めて居る。

「伯母さんは」と勉は低い聲で言ふ、聲は奇妙に嗄れて居た。

「二階だ」と野宮は勉の顔から足元まで見上げ見下ろした。勉はずん〳〵奥へ行く、二階を上つて襖を開けると、室からほんのりと炭の香が暖く顔に觸れた、と見ると洋燈は心を充分にホヤが割れる許りに火を大きくして机にぐつたりと臂を凭せ、伯母さんは半眠半醒の體で居る、勉の入つた時靜に眼を開いたやうであつたが、直ぐ復た眼を塞いで了つた。

「伯母さん」と勉は火鉢の前に坐つた。自分が久し振で來たのだから伯母さんは屹度嬉しさうに自分を款待すだらうと思つて居たのが豫期が外れたので、何だか馬鹿にされてるやうな氣がする、呼ばれた伯母さんは直ぐ明晰した聲で

「はい」と答へた、勉には其れがいかにも他人扱ひのやうで癪に障つた。

「どうかしたのですか」と中腹でいふと

「いゝえ」と初めて机から離れて「久し振でしたね」と今更のやうに改まつていふ

「伯母さん久し振です、御城で別れた限です、もう四月にもなります、僕は伯母さんに會ひたいと思つて居たけれども會はれなかつたのです」恁う言て勉は譯なく悲しくなつた。

「どうしたの」と伯母さんは勉が頭を低れて了つたのを怪んで問ふた。

「伯母さんに聞きたい事がありす、僕は昨夜寺澤と喧嘩をせした、僕は負けした、伯母さんは青木と」

と言ひ掛けた時伯母の眼がちらと自分の顔に輝やいたので、次の句が口の中へ引込んで了つた。

「本當ですか伯母さん、僕は其れを聞きに來した」

「何を」と伯母さんは洋燈の心を一寸下げて見る
「今の其れがです、青木との事が」
「青木と？どうしたの？」
勉はつと赤くなつた、どういふ譯が其の後は言へぬ
「寺澤が爾言ひました、青木は伯母さんの爲めに弘前に居られなくなつたつて、寺澤が嘘を吐いたのなら僕はもう一度喧嘩をします、本當の事を聞かして呉せ」
「貴方決闘をしたの」と伯母さんは白い手を出し、灰均で灰を掻く、
「僕は負けした、い」と勉は仍且低首れて居る
「私、何も寺澤さんに言はれるやうな事がありません」といふ伯母さんの聲は弱かつた。
「本當ですか」と勉は勢を得たが、餘りに弱々しい伯母さんの態度を見て
「本當ならいゝんだがな、本當なら實際いゝなあ」と獨語のやうに言て再び熱心に
「伯母さん、本當なら僕はも一度寺澤の處へ行きす、伯母さんも一緒に來て呉せんか、其れて寺澤が謝まつたら僕は免してやりす、どうです伯母さん」
伯母さんは默て居る。勉は妙に疑を生じた。
「どうか一緒に來て呉せ、伯母さん、え伯母さん」
伯母さんは仍且默つて居る

「其れぢや伯母さんの言た事は本當てないんですか、伯母さん何とか言て下さい」
伯母さんの顏は見る〳〵深く襟に埋まつた、ぽうと紅らんだ頰は火鉢の火からも照られて居る、勉はもう氣が苛々して來た。
「分りした伯母さん」と勉は毌と伯母さんの方を見た。
「寺澤の言た事は本當だつた」恁う言て見て伯母さんが何か言ふだらうと待て見た、併し伯母さんは默つて居る。よしんば伯母さんと青木との關係が事實であるにした處で、勉は伯母さんの口から
「其れは嘘てある」と言て貰いたかつた、
「何ぼ何ても青木のやうな奴と、伯母さん酷いぢやごいせんか。僕は伯母さんを死だ御母さんのやうに思て、今まで一日だつて忘れた事はごいせんのに、伯母さんは僕の事を、僕の事を……」ともう胸が迫つて何にも言へなくなつた。
「勉さん」と伯母さんは突然火鉢を退けて、毌と勉の手を握つた
「勉さん、勘忍して下さい」とばたりと疊に俯伏になつて、幽かに〳〵歔欷したが、肩の波が次第に高まると、遂と聲を擧げて泣いた。勉は何にも言へなくなつた、默つて泣聲を聞いてる中に、あゝ惡い事をしたと思つた伯母さんを泣かせて濟まないと思つた、非常に勿體ないといふ氣と非常に可哀さうだといふ氣が混同になつて、其聲を聞く度に自分も泣きたいやうな氣がした、昨夜終夜あんな恨みこんな不滿を言はうと思つた事も何にも言へなくなつた。

「伯母さん〳〵」と言て見た、伯母は猶も泣いて居る

「伯母さん」と勉は大膽に伯母さんの肩に手を掛けた、此時の勉の心持は只だ何といふ事なしに伯母さんに對する同情のみを以て充たされた、一切を忘れて伯母さんばかりとなつた、泣いてる伯母さんをどうかして慰めたいと思つた。

「伯母さん御免なさい、僕が惡うごいした」

恁う言て勉は長い息を吐いた。

「いゝえ私が惡いんです、私はもう生きては居られません私は……」

と伯母さんは益々泣き入る。其の傷はしい姿を見て勉は亢然と獨り高きに立つ者が人を憐れむが如き自我の矜りを覺へた。今まで母として狎へて居た人に對するが如くでなく、我が足元に身を投げ出して罪を乞へるものに對するが如き心持にもなつた。

「勉さん」と伯母さんは再び勉の手を握つた

「私もう貴方に御目に掛りません」と今度は顏を上げて、指を以て鬢を搔き上げた、眼は既に目に立つ程腫れて居た。

「伯母さん死ぬのぢやごいせんか」と言て自分ながら言葉の調子の子供らしいのに氣が付いて耻かしくなつた。

「いゝえ」と伯母さんは僅かに笑つた。

「僕もう伯母さん處へは來せん」と勉も言つた。

泣いた顏を家族に見られるのが可厭だからと伯母さんは二階を下りない、勉は一人で門を出た。吹雪は止んで居た、濠の松並木も、人家の門も塀も物といふ物の凡ての西向きの方が吹雪に吹きつけられて雪を被て居る、懷手して、自分の足駄の雪に軋る音を聞きながら、歩くともなく阪を上りきる。

「僕は何の爲めに伯母さんの處へ來たのだらう」俄然として恁う思つた、自分は忠告に來たのでもなければ、又た事の眞否を確めるが爲でもない、單に伯母さんの惡事を訐いて責め立てたに過ぎなかつた。

「僕は伯母さんを窘めた丈けだ」恁う考へると只だ伯母さんに濟まないといふ氣が充滿になる。

大手の門の前を過ぎた時、昨夜の事を想ひ出した、自分の捨てた足駄はあの邊だらうと思ふと可笑しくも馬鹿〳〵しい、其中に夏の事を想ひ出す、乙彌樣の事も想ひ出す、聯想が聯想を生じて果てしなくなつた、卒然として省みると、「伯母さんは何時の間にか自分のものでは無くなつて居る」、勉は淋しい思に打たれた。

自分は今まで何をして居たのだらう、伯母さんは既に他のものとなつた以上は自分は是れから終生孤獨で暮らさねばならぬ、伯母さんは何故這那情けない事をしたのだらう、恁ういふ愚痴も出る、叔父は何時死ぬかも分らぬ人だ、伯母さんはあの通りだ。

勉は得も言はれぬ不安に驅られた、何といふ事はない只だ氣が狂ひさう。

不圖氣が付くと自分は何時の間にか、再び野宮の門前に立て居た、外からも見ゆる伯母さんの室は未

だに燈火があか〳〵と點して、其れがぼんやりと雪に包まれた庭木を照らして居る。

「伯母さんは未だ寢ずに居る」と恁う思つた、今までの事が歷然と眼に浮ぶ、伯母さんは未だに泣いてるだらう、氣の毒な思が胸を衝て來る。と、窓がすうと開いて伯母さんの姿が現はれた、雨戸を引く爲めてあらう、戸袋に手を掛けて此方を見た、顏は灯に背けて居るので好く見へぬ、と、伯母さんは身を飜して洋燈を手に持て外の方を透し見た、顏は薄紅く特に美くしい、氣が付いたのだらうと勉はひたと塀に寄り添ふた、すると伯母さんは其儘室へ引込んだ、楷子段を下りる音が靜かに聞へる、ぎいと戸を開く音がする、軈てから〳〵と氷を走る足音がして

「勉さんぢやないの」と驅けて來た容子、勉は慌たゞしく阪の方へ走つた、門を開く音もしたので勉は振返つて見た。

「勉さん一寸」と言ひながら道の眞中に立てる伯母さんの姿が雪明りに見へた。次に振返つた時には何にも見へなかつた。

「何の爲めに逃げたのだらう」と思つた、阪を上ると招魂社の横手、境內に入つて下を見下した、此處からいつも伯母さんの室が見下ろされるのだ、町々は既に死せるが如く眠つて居る、寒さうな月が一つ屋根の低い雪の人家を淋しく照らして居る、伯母さんの窓から漏るゝ灯も見えなかつた、伯母さんは床に入つたてあらう。

「どうか心を靜かに御寢みなさい」と勉は遙かに目禮した。

翌日から勉は學校へ出た、過日の恨を忘れて寺澤に逢ひたかつた、寺澤は缺席した、其翌日も翌々日も。五六日過ぎて寺澤から一通の手紙が來た、披いて見ると過日の謝罪などあつて、終りに

「學校を卒業するといふ事は飯が食へるといふ事を意味せず、吾れは今日坑夫となりて小阪に旅立つ、兄が此書を手にする時には吾れは碇が關の湯の煙を雪の中に見んか、或は矢立峠の吹雪を突進しつゝあらん、兄は感情的なり故に學問に適せん、吾れは鈍才なり空想の素養を要せむ、さらば是れより五尺の肉體を生みの母に捧げん、母は元との寓にあり兄が時々の訪問を多とせん、去るに臨みて此事を囑す

明治廿四年冬十二月」

讀み了つて勉は涙を流した。

此の一年間は實に多事であつたと回顧した、此回顧からして勉はもう全く大人になつたと思つた。伯母さんと靑木との風評が世間に立た、叔父は野宮家へ行く事を嚴禁した。無名會は解散となつた、勉は只だ學校の課業に勉强した、其頃小說を讀むのが面白くなつて種々なものを讀み初めた、勉は凡ての小說の女主人公を必らず伯母さんに嵌めて讀て居た。

四五ケ月は夢の中に去つた、雪が解ける、草履道になる、菜の花が咲く雲雀が鳴く、勉は書齋に居る事が好きになつた。

或日野宮が手紙を渡した、野宮とは妙に疎々しくなつて居る、併し野宮は其れを氣にするやうにも見へない、手紙は伯母さんからの手紙て、簡單に今度遊學の爲め東京へ行くといふ丈けの通知であつた。

「僕は見送りに行かふ」と勉は言た
「そんな事しなくても」と野宮が言ふ
勉は歸つて叔父に相談した、叔父は一寸考へたが
「好し行け、貴樣は隨分世話になつたて」と言た、其れて二十錢の紙幣を半紙に包んで、此上に御餞と書いて持て行けと勉に渡した。
薄どんよりと曇つた日である、舊無名會員は一同弘前を去る三里許の藤崎村の外れの鎭守の宮て、伯母さんの馬車が來るのを待て居た。何處へ行く人を送るにも、又た迎るにも大抵此の村までと決まつて居る。
軈て馬車が着くと、野宮と伯母さんと其れから伯母さんは車の中から出て來た、一同に丁寧に挨拶して再び車に乘らうとした時伯母さんは泣いた、車に乘てからも泣いた、馬丁が馭車臺に乘つて馭者と並ぶ。皆なから別れの聲が掛る、伯母さんは頻りに泣いた、車が動かうとした時、勉は例の餞を出した、伯母さんは堅く〳〵堅く勉の手を握つて
「勉强して東京へいらつしやい、乾度いらつしやい、身體を大事になさい」と言た、涙が止め度なく其の膝に落る、勉も泣いた。
軈て馬車が動き出す、次第〳〵に遠かるのを見送りながら勉は遙かに寺澤の事を思ひ出した。
一同一緒に歸つた、今は誰しも伯母さんの惡口を言ふものがない、勉は獨り離れて何か考へながら歩

きたかつた。

町へ入ると銘々四離になつた、勉は御城の東御門から拔けて出やうと思つた、空は段々曇つて來るが西は遠火事のやうに明るい。勉が城へ入つた頃は旣に日が沒りかけて恐ろしく美くしい春の雲を染めながら、並木の上の方だけを刷毛で抹かしたやうに薄い光を投げて居た、伯母さんが唱歌を唄つた處は此處だと思ふと頻りに淋しくなる、相變らず城の中は森閑として人語の聲全く絕えたる寂莫の中から折り〳〵鐵砲のやうな音が聞える。濠の中に萍が生え初めて居た。

勉は只だ凡てが哀れに覺へて春の夕暮の雲を眺めた。

と見ると栗の落葉の溜まつた處へ腰を掛けて乙彌樣は釣を垂れて居る、例の薄汚れた袷を着て、疲れたやうな眼を懵乎とさせて浮標を眺めて居たが、暫らく逢はない中に顏は著るしく瘦せたと思つた。

「乙彌樣」と勉が背後から聲を掛けると、大儀さうに此方を向いて

「何處へ行て來しつた」と重い調子でいふ

「伯母さんを送つて來た歸りです」といふと

「あゝ野宮のか、今日出立したか」といふ

「三時頃に藤崎て別れしつた」といふと、

「はあ、もう出立しつたか」と再び繰返して一心に水の面を瞶めて居る、勉も默つて水を瞶めた、水の向ふの草叢から蛙の聲が聞えて、角櫓の壁が次第〳〵に暮色に包まれた。

（完結）



指環

徳田秋聲

貞吉が湯に入つてゐるまに、細君の嘉志子は臺所で顔を熱らせながら牡蠣のフヲイを揚げて居たが、中途でパン粉が無くなりさうになつたので、お松と云ふ子守を呼んで、急いで通のパン屋まで走らせた。子守は裏の木戸口で、棒切を持つて今歳五つになる卯乃と云ふ上の男の子と敲合をしてゐた。卯乃は鉛のサアベルを拔いて「己が乃木大將だぞ」と云へば、お松は「私は大山大將よ」と、落ちさうになる脊の子供を搖りあげやうともしないで、立向つてゐた。十一だと云ふが、色の淺黑い、

鳶色の目をした、毅然した顔で、體も十三四の娘ほどある。女中が拂底なので、繋ぎに柳町の方から來て貰つた子である。秋風が吹いてゐるのに、まだ洗晒しの脛きりの白地を着てゐた。

「パン粉……然う言や可いの」と、口も粗野であるが、長く置く約束でもないので、躾けてやる氣にもなれなかつた。銀貨を帯の間の財布から出して渡すと、お松は速に鍋の方を見ながら、浮の空で返辭をして駈出した。

三

「眞實に家ぢやフライを拵へたつて、牡蠣の一と盤臺も入るんだもの」と、細君は茶の室の隅で飯を食つてゐる義弟の辰雄の耳へ入るやうに呟いた。辰雄は、築地の學校へ、建築學の方を勉強に、大抵五時か六時頃に、家を出て行くのである。飯の時間がおくれると、「あんな遠い處へ通ふのに、電車にも乘らないで、てく〳〵歩くんぢやないか。お察しがないな」と、嫂の遣方が不規律で困ると云つて、ぶつ〳〵不平を言ふのである。嫂の經濟が下手だと言つて能く理窟を並べるのもこの弟であつた。外に修二と云つて、高等商業學校へ通つてゐるハイカラの兄も居た。二人の義弟達の姪にあたる田鶴子と云ふ十七になる顔の豬い娘も寄食してゐた。貞吉は百二三十圓の俸給で、妻子四人と父母の外にこの三人をも食べさして、夫々學校へ通はせなければならなかつた。洋服も袴も拵へてやらなければならなかつた。小遣は父親が、自分の俸給のうちから、毎月月の終に、少しづゝ勿體をつけて、三人に分配することになつてゐた。

嘉志子はパン粉の乏しい牡蠣を、油のなかへ轉しながら、昨日初めて失つたことに氣のついた指環の事

を、色々に考へてゐた。指環は此頃の自分には、然程惜しい品とも思へなかつたが、思出は多かつた。大學を出たての貞吉と新婚の當時、良人がわざ〳〵銀座の方から買つて來て、田舍出の自分にくれた持物の一つであつた。

その頃の世帶は、未だ女中と三人限であつた。家も麹町の方に、小ぢんまりした綺麗な二階家を借受けて、買立の道具などを飾付けた。金もパッパと使ひ、着物も惜氣なく着て、小遣に困るやうな事があつても、さほど苦にもならずに過した。ヂイ〳〵とランプの油が不意に燃竭して、大笑しながら宵の口から寢た夜などもあつた。

卯乃が生れる頃に、田舍から義弟の修二が出て來た。それからヒタ〳〵と二人まで子供が殖え、田舍からも姪や双親、末の弟などがどか〳〵入込んで來た。入込んで來た人達は、名々自分々々の部屋に割據して、思ひ〳〵の日を暮すやうになつた。月給も年々殖えて來たが、生活も石垣へ手を詰めたやうになつて來た。嘉志子はもう指環を買つてもらへるやうな時もなくなつた。

嘉志子は昨日の日曜に、姪と母親と幾年ぶりかで子供をつれて、菊見に行かうとした時、鏡臺の抽斗に、古いカフス釦や、外の指環と一緒に入れておいた筈の其指環が、ふと紛失したとを發見すると、妙にそれが氣にかゝり出した。

「何だ、あんな指環の一つくらゐ……紅い石なんか今時流行りやしない。」

辰雄は、蒼い顏して、そこらを引掻まはしてゐる嫂の背後から嗤つた。

嘉志子は鏡臺の抽斗を、殘らず引張出して見た。茶の室へ出て來て、長火鉢の抽斗を、下から上まで一々搜して見た。帶を締めて、白足袋を穿いたまゝ、彼方ゆき此方ゆきして、目の色を變へて搜しまはつた。

「ピン一つだつて物が失ると云ふとは、餘り好い心持のものぢやありませんわね」と、目弛つこさうに見てゐた姪も一緒になつて、玩具函まで引くら返して見た。而して「有りませんよ、如何したんでせう」と、悦げたやうな目をして部屋の眞中に突立つた。

「無いものはいくら搜したつて見つかりやしない。さあ〳〵、子供が强請んで煩いて、搜すなら、後でゆつくりお搜しなさい。」母親も薄色縮緬の羽織など着込み、小い丸髷の首を据えて、窪んだ目をきよろきよろさせながら言つた。

嘉志子は然して搜してゐるあひだ、頭腦には色々の事が想出された。この兩三年滅切指が痩細つて、如何かすると、子供を抱かへするうちに、あの指環が脫け〳〵したとや、指環を買つた頃の丸く肉づいた手の輭かで美しかつた事なども思出された。その頃の浮々した自分の心持、それから以來の込入つた家庭の事情、變遷と云ふやうなものゝ印象が、閃のやうに頭腦を通つて行つた。而して自分を取圍んでゐる多勢の人達に負けまい〳〵と、始終氣を張つて來た苦しさをも思つてみた。

お松はその時、着替をした末の子を負つて、袷のお負祚天を着せられ、紛援してゐる衆から離れて、庭の日向を飛歩いてゐた。

嘉志子はこの子守が、ちよい／＼銅貨を胡麻化した事などを、ふと想出した。
「けど、些といつて假りて使つてる子に、非をつけるのも厭だし」と思返して、その事は口へ出さずにしまつた。
「今日に限つて、あの指環をはめて行かなけあならんと云ふこともなかりさうなものだ。」
母親はぶつ／＼さう言出した。
「大切な品は大切な品で、丁と覺をして仕舞つておきなさらんからだ。」
縁側で新聞を見てゐた父親も、白い髯を仕扱きながら、眼鏡ごしに此方を見た。
終に嘉志子も可怪くなつた。
「私は餘程如何かしてゐる」と、獨語のやうに言つて、ポツとしたやうな顔をあげて、漸とそこから離れた。
外は埃も立たない、静かな秋日和であつた。色々の濃い色氣の羽織やリボンや、派手なネキタイや、異つた形の新しい帽子を着た男女の姿がぞろ／＼動いてゐた。
この一群は、團子坂の雜踏のなかへ入つて行つたが、嘉志子は氣が浮立たなかつた。而して如何かすると、偶と身のまはりを見廻して、失はれた物を想出してゐるやうな事があつた。
晩飯は何時のとほりの混雑であつた。

可也大きな餉臺が二つ聯ねられて、家族十人づらりと其圍に居並んだ。頭腦に毛のない父親から、漸く獨起の出來る末の子まで其緣に摑つた。末の子は乳が足らぬかして、血色の惡い顔をして、下の方は二本しか生へない小ない齒をカチ〳〵鳴らして食物を漁るやうな目色をした。

ぴたりと厚い髪を油で撫つけた修二の頭腦へ、卯乃は會釋もなく飛ついて坐山戲はじめた。修二は厭厭笑顔をして、亂れた髪を又ぴつたりと兩手で丁寧に押つけた。この弟は辰雄ほど口喧ましい方ではない。たゞ綺麗ずきなのである、部屋には石膏像や水彩畫の額などを飾つて、青い卓子被のうへには立派なインキスタンドや、七寶の一輪挿などが綺麗に配置されてある。家の外の部分が、どんなに亂れてゐても、此處だけは何時も心持の好いほど落着いてゐる。自分の洋服や靴なども、きちんと始末をしておかないと承知が出來ず、時計なども自分のだけは丁と時を合はすやうにして居た。子供がその机に觸らんとすると、厭な顔をして部屋の外へ抱出して了ふ。どんなに強請てゝも鉛筆一つ持たさうとしない。「今に自分で子供を持つてみるが可い。」嘉志子は陰で口惜しがつたが、然し修二はまだ氣の好い方であつた。辰雄のやうに自分の領域を超えてまで、姉に肉迫して來るやうなことは滅多になかつた。辰雄が辛辣な皮肉を言つて、姉と喧嘩をしてゐるのを、ニヤ〳〵笑ひながら、能く傍に見てゐる事があつた。頭腦の能くない癖に、負けまい〳〵とする姉の體度もちと不謹愼だが、弟も隨分猜疑の強い方だと思つた。

父親は上の方に坐込んで、ちびり〳〵と酒を飲んでゐた。此頃田舍から取寄せた[illegible]餞などに自分だけ

箸をつけて、大事さうに嘗めてゐた。

嘉志子は斯して一團が食卓の周に集つたところを見ると、誰れも彼れも默つてもく〳〵口を動かしてゐる良人が慘に見えた。貞吉は如何かすると、學校の成績の優れない修二を捕へて、愚痴を零した。

「早く如何か片をつけるやうにしてくれんと、大勢のものを抱へて、己も實際遣切れんのだから……」

と手元の苦しいことを訴へた。

「衆を頼せうと思ふから、私もお前を仕込んだので……」と、父親は自分のする事だけは丁と出してある其上は各々の技倆次第だと云ふやうな事を、能く口にした。

「月給日に、嘉志子と貞吉と鳩を額めて、支拂の見積などしてゐると、父親は奥の隱居所で、微醉機嫌で謠など謡つてゐることもあつた。その長閑さうな聲には、まだ若い艶があつた。

「こんな不合理な家庭制度があるもんぢやない。己は讀みたい本一つ買へやしない」と、貞吉は陰で厭味の聲を擧げ〳〵、長いあひだ矢張それで通して來た。

「これぢや家を育つてゐるたつて、何の意味もありやしない。傭人なつて、少しは面白い思をする事もあるわ」と、嘉志子も如何かすると熟々厭になるやうな事があつた。

食後子供を中心にして、この家族は一同陽氣な笑聲を擧げてゐた。ふと、今日水口から顏を出した塗師屋の事が話題に上つた。

「眞實に怪しいもんだ。姉さんは休せば可いと思つたけれど、僕はまあ默つて引込んでゐた。」辰雄は言

出した。
「どれ〳〵」と言つて、父親は奥の方から手を伸して、嘉志子が戸棚のなかゝら取出して來た黒塗のお盆を受取つた。盆は四國の方から、結婚當時友人に貰つた布目の生地に、斜模様のある塗をした品である。
嘉志子は、胡散な目色をして、些と塗師屋が構つてゐたところを見て、「然ですか、私も何だか高いので、後で變だと思つたんですけれどね、でも其様に可怪しかないでせう」と、負惜みらしく言つた。
それから同じ塗師の手にかゝつた鎌倉塗の捲莨入や、金蒔繪のある菓子器なども、そこへ取出して來た。それが今日の三時頃である。嘉志子は靜かな家のなかに坐つて茫然してゐた。
「何ぞ塗物の損れたの、剝げたのがございますなら、精々勉強しまして……もう眞の漆代だけで……」
と其男がうそ〳〵と内を窺いた。
「手前はつい此近くに店を持つてをります塗師屋でござえんすんで、眞の其の腰掛仕事に、斯うしてお使取に願ひますので。」
いつも用心深い嘉志子は、ふと其に乗る氣になつた。
「いくらで直すの。」嘉志子は盆だけ出して見せた。
「えゝもう、いくらでも宜しんで……決してお高いやうな事は申上げませんので、」
其男は汚い顔から、目ばかり光らしてゐた。一つ濟んだとき、「お序でございますから、何ぞ外に……

決してお高いやうなとは申上げませんので。」
その男は諄く強願つた。嘉志子は三つまで直させた。その男は湯殿の横で、怪しげな曲物を三つばかり並べて、篠て汚い墨のやうなものを塗くつてゐた……而して日に乾かして、ニスのやうな物を上へ塗つてゐた……と、辰雄は言出した。
「これは、お前がペテンに懸けられたのだ」と父親は盆をそこへ置いて笑出した。
「さうでせうか」と嘉志子は厭な顔をして、菓子器のなかを覗いてゐた。
「満足な塗師屋とした處で、一圓だの一圓五十錢だのとそんな法外な値と云ふのはない。」貞吉も笑出した。
「其奴あ今頃は何處かで鱈腹酒でも飲んでゐるんだらう。」
嘉志子は雲脂だらけの、もぢやもぢやした髪毛の下から此方を見てゐた、其男の狡猾さうな小い金壺眼が目につくやうであつた。
「さう言や、何だか様子が可怪ござんしたわね」と、首を傾けた。
「東京には、そんな輩がいくら居るか知れやしない。」
「然うして取つて行けあ、まあ二度と來るもんぢやない。」母親も惜さうに言つた。
父親や辰雄は、間もなく引込んで行つた。
嘉志子はわざと燥いだやうな調子でゐたが、放心してゐたとが切なかつた。而して「もつと用心深く

ならなけあ……」と、心のうちで思つた。

二人が靜かになつてから、子供に乳を呑ませながら、お松と膝を突合せるやうに坐つてゐた時、嘉志子は又ぞ指環のことを訊出した。自分では深く詮議をする氣もなかつた。

お松は表紙のネタ/\になつた少年雜誌を、膝のうへで見てゐた。田鶴子は灯の側で編物をしてゐた。

「お前何か隱した物はないの。」

お松は鷲のやうな色をした其目を擧げたが、呑込めぬやうな顔容であつた。

お松は柳町の裏通の十文菓子屋の娘であつた。親父は日傭取だと云ふことである。子供が澤山あるが、皆な相當に躾けてあるやうである。お松も小學校へやられた。此夏から半日大學病院へ造花の賣子に傭はれて、二三錢づゝ貰つて來るのである。それが少時こゝに傭はれることに爲つた。

目見えに來た時には晴着を着て、赤い帶を締めてゐた。子供等は直に懷いた。

「花を持つて來てあげてよ。」

二日目に櫻や薔薇や、小い造花を二三種取混ぜて持つて來てくれた。花は可也綺麗に出來てゐた。嘉志子は櫻を鏡臺の鏡の前へ、薔薇を書棚の上の一輪挿へ、紫の菖蒲を寶筒のうへに、リボンや繪紙のやうな物と一緒にしておいた。

二三日經つと、その花が殘らず亡くなつてゐるのに氣が着いた。心づいて、竊とお松の小い風呂敷包

を抜いて見ると、花はその中に仕舞込んであつた。

「面白いことをする子ですよ。」と嘉志子は未に其事を話して笑つた。

それから暫くゐるうちに、此子が買物の菓子やお釣などを、途中でくすねる事に氣がついた。子供の食物を陰で捲揚げた事や銀貨を拾つて買喰したことなども目撃した。

「何か隠したものがあるでせう。」嘉志子は笑顔を作つて言だした。

お梅は怨みつぽいやうな目をして、少し首を振つた。

「眞實に……そんなら可いけれどね、お前はまだ年が行かないんだから、惡いと氣がつかないで、若しや隠したかと思つてね……。」

お梅は萎れて俛いた。嘉志子は可哀想になつて來た。

「それはまあ其として、お前は眞實に何彼に役に立つて、好い子だけれどね、困つたことには、少し手癖が惡いんですよ。お前は隠してゐるけれど、ホラ何時か……。」

嘉志子は一つ二つの事實をあげた。田鶴子は傍から口を添えた。

「君にはちやんと解るのよ。だから惡いことをしちや不可いのよ。然云ふことが癖になると、今に年取つて、好い人になれませんからね。貴女をいぢめるんぢやないの、利にならないから言つてあげるの。」

お梅は目に涙が浮んで、術なげに體をもぢ／＼させて居た。

「もしね、其樣お金のかゝるものと知らないで、お前が持つて行つたやうだつたら、勘辨してあげるからお返しなさい。」

嘉志子は斯う言つて見た。

靜にお松は、默つてづいと起あがつた。而してつか〳〵と玄關口の方へ出て行つた。

外も内も暫らくシンとしてゐた。大分經つてから、格子戸が開いて、外へ出て行く下駄の音がするやうに思つた。嘉志子は耳を澄して、電氣を瞶めてゐたが、急に不安の念に襲はれた。

田鶴子は私と門の外へ出てみた。外は眞暗であつた。お松の影は、曲角の杉垣のところに幽かに動いで見えた。田鶴子は急いで、靜に側へ寄つて行つた。

「如何したの。何處へ行くの」と、肩へ手をかけて、顔を覗くやうにしたが、お松は外ずやうに、肩を横の方へ持つて行つた。

「お前が知らないのなら、知らないで可いからお歸り」と言つても、矢張硬くなつてゐた。

漸とのことで家へ連込んで來たとき、お松は袖で顔を押えて、襖の蔭に喰着いたきり動かなかつた。

嘉志子は、田鶴子と目を見合して默つてゐたが、執拗なこの小娘が、小面憎いやうにも思はれて來た。而して、「きつと何處かに隱してあると、私は思ふ」と、呟いた。

「きつと然よ」と、田鶴子も言つた。

「もし他が出たら、叔母さん私に頂戴ね」と、田鶴子は些と自分の細い彈切れさうな指と、嘉志子のと

を見比べて、「私の指は太いから丁度いゝでせう。」

「えゝ」と嘉志子は笑つて見せた。

「きつと。」田鶴子は念を押した。

學校から辰雄が歸つて來る時分には、お松も何時かこそ／＼と女中部屋へ退つて、寢てゐた。

嘉志子は寢しなに、獨て用箪笥や針箱のなかなどを、今一度引くら返して見てゐた。

捜しあぐんで、其處らを取片附けると、茶の間の時計が丁度十二時を打つた。

嘉志子は矢張氣に爲い／＼、漸と寢床へ入つて行つた。蒲團の中には、子供が三人、づらりと頭臚を竝べてスヤ／＼寢てゐた。嘉志子は疲れたやうな、興奮したやうな重い頭を枕に就けると、先刻田鶴子の言つた事や、今日一日の内外の出來事が、坐に胸に想浮べられた。

弱い心臓が何だかドキ／＼するやうで、咽喉元も息苦しかつた。而して「氣が弱くて、こんな中に生きて行かれるものか」とそんな事を思續けてゐるうち、うつら／＼と夢心地に陷ちて行つた。（完）

和歌[illegible]選

○　　　　百田楓花

かなしげに空に月照るわが涙ぬぐひもあへず柱によれば

さきの日に倚りにし柱今はまた冷たきものとなりはてしかな

うなだれてわが獨りゆく河床の松の林にひぐらし啼くも

あかつきの木立の露にそほぬれてはるかに匂ふ朝の海みる

しら〳〵とみ空にうつるおもかげをみればしづかに涙は落つる

うつらうつら少し痛みを感じたる頭を抑へ白日の街ゆく

○　　　　山村龍子

蟲のこゑ木草の葉色病める君かばかり秋は悲しかるかや

戀ふまゝに戀はるゝまゝに泣きし故わが若き日は樂しかりにし

泣かぬこそかしこしとのみ我れ思ひこの淋しさを知らざりし悔

片時もわれを忘れしことなしと昔めきたる嘘書きて來ぬ

我れかくも悲しきことをのみ記すために學びし字にあらねども

○　　　　關本梁村

涙なき今年は悲しはなやかに過ぐしゝ過去に意味もなけれど

昨日にして今日を頼みぬ今日にして明日をたのみぬわれとあざむき

おもふことおもはぬ事にうつりゆく此かなしみを君は知らざり

よろこびの失せたる胸は悲びとひとしきほどの印象ぞある

世に生くる人にならひてわれもまた世に生きてありをかしからずや

○　　　　小島ます子

嚴かにはた靜やかに語ること有りとごとくも山

は立つかな

ひた心何所へやらむ君も知るかの日車は日を見て咲けり

君を見てはなやく我をやう〳〵と淋しみまさむそれのみぞうき

先づ馴れて伯母よといひしいたいげの人もやう〳〵おとなびにけむ

静なる夜かなといひてまらうどは濃きみ茶あまためて給ひぬる

○　町田不破

うたはずや淋しきまゝをうたはずや何に紛るゝ我が心ぞも

あはれ苔よ生くとはいへど緑てふ一つの色を得るのみにして

蟲ちちとちちとなけども灯火のいや明るきにかなしみもなし

戯れ言のいとかしましき中に居て静かにゑかく君が面かな

君たゞによゝと泣くかなあゝ寧ろ安さは君にある心地する

○　本間五丈原

秋の水さやかに落つる夕山の淋しきまゝに人おもひける

しめやかに花たちばなの香ぞ匂ふ小雨に暮るゝ湯の家の窓

まろやかに緑照るかないく重山雲はま晝のさびしさにして

しめやかに更けゆくかげを仰ぎつゝ月下に等（われ）立ちつくしけり

くれそめぬ草の穂にさく花白し思ひ出のみにたゝずみしかな

○　森園天涙

これに似しいと〳〵淡きかなしみを味はひし日のありとおもひぬ

頬杖つき一人ありにき燈火のじゝとわびなく静寂の中に

新らしき生命をおもふ生涯をおもふ明るき灯に對すれば

秋來るひとりしあれば恐ろしき大天地の嘆く聲する

頁數超過の爲め和歌數頁組置となしたり

俳句　大須賀乙字選

小鳥網

また釣のこと顧みず小鳥網　へき生
芒散る川原日和や小鳥網　同
丘を負ふて紅葉に張りぬ小鳥網　同
茸山の番人もして小鳥網　同
待てば來ぬ小鳥や網につのる風　同
林中を流るゝ水や小鳥網　同
小鳥網張りて鳴子をならしけり　志舟
大群は雲と越したり小鳥網　犬月
小鳥網山田の稲を刈りし跡　鶯溪
小鳥網たゝむ茶畑や日出づる　水馬
禁獵を河に隔つや小鳥網　素水
杉垣の日裏の畑や小鳥網　百貫石
小鳥網かけて芒に歩みけり　黒佛

造林の谷見ゆる峰や小鳥網　武山
生垣の外は菜畑や小鳥網　月舟
茨の實のから紅や小鳥網　芳榔
ほくち火の煙草に遠し小鳥網　曉川
小鳥網罠ぬけ鳩のかゝりけり　痩脚
小鳥網張れば鐘聲遙なり　不騒
何塚か刈らぬ芒や小鳥網　方外
畑中に積む豆殻や小鳥網　虎鳴
網の前をそれる小鳥や木に旭日　瓜鯖
小鳥網寺領の禁を犯しもす　慘冬
小鳥網野菊に裾を結びけり　耳山
小鳥網たゝむを鳥の渡りけり　明兮
小鳥網張りて閑ある欠伸かな　老杉居
小鳥網榛の落葉のかゝりけり　春溪
小鳥網山番が子も交りけり　青城
水塚のほとり稗田や小鳥網　萬葉
小鳥網張つて雑茸探るなり　雨萍
小鳥網しとゞの露に張りにけり　同
小鳥網に實の鳴る蔓のからみけり　風來子
小鳥網の木の間に見ゆや京の町　同
小鳥網かけて晴れ行く富士を見る　人生

小鳥網近鳴らす鳴子惡みけり　同
鶴翼に小鳥網して草に据す　蝶拾
黎播れて小鳥礫や網近に　同
眼の下に吾家低しや小鳥網　不寝庵
坂登りつめし畑や小鳥網　同
茯苓は探せぬものに小鳥網　嵐舟
よくとれし昨日の岡や小鳥網　同
一壺酒を茶にかへ飲むや小鳥網　麥門冬
小鳥待つ農事閑話や小屋の內　同
鳴きしきる囮小鳥や網內外　同
小鳥網落葉溜りといふ谿に　半酔
口笛を吹き行くは誰ぞ小鳥網　同
網張れば離れて下りる小鳥かな　同
密柑山の果て禿山や小鳥網　魔琴
五寺八社立てば見ゆるや小鳥網　同
入鄕訛小鳥のことも詰しける　同
そらんずる學而の章や小鳥網　同
筏師の聲の木魂や小鳥網　馬敲洞
小鳥網語るに落ちしてと悔ゆる　同
杣人にものゝ無心や小鳥網　同
うつろして倒木あるや小鳥網　同

本號應募者七十名、句數千百七十四句。難題なりと見え、好句と覺しきもの殆んど皆無なりし故、極めて寬選となしたり。

募集課題

春を待つ　十一月十五日締切
初東風　十二月五日締切

謹告

小生儀拾月號限り本誌俳壇選者を辭退致候旨公告仕り候處後任選者未決の爲め引續き本號應募句も小生に於て選句致し候此段應募諸君に謹告仕り候。なほ拾二號よりは高田蝶衣君本誌俳壇を擔當さるゝ事に決定致し候同君は雜誌「文章世界」の俳壇を擔任致され居り雜誌「アラレ」の編輯にも與り數多の俳句專門雜誌の選者をも勤め居られ斯道に定評ある新進氣鋭の名家に候へば益々奮つて御投吟の程希望仕り候。頓首。

拾月貳拾日　撓石識

掟

一、應募句は今後淡路國津名郡釜口村高田蝶衣宛郵送の事
一、一人三十句以內の事

送漱石先生之英國

蝶衣

大洋の秋を思ふや時雨にも
秋天高し鵬翼を伸ぶるに足る
病養て師の歸期俟たん秋を我

九月二十九日金澤の同人余が爲に送別句會を催うす、恰も名月の夜なるを惜哉雨歇まず、席上留別の句をも物す

漱石

英國留學拜命

晩稻田へ早稻田の案山子移すなり
別るゝといふに况んや秋無月
秋雨のつめたき袂拂ひけり



溫泉宿の非衞生的設備

松巡

衞生思想は最近醫學の進歩に伴ひ今日に於て頗る發達したり、其は目に見えぬものは無形のもの、無形のものは絕無のものとして、見ゆるもの以外に恐ろしきを感ぜざりしが、今は目に一丁字なき者までも聞き傳てに我目に映らぬながら實は恐ろしき黴菌なるものの存在するを知り、甚しく神經質となりぬ、進歩せる衞生的設備は輿衆の衞生思想の發達如何に拘らず常に要せらるべきものながら、病原に盲目にして神經の遲鈍なりし昔時よりも、病原の知ら

れて神經の過敏なる今日には一層其必要を感じ一層其完全を期せざるべからず、疫神我村に入れりとて辻々に神饌を供へ家々に呪符を貼り騷ぎながら、而かも親しく病家を訪ひて病床に近づき、その氣息を嗅ぎ、其咯痰排泄物に觸れて夷然たりしものも今日檢鏡法の精密となるに從ひ諸種の黴菌の發見せらるるに及びては盲者忽ち明を得て俄に蛇に恐れまどふの態あり、夷然たるの昔時に在つては病毒の侵害は只物質的に止まる、恐れまどふの今日に於てはその侵害は更に物質的心理的の二つに渉る、而して病毒感染の疾さと鋭さとは後者に於て一層激甚ならざるべからず、輿衆の擧つて多感となり、春秋二季の面倒なる大掃除にも何等の不平なく命の儘に進んで行ふの今日に於ては衛生的設備は彌が上にも完全を謀らざるべからざるなり。

思想は實行と繋がる、衛生思想の獨り發達して衛生的設備の之に伴はざる事固より有るべからず、今日を以て昔時に比するに吾人の祖先の知らざる種々の其施設の存在するは言ふを待たず、大掃除既に然り、更に避病院、豊癈園の如きを擧げば頗る多かるべし、完全を望まばそは尙ほ不滿足なるもの甚だ多く、例せば家々の糞尿を白日汲み取らしめて滿都の空氣を不淨ならしむる、共同便所を地上に露出して夏の街路の呼吸をいぶせからしむる等、何とか改善の策を講じ、糞尿の如きは西洋流に之を汲み取らしめずして直に地下の大溝渠に導き、更に之を大海に放流し去らば如何、共同便所の如きも亦之を地下室となさば如何とも思はるるの類多けれど、吾人は少くも凡てが進歩の階級を踏みつつあるを思ひて敢て現代を謳歌するを厭ふものにあらずとはいへ盲者猶ほ未だ全く明を得ず、其注意の疎なる處に於て未だ甚しく恐るるに至らず、改善の急にすべく、而かも急にせんとすれば爲し得る事決して彼の糞尿若くは共同便所のそれの如く、爾く困難ならずして猶ほ閑却せられ居るものを見るを如何せん。

吾人熱鬧場裡の奔命に疲れて時に山陽水畔の溫泉宿に行くに、往々にして、顏色葱葉の靑きよりも靑く、形容柳條の細きよりも細き肺病客と壁一重の隣室に坐し、力なき喉頭五六分の咳嗽の聲に不安の魂をそゝられ、それと心付きては食味を減じ、足地に疎く、匆々に行李を收めて、折角に興を覺えし田園の靜趣も今は何處、八千草の花の細徑に胡蝶の幽姿をも尋ね煩ひ、居待の月の小欄に蟋蟀の淸韻をも聞き詫びて他處に移ること一再ならず。

溫泉の人身に效あるは其湯沐によるよりも多くは其境の幽邃閑雅以て胸中萬斛の紛塵を遣るに足るものあるによる、而して單に病客のみならず健康者も亦行く然らば旅館なるもの單に營利的の考より多くの旅客を迎へんが爲にも少しく顧みる處あり、何等か客意を快適ならしむべく少くも不快ならしめざる程度になりとも設備に顧慮する所ありて可なり、單に病客にのみ限りていふも其中又傳染病者と非傳染病者の別なるに於ては從つてそれ等を一屋宇の下に收めて危險を感ぜしむるが如きは今日の進める衞生思想の下に於て寧ろ甚だ暴ならずや、共に一屋宇を占むる猶ほ可なり、察して遁るゝを得、されど我より點瞬の前に、病者が我室より行李を收め去りしとせば如何、吾人は知らずして黴菌と同居し、黴菌を呼吸せざる能はず、即ち早晚我命根に肉薄する煬毒の中に坐せざるを得ざるなり、思ふて此處に至れば慄然として戰かざるを得ず、吾人之を以て往々彼等溫泉宿の主人を詰るに、彼等は往々手を頂天に加へて「我等も爾く感ずるも病客の來るに辭の拒むべきなくて」といふ。去れどそは謬れり、然らば彼等は何が故に看板代りの泉液の成績表に、傳染病者をも招徠するの字句を並ぶるぞ、彼等の語る所にして僞なくんば之よりして先づ抹殺すべし、危險なる病者は自ら跡を絕たん。

吾人は必ずしも彼等憐むべき無辜の病客を無暗に溫泉宿より逐ひ去れとはいはず、只何等か設備の適切なるものあるべきを思ふ、而かも又想ふに一私人の經營としては病客と普通客とを截然區劃し、互に安んずる所有らしむるの設備は經費の上に於て難きものあるべきか、然らば如何、病客は元より多からず、一鄉の同業者の合資組織により一小病室を建築し、之には十分醫學上の注意を拂ひたる病院的設備を採用して、一向ら病客に便なるの方法を講ぜば、然らば彼等に於ても共害や現在に於けるよりも遙に大なるべく、而して普通客と旅館と各々滿足し各々利益して毫末も障礙あらざるべし、吾人は之を以て利に敏き彼等旅館主人の自覺を促すと共に、又勤勉なる我衞生當局者の督勵をも併せて希望すると爾かいふ。



歌舞伎座と東京座

酔美生

▲團藏の師直、直助權兵衛、どこまで澁く、しつきりとやり、雁次郎の盛綱、忠兵衛、どこまでも花々しく、賑かにやり、藝風の兩極端を示してゐた。忠兵衛の花道の出は艷氣と愛嬌を通り越して、ちと巫山戯氣味になり、階子段を驅け下りて八右衛門に喰てかゝるあたりは息も吐けぬ妙味あるが、「大和の親」をいひ出してよりはうるさく梅川を顧み過ぎ、盛綱も「その座一寸も立たせ申さぬ」と太刀を持て身構へるあたり、「敎へたも敎へたり習ふたも習ふたり」のあたり胸の透くやうに調子がよいが、科白はいつも出上り尻下りて單調なるのと、母の顏を覗くのゝわざとらしいのと情がどうもよく移らぬのが大疵てあつた。一言にしていへば雁次郎はリズムて動く、芝居上手の役者てあるといふ感じを尙更ら強めた。師直は床て武藏守高師直と呼出しても拍子木も入れさせず、大紋も繕はず、顏さへも振らず、只僅に眼を瞬くばかり、少しやり足らぬ氣もずるが、顏世を呼び置いたとの直義公の言葉より揚幕の方へ眼を配り、顏の相好を崩して幕切になるまで拔目なく顏世の擧動に注意し、澁い中に充分の色氣を持たせた處最も感服。殿中の場は團藏にしては取立てゝいふ程の事がない直助權兵衛あつさりとやつて而かも妙味津々。伊右衛門に向てのおめいも餘程剛慾だれ」のあたり、「仇を取らにや置かれえ…とサいふ所だが」のあたり眞似手のない旨味あり。女子供や素人は無論雁治郎に團扇を上げやうが、黑人連は團藏に團扇を上げるか、大負けに負けて引分にするだらう。

▲猿之助の傘屋法橋は仝優近來の大出來、稍々もすれば遣り過ぎる仝優の癖を抑へてちつとも出さず、眞面目におとなしくして居るが敬服。淸水堂の述懷はほろりとさせ、娘の船を見送る身のこなしは踊りで仕上げた旨味を充分出し、妻の遺書を見ての驚もよくやつた。八右衛門と和田義盛も無難にやつて除けた。松助の宅悅は天下の絕品と定評あるが、餘り樂にやり過ぎ、時には見物を馬鹿にするまでやるので多少嫌やな處もある。「あんまりお前さんが可愛相だから」とお岩に語り出すあたりから大體の表情はもとより言ひ分ないが、今少し謙抑してゐて貰いたいやうな氣もする。萬野も固より專賣物、他人の及ばぬ出來榮びてあるが「貰はんようお出てなはんしたな」のいひ方は操り過ぎ、顏の作り、着物の好みには批の打つ所あるを免れぬ。此二人ては土俵は預り丸は松助といふ處てあらう。

▲芝翫の早枝と梅幸のお岩とおこんはなか〳〵よい。前者の梅川後者のおかるは感服出來ず、前者の篝火と後者の小平と判官とは言語道斷だ。母の遺書を見て淸盛の娘なりと知て驚く早枝の表情。相好變れるを鏡に驚くお岩の態度、共に他に眞似手がない。篝火は憂がちつとも利かず、小平は却て滑稽の惑を與ふるばかり、おかるは丈が高過ぎ、小鼻の兩脇の皺が目に立つて興を殺いだ。判官はどうしても楔が一本足らぬ、これこそほんの引分角力であらう。

▲羽左衞門の若狹之助。背丈恰好申分ないが意氣込は吉右衞門の歌舞伎でやつた若狹之助より劣る。「左程でも、ブゥ御座らぬわい」などブゥを入れるなどブゥと吹き出したくなる。殿中の引込にも「馬鹿な侍だ」を略したは違いやうでもあるが物足らぬやうでもある。貫は一通りよくやるが怒つた顏は險相一方になつて、色氣も艶氣もちつとも失くなつて了ふのはあの役としては損と思ふ。「そんなら喜助、サ、來い〳〵」のあたり輕くいつて洒落にならぬは感心。八百藏の淸盛一生懸命にやつて居るのを買ふべく、治右衞門はサラ〳〵とやつて居るのが取得か。この取組では團扇を羽左衞門に擧げるに誰も異議はなからう。

新刊批評

▲史學叢說第二集　星野恒著　冨山房發行

老史家星野博士の論說、考證及び涉史隨筆八十三篇、並に紀行文一篇を收めたもの、史實を學ぐる精至り細盡し、右に比し左に較し、然る後斷々乎として獨自一己の所見を語るところ、敢て奇說の人を驚かすを勉めずして、而かも今更に他の耳目を聳動せしむる底の發見もある、讀史家の机上に一たびは供へざるべからざる好著であらう。(定價貳圓貳拾錢)

▲新文章講話　五十嵐力著　早稻田大學出版部發行

此著者には前に文章講話の一著があつて少からず新しき試みを示したものだが、本著は更にそれに添ふるに東西の文章思想史五十餘頁、其中にはアリストトルの修辭學梗概二十餘頁が收めてある、それに文章文體論の四十餘頁、國文に於ける平安朝文章の價値論十餘頁、それから「緒論其一」の自然主義一流の新式文章論の二十餘頁、其他を以てして優に前著に倍する頁數としたもの、組織齊整、敍述平明、新舊兩樣の文章を解說なして周匝を極めたるところ、先づ文章論の大成せるものとして坊間の類書に群を拔くものだと斷言する。(壹圓七拾錢)

▲作文應用常識修辭學　五十嵐力著　服部書店發行

前の新文章講話と同じ人の同じ趣の著述ではあるが、之は其分類組織の上に於て必ずしも備はるを用ひぬものから、而かも古來一切の修辭論を煎じ詰めて何人にも分り易く何人にも用ひ易く、更に又何人にも與多あるべき樣に、常識的に變數ある語法を以て極めて平明易直に說き明し

た所に別樣の長所がある、卷末に添へた詩歌篇、又啓發せらるゝ讀者は少くはあるまい。（正價金壹圓拾錢）

▲佛敎辭典

佛敎に關する學問語、普通語、並に高僧、寺院、經籍、地名等凡そ二萬語を收め、之を五十音順に配列したもの、その長所と見るべきは、その解說の單に佛語のみに由らず、勉めて一般に行はるゝ哲學用語を用ひたると、文字に繁冗の失なく、簡にして要を失はざるとにある。（定價二圓）

▲獵人日記　戶川秋骨敲戶會同人共譯　昭文堂發行

露西亞の農民並に農民生活を描き、特に中央露西亞の風景を巧に寫したものとして夙に知られ居るツルゲーネフの原作スポーツマンス、スケッチエスの譯である、敲戶會同人四名と戶川秋骨氏と都合五人の共譯といふだけ、矢張り每節多少手心の違い用語の優り劣りの感ぜられる節もあるが、概括していへば十分流麗に、我々の耳にも、能く響き得るこなれた文字で寫されて居る、紙數七百六十四頁の大冊著者等の勞は多大であろうが、此種の泰西名著の飜譯の猶ほ頻に續出せん事を欲する。（正價金二圓三拾錢）

▲北米の花　田村松魚著　博文館發行

松魚氏の歸朝土產とでもいふべき著述て、氏の七年間の海外生活が清麗雅健なる文字の中に織成されるところに、一種新しき思想、感情も仄見えて面白い作である。（定價金一圓拾錢）

▲素人宗敎觀　石橋臥波著　寶文房發行

卷頭に先づ加藤弘之氏の序がある、それを又讀むと「多少反對せればならぬ點が無いてもないけれども併し先づ我意を得たものである」といふ評語がある、以て本書の立場と從つて其價値とが大凡に知れるてあろう。吾人は之を以てまだ思想若き一部の靑年に下らなき煩悶を止めさせる位に迄は効果あるものと思ふが、それ以上には尙ほ十分の檢討を望んて止まぬものである、正しき哲學の養素あるものにはその神觀並に靈魂觀に到底承服するものは無からうと信ずる。著者の刻下の人生觀だけは打毀さずに濟むが、而かもそれに寓害すべき力ある悟境今一つ奥に潛在するを斷言する。（正價金五拾錢）

▲逆境脫離策　波多野烏峰著　實業之日本社發行

無限の物慾を遂げんとて有限の物質を追へば、徒らに煩悶焦燥を藥せざるを得ぬ、本書は利に奔り名に走る現代に顧みて其救濟策を譜じたもの、古今東西巧に思慮を內省に用ひて逆境を脫離し得た人その言行を拾集してある、一讀すれば熱頭を冷却する効は確かだと信ずる。（定價金壹圓）

▲品性の勢力　蘆川忠雄著　實業の日本社發行

これ將た現代の痛弊を救ふべく、品性なば人生を左右する最大の原動力、義務の觀念に現るゝ品性等、以下十四章に分ちて精密に說述したもの、精神修養の助になるものだ。（定價金壹圓）

▲現代之風雲兒　摩天樓主人著　昭文堂發行

收むる所怪傑權兵衛、大人曾根荒助、才人原敬、風雲兒新平、口嘩御前正毅、食鬼嘉太郎、中納言公望、の七人、現代の花形役者を斬う迄生け取つて、前よりし後よりし、右よりし、左よりし、十角八面縱橫無碍に忌憚なく評論を試みたもの、皆生きて潑れて居る人間、事の眞否貶の當否は暫く措いて興味ある讀みものだ。（六拾五錢）

▲人格の鍛錬　蘆川忠雄著　實業之日本社發行

人格の如何なるものかを示し、更にその現はるゝ個々の狀態を語り、進んでその修養方法をも說いたものだ。(金卅五錢)

▲實業讀本　奥村喜一郎著　實業之日本社發行

名けて實業といふも此篇は先づ商家の丁稚用として、普通の商業上心得べき一切の事項を細大洩さず、極めて平易なる叙述を以て簡明に敎示したもの、之によつて益を得るもの定めし多かろう。(定價金廿五錢)

▲英和對譯日本財政史論　渡邊萬藏著　有斐閣書房發行

外人にして我財政史研究に志あるものゝ史料にとて初は先づ英文に書いたもの、それに更に和文を添へて此一書を爲したのである、簡單ではあるが、大綱を提擧して殘す處なく、我國財政の推移は十分之によつて明らめ得られる。(定價六拾錢)

▲東洋倫理修養寶鑑　岩橋豐嶋兩學士編　博文館發行

卷頭井上遠藤兩博士の序文あり、井上博士は曰はく『吾人は學問と修養と、兩者を併せて、之を全うすることを期せざるべからず。然るに維新以來知育の重んぜられる結果、世の青年多くは學問を主として、修養を務むることを知らず。爲めに平衡を失するの弊を來たせり。云々』と。今日の青年に向て修養の特に必要なる所以を說き、この書を推薦せられたるを見ても、既にこの書の眞價は知らるべし。遠藤博士も亦道德の範を東洋に求むるの可なるを論じ、この書の如き主として東洋古來道德格言の修養に益ある者を蒐集したるものを以て、其指針となすべきを言へり。今之を實際に見るに、その蒐集せる材料は、四書五經の類は勿論、老莊列等の諸子より、我國德川時代に於ける大儒の著書に至るまで、凡て修養に益ある名言、佳句、實話、等を網羅し、一々出所を明かにせり。故に單に修養の指針たるのみならず、又以て東洋倫理學研究の資料たるべく、布敎家の材料たるべく、青年學生の作文資料ともなるべき書なり、而して製本美なれば學者机上の珍として、敢て之を江湖に薦む、今試みにその內容を紹介せん。第一自已篇第二家庭篇第三社會篇第四國家篇第五武士道篇とし、各篇更に之を細項目に分類して、讀むに便ならしめたり。

▲大岡政談村井長庵　塚原澁柿口授　左久良書房發行

新講談叢書第一編として發行せられたるもの、塚原澁柿園口授し、大川馬嶺氏講演し、大阪每日新聞社員之を速記したるもの也。普通の講談よりはいくらか文學趣味饒か也。(定價六拾錢)

▲恐怖　岡田八千代著　水野書店發行

筆達者にすら〳〵と書きあれども、文章句法等にコンザエンションの箇所多きの嫌ひなきに非ず。(定價三十五錢)

▲俳人鬼貫　宮垣四海編著　內外出版協會發行

鬼貫を簡單に評傳し、附錄として鬼貫句集を添へたり。(定價廿五錢)

▲少烈婦　長谷川康註譯　鐵文館藏版

少烈婦問題の原文の譯註也附錄として和文英譯五百題あり(定價卅錢)

頁數超過の爲め、新刊書十餘種の批評は次號に讓れり

文學博士芳賀矢一先生新著

新刊　中村不折畫伯挿畫

月雪花

洋裝頗美本　全一冊　定價金八拾錢　郵稅金八錢

月雪花に關する本邦古來の風流韻武男譚を集め、詩あり、歌あり、史實あり、傳說あり。之に加ふるに論斷あり。偉大なる國民の歷史は月雪花を通して紹介せられ、特殊の國民性は本書を閱讀して、始めて了解せらるべし。豈に啻に健全なる國民讀本としてのみいはんや。歌人、畫家、教育家、愛國者如何なる人も、一度本書を繙けば愛翫措く能はず、誦讀數回に及ばざれば已み難き感あるべし。家庭は勿論學校軍隊に關係の人、恐くは本書を見逃す能はざるべし。

兩書共に猛烈なる歡迎を辱うし最も短時日に於て數萬部を賣盡したり

東京神田區小川町一番地

文會堂書店

電本一四貳壹番　振替參五壹參番

森槐南先生校閱　結城蓄堂先生編

最新刊　註釋附

和漢名詩鈔

袖珍全一冊紙數八百頁　定價八拾五錢　郵稅八錢

本書は本邦及び唐、宋、元、明、清等詩壇の名家四百有餘人の傑作を撰拔し總計八百有餘首を採錄す。幽婉典雅なるあり慷慨悲憤なるあり。漢詩の精華は殆ど網羅し盡して和漢古今の奎璧一堂に會するの觀あり。高尚なる娛樂趣味ある慰籍は滾々として盡きず。加之一詩毎に讀方註釋大意の三項に別ち說明したれば何人も容易に故典の意義詩の大意を解するを得べし。裝釘最も優美ポケット入小形本にして攜帶至便。紙質印刷共に精良汽車汽船電車內の繙讀にも妙なり、處世の伴侶として詩文の資料として紳士誦すべく文人墨客攜ふべく青年學生には必攜必讀の書と稱すべし。

●見本御入用の御方は郵券貳錢封入御申込を乞ふ

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　日本橋呉服町　北隆館
仝　本郷本富士町　盛春堂
仝　京橋鎗屋町　良明堂
仝　日本橋本石町　至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

○壹冊定價　金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（外國郵税八錢）

冊數／區別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵税共		

▼但し特價號は規定以外別に代金を申受くべし▲

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割增の事
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十二年十月廿六日印刷
明治四十二年十一月一日發行　（禁轉載）

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野銈一

發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場



明治三十年一月二十九日 第三種郵便物認可